

ざる也。大和魂は徒らに弱いものいぢめをせぬ氣象に非ず。日本建國以來三千年の歴史を有す。

(明治三十一年二月)

腐蝕せる果物

學生の胸襟は尤も快調に尤も自由ならざるべからず。夫の宗教的信仰なるものは哲學問題の解釋を豫想す。是れ彼等の務めて忌避すべき所に非ずや。宗教的信仰を以て充たされたる青年は、猶ほ成熟に先ちて腐蝕したる果物の如き也。腐蝕せる果物は往々にして成熟の味を有す、然れども是れ實は人を害し己れを傷ふもの也。

今や各地の中學校、高等學校の青年學生にして、宗教的會合を催し、各其の辯する所に盡さむとするものあり。是れ即ち知識の關門を杜絶し、自ら前途の進歩を沮遏するもの、寧ろ大いに究學の本旨に乖離せりと謂はざるべからず。昔、所謂スコラ派の哲學者は、信仰中に

知識を求めたり。吾人は今の青年學生をして第二のスコラ派たらしむるを欲せざる也。教育當事者たるもの、深く此點に注意して相當の監督を怠るべからざる也。

(明治三十一年二月)

國民歌を撰べ

國民歌を撰べ、是れ民心統一に不可欠也。一定の國體あり、一定の國民道德あり、而して一定の國民歌無し。大典丕儀に際して國民の謳歌せむとするもの其れ何によらむとするか。「君が代」の歌、洋々太平の象あり。されど尙ほ沈靜幽寂の格調あるを恨みとす。未だ生々的、進取的、尙武的大和民族の心血を鼓舞するに足らざるなり。吾人は國民的大抱負と國家的大理想とを發揚せる、更に雄大に更に壯烈なる國民歌を要す。

歌人よ、樂家よ、眼を擧げて是の一大事業の卿等の頭上に懸れるを見よ。

(明治三十一年三月)

無定見を誇る學者

今の學者と謂はるゝ人の中には、己れに一定の意見無きことを誇るの風あり。こはいみじき心得違ひにあらすや。學理上、又實際上に一定の説を立て、是れによりて、世の衆愚を導きてこそ、一世の師表として仰がるゝ價值もあるなれ。ざるを説無く意見定まらぬを學者の常と思へるが如き人は、學者の天職を如何に心得たるにや。

素より定まらぬを強ちに定めよとは謂はじ、思想は夙斷に害ありて熟慮に益あること言ふまでも無し。され、今の學者、某の事、某の理に就きて意見を問はれたらむ時、吾れはさる事に就きて定まれる説を樹つる程輕率なる學者に非すと様に、己れの意見の定まらぬを誇り顔なるは何事ぞ。吾等假りに、一個の學者として、かゝる間に確答する能はずとせば、赧然として其の學の淺く其の識の到らざるを恥ぢむとこそ想はるれ。

あ、無定見を誇る學者は、是の社會、是の國家に何の用ありや。(明治三十一年三月)

學者の誤解

凡て人は其の信ずる所を忌憚無く公表するの勇氣無かるべからず。己れはかく信ずれども他人は如何に思ふらむ、若し笑はるゝことあらばなど思ひわづらふは、なべて志弱く膽氣に乏しき人の常ならむかし。古より、かゝる己れの固く信ぜる事を爲し得ざる人の大事を成就したる例し無し。學者に於ても同じ事なり。

某の時、己れ固く然りと信じたことは、其の時を然りと公言するに於て何の憚る所やある。人は己れの意識を超えて何事かを信じ得べきぞ。又某の時、固く然りと信じた事も他の時然らずと固く信ずることあらば、其説を改むるに於て又何の憚る所やある。それを豹變なりと云ふは思想の變遷てふことを解せざる人の言のみ。人知は生れてより死ぬるまで斷えず進歩すること、猶ほ哲學の思想が歴史と共に斷えず變遷するが如し。人間、知に一定固有の眞理なるもの無し、是の斷えざる進歩其物が則ち眞理なりと知らずや。

もし學者にして一定渝らざる意見を樹てむとせば、それは臨終の際に於てするの外無かるべし。又哲學者が歴史上に萬古不易の説を立てむとせば、それは歴史の終る時に於てするの外無かるべし。死は一人の思想を固定す、されど歴史の始めなく又終りなきを如何にすべきや。所詮眞理は變遷の外に無し。學者が客觀的に萬古易らざる意見を定めむことは思ひもよらざるなり。されば人々其の時々に固く然りと信ずる所を然りと公言するの外無かるべし。

斯く言はば、其説且暮に改まり、散漫として歸する所無かるべしと憂ふるものあらむか。さりながら、愚昧輕佻の輩にこそかゝることもあらめ、苟も識見ある學者にありて、さる憂は萬々無かるべし。まこと、學者と呼ばれむ程の人は、よし其説如何に渝るとも、一定必然の道によりて發達するものなれば、前なる説と後なる説とを繋ぎ考ふる時は、一部の小思想史を現すべきなり。さればかゝる學者の説は、其時に固まらざる代りに、其の發達の道に於て定まれりと謂ふべし。古より大いなる學者にありと謂はるゝは是の意味に於ての一定の意見なり。

今の學者が其の信ずる所を公言するに憚るは、蓋し斯く思へばなるべし。——吾説は過去

に於て變化し來れり、吾れは今日現に固く信ずる所あれども、過去の例によりて類推する時は、是れ亦明日に至りて渝るやも測られず。されば吾れ今是の所信を公言せば、そが萬一明日に至りて渝りたらむとき、變説として嘲けられむ。是の嘲りを免れむには、吾れは所信を枉けて非を遂ぐるの外無からむ、是れ共に吾が忍びざる所なり、如かず暫らく緘黙を守らむには——と。

かゝる緘黙の謂はれなきことは、先に述べたる所にて明なるべし。畢竟眞理には生命あり、人知の發達は即ちそが現はるゝ所なり。夫の博物學者がピンもて蝶や蜂を刺して動物の標本を作るが如き考にて、一定固着の眞理を捉へむとするは、いみじき誤解ならずや。世の學者が其の固く信ずる所をだに公言し得ざる迄に怯懦なるは、所詮是のいみじき誤解に本づく。彼等にして其の學者たるの天命を全うして人生の爲に盡すあらむと欲せば、先づこの大段的誤解を擺脫せざるべからず。

(明治三十一年三月)

死學者と守錢奴

古にありては學は氣を養ふにあり。今の人、一たび儒衣を服すれば、反つて奄々として將に絶せむとす。是れ何の象ぞや。人の爲に學あり、學の爲に人あるに非ざるなり。專念學に力む、名は則ち嘉すべしと雖も、而も翻つて人生の目的を遺却するあらば、是の如きの學はた是れ何爲るものぞ。

吝嗇にして錢を是れ蓄ふるもの、人は是れを守錢奴と呼ぶ。錢なるもの素と人の爲に存す、人、錢の爲に存するに非ざればなり。苟も人世に益なくむば陶朱の富は半錢の功無し。然らば則ち何ぞ守錢奴を嘲りたる所以を以て夫の死學者を罵らざるや。

所謂死學者は守錢奴と相距る幾何ぞ。形あるが爲に錢の殊に賤しむべきか、形無きが爲に學の獨り貴むべきか。其の人生の目的と方便と混同するの誤謬に就ては、兩者些の徑庭無し。

(明治三十一年三月)

世豈所謂儒服なるものあらむや

昔者孔丘、常に章甫の冠を戴き、縫掖の衣を着く。魯公見て其の儒服なるやを問ふ。答へて曰く、丘壯にして魯に居り、長じて宋に遊ぶ、故に二國の俗に隨ふのみ。世豈所謂儒服なるものあるべけむやと。

以て今の學者を警しむべし。世豈所謂學者なるものあるべけむや。

(明治三十一年三月)

國學家と古物屋

國民精神の發揮を以て今の國學家に望むは行れる哉。是れ猶ほ古物屋に向つて考古學の編述を望むが如けん。

(明治三十一年一月)

ハイネ

讀賣の記者なにがし、獨逸の詩人ハイネをば『中古派の勇將』と書かれしはゆゑ、しき誤り
とこそ覺ゆれ。ハイネはバイロン等と共に中古派より近世文學に移る變遷時代の詩人なるこ
とは、史家の定論と云ふべきに非ずや。

(明治三十一年三月)

難者に答ふ

讀賣海外騷壇記者に

是の記者がハイネを中古派詩人中の勇將と評せしをば、吾れ『こは誤りなり、ハイネは中
世派以後の所謂變遷時代の詩人とこそ云ふべけれ』と斷言したりき。

然るに記者は再び其の紙上に於て吾れに告げて曰く、太陽記者の言ふ所心得難し。ハイネ
は文學史家の定論によるも、其の作品に就て見るも、中古派なることは争ふべからずと。

吾れは記者のかゝる論旨に就て争ひを爲すを避くべし。何となれば、ハイネの愛讀者たり
研究者たる吾れにとりては、餘りに相應はしからざる問題なればなり。

唯、一言記者に問ふべし、記者は何等證據ある獨逸文學史を讀了したることあるを吾れに向
つて明言し得べきか。作品の批評の如き、其後に於てするも晚からじ。

大村西崖に

吾れ西崖が『藝苑饒舌』中に謂へる所の審美の正見は、ハルトマン氏が具象理想説の一面
に過ぎず、狹隘なりと評しき。

西崖吾れを難詰して、彼は未だ曾てハルトマン氏を知らず、されば其説が氏の具象理想説
と如何の關係にあるやをも知らず、彼の説は印度の佛典より來れりと謂へり。

吾れ答へて曰く、吾れは西崖の説は印度より來れりと云ふを否定せじ、又印度より來れるも

のの外に幾何ばかり多く西崖自らの創見を具せりと云ふも妨げじ、吾れは唯、其説が、ハルトマン氏の具象理想説の一面に過ぎずと言ふのみ。

西崖は又狹隘なるもの何故に誤れるかと問へり。

吾れ答へて曰く、狹隘てふ概念に誤謬てふ屬性なきことと言ふまでも無し。唯、西崖の説がある如く狹隘なるは則ち謬れりと謂ふのみ。

吾説は是に至りて具象理想説の批評に入らざれば已まざるべし。されどこは是の場にて述べべき事柄には非ざるべし。幸に予は哲學雜誌に於てハルトマン氏の美學を批評しつゝあれば、西崖は來らむ月々の同雜誌をつぎ／＼に讀まるべし。——(全集第一卷參照)

綱島梁川に

吾れ前々號の是の紙上に『詩的の兩面と其利弊』を論ぜしに、早稻田の一秀才、綱島梁川は、近刊の早稲田文學に於て精細の批評を述べ、吾説を誤れりと難じたり。吾れ先づ梁川に告げて子の駁論を熟讀したることを確かめむ。

吾がかの文の目的は、素一派の詩人的經世家とでも稱すべき人に與へて、其の空想の希望と現實の主義とを混同せるを戒むるにありければ、文字の使用に就ては或は科學に見る如き精確を缺きたるものありしならむ。唯、其の論旨の歸一に至りては、吾れ決して他の批難を容れざるなり。梁川は文字の差別を索むるに忙はしくて、吾説の解釋には力めざりしが如し。但し少くとも看る人の誤解を招きたるの責は吾筆の到らざるに歸すべし。されど吾れ、梁川が吾れを正解せる部分にも、幾多の反對説を有す。こは梁川と吾れと依りて以て問題を論すべき根本の思想に於て同じからざればならむか。吾が道德主義は梁川が云へる如く飽く迄現世主義なり。吾れは吾が是の主義の解釋として、去る一月の是の紙上に掲けたる『國家至上主義に對する吾人の見解』(全集第四卷)てふ一論文を一讀せられむことを梁川に乞ふべし。かの論文の中には、吾が今の場合に於て梁川に答ふべき大部の答案を具有せりと信すればなり。

——(全集第二卷參照)——

(明治三十一年四月)

實在と空想

『日本國、一名是れを君子國と稱す。然るに今の日本に一人の君子無し。伊藤博文侯は大政治家なるべし、然れども君子に非ざる也。濱野茂君は大實業家ならむ、然れども君子に非ざる也。日本は寧ろ才子國、不正鐵管國と改稱するの必要無き乎。』

『偉大なる事業とは貧者弱者の爲に盡す事業を云ふ。英國の大なるは其の印度帝國を有するが故に非ずして、其の黒奴の賣買を廢止せしに依る。魯國の偉大なりしは西比利亞を其領に加へし時に非ずして、其の亞歷山帝第三世の時に當りて四千八百萬の農奴を解放せし時にあり。』

『萬國無比の國體を有する日本に、無能貪慾薄情なる貴族の存在すべき理由ある無し。世界の君子國に詐欺師に類する紳商、博徒に類する實業家の跋扈する理由ある無し。敢て忠君愛國を以て誇る大方諸先生の教を請はむ。』

是の如きは萬朝報紙上に連りに正義と人道とを揚言する内村鑑三氏が近時の言論。事實を枉げて自ら媚悅するは吾人素より取らず。但し自己の美點長所を負ふて自ら矜持する事は個人としても國家としても極めて必要な事と思惟す。吾人は他の公平なる批評に對して自家の妍醜を知らむことを利とす、唯、偏へに他を擧げて自ら抑へ、専ら自己の醜所短所を中外に夸揚するを以て大國民の風度となすが如きは、吾人遂に其の可なるを見ず、抑、亦時勢に盲なるもののみ。吾人を以て見れば、眞に時勢を知るものは必ずや我が國民の自尊心の愈々旺盛ならざるを憂へむなり。内に自ら負ふ所無くして、而して外に其の大を致せしもの、未だ曾て是れあらざるなり。個人然り、國家然り。自ら抑畏して而して他の威重を獲たるもの、古今東西何れの處にかある。個人然り、國家然り。

君子國とは全國民を擧げて君子なるの謂に非ざる也。萬國無比の國體は其一部國民の無能と詐欺を容るゝ能はざるか。是の如きは殆ど小兒輩の言に類す。深く咎むるを要せざる也。獨り貧弱者の爲に盡す事業の多寡を以て國家の大小を規定せむとするは腐儒詩人の空想。是の如き道德主義を以て本邦現時の青年に鼓吹せむとするに至りては、吾人茲に一言無き能

はす。
 國を建つるの目的何處にある、國民の幸福を保全せむが爲に非ずや。國民の幸福那邊に存す、國民性情の満足に外ならざるなり。國體と謂ひ、國性と云ふもの、畢竟是の國民性情の自然の結晶のみ。

世に若し國家を倒して慈善の資に充て、以て其の性情の要求を満足し得べき國民あらば、亡國は是の如き國民にとりて却て幸福ならむ。吾人復敢て是れを憐れまじ。所謂美的空想に眩惑して、國家民人の意識を顧みざる腐儒詩人の輩、往々斯かる思想を樂しむ。詩歌小説として是れを見る則ち可。以て我帝國の道德主義に擬す、水中の月を探りて却て水に溺る、者に非ざるか。日本國民は生々の國民なり、進取尙武の國民なり、國民の強盛と威名との中に初めて各個の満足を見出し得べき國民なり。些々たる慈善は彼に於て何かあらむ。國家の利害を犠牲として是の婦女子の私情に殉せしめむとするが如きは、真正なる大和民族の性情にありては思ひも寄らざるなり。

吾人は魯西亞の偉大なることを以て亞歷山帝が四千八百萬の農奴を解放せし時に存せりと

思惟する能はず。スラヴ人の歴史は一個の侵畧尙武的國民として彼等を證す、農奴の解放の如き、彼等にとりて一大連灣の占領よりも多く住心する所に非ざらむ。是の如き事を以て魯西亞の偉大となすは、十九世紀に於ける國家國民の幸福の何者なるかを解せざる腐儒詩人の空想のみ。

吾人は我邦有爲の學者にして、是の腐儒詩人の空想を喜ぶものあるを見て、深く嘆惜の情に堪へざる也。

國家は實在す、空想にあらざる也。

詩歌の誘惑

斯かる空想を樂しむの弊は、畢竟美感の誘惑に遇ふて知らず識らず實感の領域に移りたるもののみ。是れ詩歌美術の弊害の一面なり。是を以て吾人は美感の修養と共に其れと實感との間に截然たる區別を自覺せむことを要す。

慈善は美なるべし、博愛も亦更に美なるべし、貧民の救済の爲に國家を亡ぼす、更に多く美なるべし。然れども美なるもの必ずしも善に非ざるなり。若し美感を規準として見れば、印度帝國、或は一沙翁よりも英國にとりて貴からざるなり。米國の富と力とは、或は自由戦争の血潮よりも願はしからざるなり。國家を滅し帝王を廢して自由平等の原野となす、美なること幾何ぞ。更に亡國の殘墟に月夜感慨の詩人を現じて、其の運命を歌はしむるは、煙突林立し汽笛耳を聳する灰塵萬丈の市街よりも如何に遙に美なるべきぞ。

然れども美は樂しむべきものにして行ふべきものに非ず。宗教、詩歌、小説は、人の美感に基く、是れを移して實世間に擬するに及びて、往々方柄鑿の弊を見る。夫の内村氏一派の思想が幼稚なりとの評あるは、畢竟世界を詩歌と觀じたるの弊に坐す。

(明治三十一年三月)

ビョルンソンとゾラ

那威のビョルンソン氏、例のドレーフェー事件に關して書をゾラ氏に送りて曰く、「子は是れ人道の爲に戦ひたるもの、世界萬邦は縲綹の間に子の光榮の八表に擴がるを瞻視せむ」と。吾人は實にゾラ氏の自信と勇氣とに敬服す。

(明治三十一年四月)

覆面將に落ちむとす

覆面將まきに落ちむとす、來らむとするものは何ぞ。人道主義、世界平和主義の名によりて、既に幾多の罪惡の如何に公然として行はれつゝあるかを見よ。世界の平和は漸く動搖し初めたり、四千年の人類歴史が未だ曾て見ることを得ざりし、一大活劇は、黃白人種の格闘として、

將に極東の分野に演ぜられむとす。嗚呼、同胞國民は看客なるべき乎、將た又役者たるべきか。

(明治三十一年五月)

江戸ッ兒は忘恩兒か

人は謂ふ、東京の人は恩誼を知らずと、誰か是れに答ふる所以を知る。

今や滿城の人、奠都三十年祭に熱中す。而も彼等の中一人の前征夷大將軍徳川慶喜公の入京を歓迎したるものあるか。草より出でて草に入る武藏野の原は、誰が爲に今日あるを致したる。曾て御膝下の民たるを誇りしものは、果して何の眼を以て雨肅々の日、天下の公方の其の舊城址に入るを目睹せしか。

人或は奠都三十年祭を以て征服者に媚びたりとなす、是れ大義を知らざるの言のみ。唯、吾れは名譽ある江戸ッ兒をして、徒らに現勢に媚悦して舊恩を忘れたりとの誣あらしむるを欲せざるなり。

(明治三十一年五月)

古を忘るゝの民

太田持資、徳川家康、勝安芳、西郷南洲の四人の爲に記念日を設けよと、國民子東京人の爲に説く。城市建设者の爲に記念を設くるの一事、吾人大いに是れを讀す。但し其の人は徳川家康を以て足れりとせむ。

今の故を以て古を忘れざるは人生の美事。甲州の僮夫、脱帽して信玄公を語り、仙臺の走卒、手を額にして貞山公を説く。江戸人士の何ぞ爾かく権現様に冷やかなる。吾人は是の如き古を忘るゝの民の、均しく日本建國の祖宗を忘却する民ならむを恐るゝ也。

(明治三十一年五月)

好一對

國民性情の満足を言はずして、ひたすら世界大勢の調攝を説く所の所謂世界主義をば或人の馬子主義と名けたるこそいみじけれ。こはカント氏の倫理説をドンキホーテ主義と名けたると好一對なるべし。

今や哲學界にも、宗教界にも、到る所に馬子主義を見るぞうたてき。彼の邦に某の説行はれたれば、吾れも亦是の説を遵奉せよ、彼の邦の思潮はかくくなれば、我れも亦是れに背く謂はれやある。これ馬子が西方諸邦皆是の佛像を信せり、吾邦何ぞ獨り是れを拜せざるの理あらむやと上表せると同じからずや。

馬子主義や、其の先祖は天皇を弑したり、其の後裔は國家を害する無くむば幸なり。

(明治三十一年五月)

無題

神を怖るゝは一切智の初めなりとはソロモンの語なり、神を信ぜざる知慧は愚昧のみ。是れ見るべき眼を以て見ざるなり、聽くべき耳を以て聽かざるなり、彼等偶然にして成功すれば即ち以て事物の眞諦に達せりとなし、是を以て人生の一切を判ぜむと擬す、笑ふべきかな。

こは神と正義と人道とを唱ふるに忙はしく、偶然に其生を享けたる國土の如きは其の故郷となすに足らずと公言する所の萬朝報記者の言なり。是の舊世紀の思想をモデルナイズすれば、斯くにもあるべきか。

神を怖るゝは一切迷の初なり、神を信するの知慧は迷ひのみ。是れ見るべき眼を以て見ず、聽くべき耳を以て聽かざるなり。彼等偶然にして成功すれば、則ち以て神の慈惠となし、是れによりて人生の一切を判ぜむと擬す、笑ふべきかな。

(明治三十一年五月)

統一と分離

文學美術と實世間との結合は、やがて時代精神の統一に近づきたるを示す。されど凡そ統一なるものは、統一せらるべき各部分の完全なる發達を待ち、而して後初めて其の完きを期すべきなり。今の文學美術は果して是の如き完全なる統一に資すべき程に各自獨立の發達を遂げ得たりや。こは文藝界に於ける刻下の一問題なるべし。吾等は統一を理想とせざる分離を以て方便と目的とを顛倒したるものとなすと同時に、早熟夙斷の均しく好ましき事に非ざるを認む。

(明治三十一年五月)

主義の廣狹

世に主義の廣狹を言ひて直ちに褒貶の意を寓するものあり。こはいみじう謂はれ無き事に

あらずや。當に狹かるべくして而して狹く、當に廣かるべくして而して廣きは、共に其の所信を立するの點に於て何れを是、何れを非とすべきに非ず。問題は所信其物の正しきか正しからざるかに歸着すべし。其形の大小深淺の如きは識者の言ふべき事に非ず。

(明治三十一年五月)

欺き易き社會

人は感情に制せられ易きだけそれだけ欺かれ易きなり。奸佞便巧の輩にとりては日本の社會ほど欺き易き社會はあらざるべし。

同じ事を異なる語にて言ひ表はせば、彼等は全く異なる二種の事なりと思惟する也。もし其言を壯にし、其語を激にすれば、彼等は以て讒謗罵言となし、もし其言を婉にし、其語を微にすれば、彼等は以て穩健妥貼なりとなす。而も其實彼等が讒謗罵言とする所のものよりも數層激烈なる斷案を包含せる事を覺らざるなり。

所詮彼等は目前の感激に制せられて事物の真相に想ひ到らず、見る所のものは文字なり、聞く所のものは言語なり、解する所のものは是の如き文字、是の如き言語によりて表示せらるる直接の意義なり。是れより來るべき當然の斷案の如何なるものなるかに就ては、殆ど問ふ所あらず。是の如くして欺かれざらむとするも豈得べけむや。是に於てか直情徑行にして婉言微辭を知らざるものは亂暴として詆られ、便巧柔佞にして曲筆舞辯に長するもの、溫和として尙ばる。世事殆ど兒戲に類す。

(明治三十一年五月)

疑問

神儒佛三道に代りて唯物論を打破せむと公言する文學博士あり、眞理の研究は果して是の如き方法によりて爲さるべきものなりや。

人は謂ふ、唯物論は物質的文明を目的とす。有神論、靈魂論、理想論にして初めて精神的文明に到達し得べしと。是れ果して唯物論を正解し得たる説なりや。

原理は眞偽の問題なり、好尚は價值の問題なり。二者を混同するは、即ち思想の混亂を表明するものにはあらざるか。

アウグスチヌスの *ciuitas dei* を『神の都府』と直譯せるを誤れりとするは、蓋し『神の國』と意譯せよとの意なるべし、是れ單稱名辭を譯する方法を知らざるものには非るか。

詆刺罵詈は事實の批評として尙ほ恕すべきもの無きにあらず、由來價值の問題は其の根本に於て主觀的のものなればなり。而れども其の事實其物を虛構するに至りては、實に言語道斷なりと謂ふべし。社會は讒誣に對して其の制裁を有せざるか。

(明治三十一年五月)

家庭と文學

家庭は文學の塹なり、そが終日の旅に疲れて歸り來るべき所なり。家庭と文學、これ文學批評家にとりて最も肝要なる一問題にあらずや。吾等は特に我邦今日の家庭に就て言はむと

欲する所多し。

(明治三十一年六月)

彼等と吾人と

凡ての文物は一體なりとは吾人が文藝批判の第一原理なり。

されば吾人は單に藝術を以て藝術の則となさず、汎く社會の文物に參して、全分の理を盡さむことを期す。吾等を以て見れば、世の所謂文學批評家の立言は、一分の理のみ、抽象の義のみ。是れ彼等と吾人と其の意見の異なる所なり。

(明治三十一年六月)

不得已也

國政と國民道德、國民道德と國民文學、觀來れば文藝批評家が全分の立言は遂に政治教育に涉らざるを得ざるべし。是れはた已む得ざるなり。

(明治三十一年六月)

西洋畫家に問ふ 「もと「疑問」と題す」

吾等は裸體畫に關して幾多の疑問を有す。

第一、裸體畫を自然美中の最高なるものとするの理由何處にある。

第二、人體が自然物の最高なる發達を遂けたるが爲に然りとするは、美學上に幾何の根據がある。抑、人類の美的意識は、かゝる單純なる立言によりて規定せらるべきものなる乎。

第三、裸體美術の爲にするの外、裸體のモデルに幾何の用ありや。裸體美術を離れても、美術家は何故に裸體のモデルを須要とすべきなる乎。

第四、若し婦人の人格を毀傷しても、猶ほ美術の要求を満足すべきの理あらば、他の人格の犠牲によりて少からざる利便を感じるの事實に對して、等しく其の希望を満足すべしとする乎。例せば生理學、病理學乃至生物學の如きは、人格の犠牲に依りて多々の利便を有す。吾等は公益の爲に是れを認容すべしとする乎。但しは美術に限りて人格の毀傷を許容すべき

特別の理由ありて存する乎。

吾等は西洋畫家が是の質疑に答辯せむことを希望す。

(明治三十一年六月)

寧ろ民を愚にせむ乎

大いなる國民は利巧に非ずして剛毅なり、生意氣に非ずして愚直なり。大いなる國民は英雄崇拜の穉氣を要す。今や我國人は小哲學者、小法學者、小理論家の群集たらむとす。田舎の中學生も、一國の大宰相を呼捨てにするをエラシと心得る世の中には、小我を持して他を睥睨するもの幾千萬人あるも、未だ以て一國の大を成すに足らざる也。

古の武士道は己れを没するに立つ。今や天下を舉げて人の爲にする者無し。是れ教育の過ちなり。已むを得ずむば夫れ民を愚にせむ乎。

(明治三十一年九月)

日本人と能辯

何故に能辯は我邦に缺乏せりや、との疑問に答へむは、極めて容易のことなるべし。我が政體は古來專制政治にして、輿論衆議の容喙を許さず。随つて多數人民を會して意見の贊同を求むるが如きは、政治上殆んど其例を見ず。是れ第一の原因なり。而して是の事は、國民的性情の上に二個の結果を有す、即ち一面に於ては依頼心を生じ、他面に於ては孤立心を起せり。是の兩面のもものは、共に能辯の生母たる國民の共同精神を妨害するもの、是れ第二の原因なり。我邦は最近三百年間の封建政治に於て、最も嚴峻なる階級制度を經由し、上下の意思疏通殆んど其道を絶せり。是れ第三の原因なり。加ふるに我邦士人の間に、治ねく強大なる感化を有したる儒教は、常に能辯を奨勵せざりしのみならず、却て寧ろ士君子の道にあらずとして是れを擯斥したるの傾向あり。是れ第四の原因なり。是の四個の原因あり。近時政體頓に革まり、輿論衆議の勢力大いに加はれりと雖も、尙ほ未だ積年因襲の習性を擺脫す

る能はざる、素より怪しむに足らざる也。

如何にして能辯を盛んならしめむ乎。政黨内閣方に成りて、國論の一致、協同の事業、益其の須要を増し來りたるの今日、是れが必須の手段たる能辯は獨り其の落寞に委すべからず。是れを盛んならしむる當に如何すべき乎。是れ慥に吾人の一顧に値すべき問題なり。

然れども能辯は、辯者と共に聽者に待つもの也。猶ほ大詩人大美術家が多く一世の風潮に駕して出で來る如く、能辯家は眞に是れを要するの社會にのみ生まるべきなり。今の日本人は、果して能辯の勢力を識認して眞に是れを欲する乎、吾人は却て反對の事實を見る也。蓋し我が邦人は最も他人の意見に耳を傾けざる人民なり。己れ瑣小の知見を有するや、則ち挾んで我が説となし我が主張となし、一步も枉ぐるなからむを期す。是れを以て他人の意見に接するに當りては、心を虚うして其の是非を見ること能はず、預じめ成心を持し、批評的若しくは穴探的態度を取りて是れに臨む。偶々其の説の眞に傾聽すべきものありて、己れ亦其の傾聽すべき所以を認むるも、故らに小我の異を樹て、相讓らず、却て冷笑暗罵を以て酬むとす。是の如き人民に對して、デモステネース、シセロ出づるも亦是れを如何かすべき。

加之、彼等は能辯に對して一種輕侮の情を有する也。少しく其の辭令を修め、其の態度を飾るや、輒ち目するに演説屋を以てし、其の能辯を以て説の短所を塗飾するの具なりとす。是の如きは今の辯者の技能未だ至らざる事も亦其の一原因なるべしと雖も、抑、亦我が邦人が能辯其物に對する先天的偏見の主として然らしむる所ならずむばあらず。是の孤立、自負、猜疑の念慮は、即ち他面に於て、我が國民の間に大共同、大團結の成立を妨害する主要なる原因にして、社會經營の上に於て大いに排斥せむことを要す。能辯は其後に於て初めて其十分の効果を有し得べき也。

(明治三十一年九月)

大人物と私徳

人は其の事業に於てのみならず、亦其の品性に於ても大なり得べし。是の二者を兼ね備ふるものを大なる人物と云ふ。

グラッドストーン氏はハワードン寺院の門丁の病を訪ひ、爲に聖書を讀みたりき。彼は、是の心を以て天下の事に當りたり。其七十年間の政治的生活に於て一人の私敵を有せざる、眞に故ある也。

世には所謂功利の外にも道ある也、所謂階級の外にも人ある也。官邸の玄關に私生兒を置去りにせられたる國務大臣を怪しまざる國民は、未だ大なる人物を解せざる也。

少年國

我邦は夫れ天下の少年國乎。人五十歳に至れば、概ね半死の白頭翁也、是れ慥に大人物の缺乏せる一の理由也。人の名を好むや、其の功を一生の中に收めむと欲す。老衰期の五六十なるものと、八九十になるものと、其の事業に於て徑庭ある、素より其の所のみ。況や成熟期の一年は、修養期の十年に匹敵するものなるに於てをや。試みに我國の學者に見よ、年五六十に至れば進取の氣象頓に熄み、塵に既得の小名譽を墨守して失はざらむことを是れ務む。偶、後進者流の儀式的奉戴に遇ふて、時に時代後れの舊套を反復するに過ぎず。世の既に已

れと違へるを覺らず、其説の陳腐を以て傲然として高く標持す、寧ろ憫れむべしとなす。

夫の五六十にして自傳を編み、閱歷譚を述ぶるものは、一生の事業已に終れりとなす乎、徒らに過去を追憶するを已めて、何ぞ更に猛進一番するを務めざる。未來は青年の特有物に非ざる也。吾人は是の點に於て、歐洲の大人物を景仰するの情に堪へず。

グラッドストーンは八十七歳にして尙ほ政界の大立物なりき。彼は其の死する數週前までは、ホマー研究に就て古典學者を驚倒するの意氣を有せりき。八十二歳のビスマルクは、老衰事に勝へざりしと雖も、五年以前には猶ほ歐洲風雲の一角を握りたりき。現在の老人傑に就て見るも、法王レオ十三世は以太利僧正中の尤も剛壯有爲なる一人也、而して彼れ年方に八十七。英の畫家トーマスクーパーは今年九十五の高齡にして、ロヤルアカデミーの繪畫會は年々彼れによりて少からざる光彩を添ゆ。倫理學者及び宗教學者なるジェームスマルチノーは一千八百〇五年に生れ、七十年以來其の研究と著述とを懈らず。現時以太利の樂界に錚々たるエルヂは、今や方に八十四歳、英國女王は身神や、衰頹せりと雖も、尙ほ七十八歳也。五六十年は是等の人より見れば壯者のみ。

大なる傳記は長き年月の下に編纂せられざるべからず。日本は遂に少年國に終らざるべからざる乎。

大人物の生死

然れども如何に大なる人物も、歴史上より見れば常に一個の天職の爲に生れたる觀あり。彼れ是の天職を果せば、其の同胞が彼れの爲にせる感恩の祈禱を後にして靜に永世の人となる。近き例しはグラッドストーンとビスマルクと也。

若し是の二氏の死をして今より十年又は二十年の前にあらしめば、其の國民は憤ふべからざる損失を被りしならむ、或は其死に踵ぐものは革命的破綻なりしやも知るべからず。然れども今や二氏の死は其の國民の幸福に一波紋をだも及ぼさざる也。嗚呼一度び其の天職の成し遂げられたる後には、かゝる大人物も世界の歴史の前には如何に小なるよ。大なるものは歴史なる哉。

(明治三十一年九月)

何處まで小人的なる乎

天下凡そ物の小さきを好むこと、我が國民の如きは無かるべし。彫刻は根附にあらざれば置物なり。畫幅は扁額に非ざれば掛物なり。犬はマスコップ嫌はれて狎コロ喜ばれ、八州の山河を前にして、人は盆栽に苦心す。文壇に歓迎せらるゝものは、十七字の俳句にあらざれば、百行以内の短編小説。新紙に人目を惹くものは「近事片々」に非ざれば端書集。小供芝居あり、小供講釋あり、小供相撲あり。我が邦人の嗜好は何處まで小人的たらむとする乎。

(明治三十一年十月)

一刀兩斷の制裁

勅語の撤回演説を試みたる竹越氏の「世界の日本」は、遂に發行を禁止せられたり。是の

輩、國體の大義を辨ぜず、嘖々然として漫りに俗流と唱和す、須らく一刀兩斷の制裁を加ふべし。

(明治三十一年十月)

曲學阿世とは何の謂ぞ

夫の俗論者流は國體論者を目して曲學阿世と云ふ。何ぞ知らむ、今の世にありて民主を曰ひ、自由を曰ふほど世俗に歡迎せらるゝこと無きを。臭い物身知らずとは彼等の事也。唯、所信の爲に俗論に譴罵せらるゝを顧みず、時に一世の風潮に反しても尙ほ其の侃諤を枉ぐる能はず、是れ學者の良心也。曲學阿世とは何の謂ぞ。

(明治三十一年十月)

西郷南洲の銅像

上野公園に立てられたる明治十年の叛臣西郷南洲の銅像、方に其の工を終り、覆面將に撤下せられむとす。吾人一言の以て世に問ふべきあり。

昔者、奈翁の戦に破れて聖、ヘレナ島に流竄せらるゝや、狂憤せる佛國人民は國運の否塞を以て奈翁の罪なりとし、到る處其肉を喰はむと欲しき。越えて二十五年、ブルボン王家其位に復し、ルイ・ファリップの治下に多年の平和を樂しむに及び、健忘なる佛人は、再び奈翁の盛時を懷慕し初めぬ。是に於て、南溟の古墳は發掘せられ、其の遺骸は盛大なる儀禮を以て巴里に改葬せられき。今や奈翁が佛國に與へたる恥辱は全く遺却せられ、唯、不世出の英雄の下に是の國が樂しみたる權花一朝の虛榮を情況せり。

我が西郷南洲は猶ほ佛の奈翁の如き乎。維新中興に於ける南洲が偉勳は永く史上に傳ふべく、其の人物も亦一世に曠しきものありしならむ。而も彼は其の末路に於て國賊なり。其の

事情の如何に拘らず、帝命に背き、國憲を紊り、叛逆の大罪を干犯したるは事實なり。大義名分に於て已に缺くる所あらば、區々たる私徳の如きは言ふに足らざる也。

然るに今や則ち如何の狀ぞ。彼れの大罪は何時しか忘れられ、傳へらるゝものは其の舊勳のみ、其の私徳のみ。日本の歴史に比倫なき一種の尊稱は、特に彼れの名に冠せられ、人は大西郷、大南洲を以て彼れを呼ぶに非ずや。彼れの叛逆の爲に作されたる辯護は、普ねく國民の認むる所となり、彼れの名によりて傳へられたる言行は、依信と歎美とを以て聞かれざる無し。足利尊氏、平清盛に於て、天人共に容るべからずと思惟せられたる大罪は、彼れにありては偶、其の末路を美はしくしたるのみ、是れ寧ろ怪しむべからざる乎。

今や彼れを崇拜せる國民は、傳記墓誌を以て尙ほ足れりとせず、其の叛逆によりて其の人物たるを證したるを以て足れりとせず、彼れの銅像は更に帝京第一の大公園に建造せられ、二百萬の府民をして是の叛逆的大人物の面貌を、形體の上に景仰せしめむとす。南洲死後二十年にして是の事ある、何ぞ奈翁の遺骸十年にして巴里に改葬せらるゝと相似たるの甚しきや。

若し私己の情實によりて人の行爲を品せむ乎、天下また罪惡なるもの無からむ。唯、公道の標として動かすべからざるものあり、名分是れによりて立ち、大義是れによりて明なるを得。西郷南洲の私徳や、吾人の欽せる所也、而も彼れを以て國民の崇拜に當り得る大人物となす、其の可なる所以を知らざる也。況や帝京第一の勝地に其の銅像を建築するをや。

(明治三十一年十月稿)

近時の銅像

偉人の銅像を建築するは、嘗に美術として市街裝飾の爲のみならず、其の高風英姿を想望せしむる事によりて、國民の志氣を感發せしめむが爲なり。事に當るものは其一面に於て、社會教育の着眼を缺くべからず。

更に想ふ、美術は國民氣風の反映なり、國民の氣風雄大なれば、其の美術も亦雄大に、國民の氣風卑屈なれば、其の美術も亦卑屈なり。夫の、事に銅像建築に従ふ者は、即ち此事業

が國民の氣風を體現して内外に表示せる所以なるを忘るべからず。
 近時銅像建築の事頻りに興る。就中著大なるもの三あり。宮城門前に建てらるべき楠正成の像、上野公園に建てられたる西郷南洲の像、及び筑前博多に立てらるべき日蓮の像、是れなり。

楠公は日本忠臣の龜鑑なり、是れを宮城門前に建つるは甚だ體を得たりと云ふべし。唯、其の製作模型の嘗て美術學校内にあるものを見たるに、其大いさの大ならざるを恨みとすべし。且つ其の態度は、悍馬を制する馬術師に似て、毫も沈勇忠烈の威風を留めず。未だ美術上の大製作を以て容すべからざるに似たり。畢竟、是れ美術家が其の手工の末技を表はすに専らにして、楠公の精神を發揮するの更に大技工なるを思はざるの弊に坐す。

西郷南洲の銅像を上野公園に建つるの妥當ならざるは、已に述べたるが如し。假りに世人の言ふ如く、南洲を以て大忠臣、大義士、大人物とせむか、斯かる不世出の大偉人の紀念像としては、其像の如何に矮小なるよ。九段坂上の大村益次郎の像は其の技術に於ては夙に世人の嗤笑する所なりと雖も、其大きに於ては慥に是の南洲の像に三倍す。明治國民の理想的

大人物を體現するものとしては何等の不倫ぞや。國は東洋第一等の日本に非ずや。土地は二百万の人口を有する日本帝國の首府に非ずや、場所は是の大都府の第一等の公園に非ずや。而して建てたる人物は日本歴史上に比類なき尊稱を有する、所謂大西郷に非ずや。而して其大きは宛然として盆石的庭園中の物也。天下何物の不倫か能く是の如くなるを得むや。

若し夫れ日蓮の像の建てらるべき地が、池上に非ず鎌倉に非ず、身延山に非ずして、博多なりと云ふに至りては、其の不當なること言ふまでも無きなり。

日蓮の安國論が元寇の豫告なりとは、歴史上に確證無き説なり。是の曖昧なる一事を附會して其像を博多に建て、以て元寇紀念と稱するは、即ち當時日本の忠臣義士、別しては伊勢の神靈を侮辱するものに非ずや。若し是の歴史上の一大事實の爲に紀念像を造るの必要ならば、何ぞ北條時宗、若しくは河野の諸忠臣の像を以てせざる。日蓮宗の信者が、一安國論によりて日本の神聖なる故址を壟斷するは、我が國民の默視すべからざる所也。

大人物の墓

遮莫、墓標、紀念碑の廣大なるに依りて大人物の記憶を永遠にせむとするは、人情の自然に出づることなるか。觀じ來れば、扱も痴けたる業ならずや。時は形ある總ての物の破壊者なればなり。

數年前、英國議會は、政府の提出に係るクロムエルの塑像建設案を否決せしことあり。當時詩人ス井ボルンは憤慨の餘り、直ちに筆を呵して一篇の詩を作り、雜誌『十九世紀』に寄せたりき。其の詩、破題直ちにクロムエルの偉業を頌して曰く、

吾等のクロムエル、何ぞ金石を要せむや。

大英國の進路を照らせる光明こそ、彼れの紀念碑なれ。

國民よ、徒らに其名と其像とによりて大人物を崇拜するを休めよ、願くは其の功業を復活し、繼續し、其の生血を後昆に傳ふ事によりて彼れを讚美せよ。然らば則ち彼れの名は時と共に益、其の大なるを加ふべし。祭祀金石は、徒らに彼れを短命ならしむる所以のみ。

(明治三十一年十一月)

南洲とハイネ

帝城第一の公園に西郷南洲の銅像を建設するは、所詮失體と云はざるべからず。個人としての南洲は如何にも大人物なりしなるべし、國民としての南洲は則ち如何。彼れの最後は畢竟逆臣の最後に非ずや。吾人は吾人の子孫をして一個の逆臣を崇拜せしむるを好まざる也。

獨逸人は幾度か詩人ハイネの紀念碑を建設せむことを企てしが、尙ほ果さず、其果さざる主なる理由は、彼は獨逸國に不忠なる詩人なりといふにあり。吾人は國民精神の鞏固なる、是の如くならむことを望む者也。

(明治三十一年十二月)

グラハム・ベル氏

グラハム・ベル氏や、力めたりと謂ふべし。彼は不幸なる同胞の教育の爲に、自ら其のベター、ハーフを犠牲とせり。天下豈是れより貴むべき獻身的事業あらむや。恥ぢよ、名利の爲に慈善を飾るものよ。

(明治三十一年十一月)

内村鑑三君に與ふ

内村鑑三君足下。

生の開書を受取るゝは、足下に於て或は不快なる事ならむも知るべからず。若し是の際、生にして一篇の論文を足下監督の東京獨立雜誌に投ぜむか、恐らく六號活字の恩典にだも與り難からむ事は、生の萬々了知する所なり。足下の如何と見るは生の問ふ所に非ず、唯、生が足下を見る所を以て足下の爲に言ふ、可ならむ乎。足下は須らく「知識の下には喜憂無し」と云へるスピノザの言によりて、生の態度を了せらるべき也。

足下よ、有體に云へば、生は足下の意見を評するに、常に愚論の二字を以てするもの一人なり。生によりて愚論と評せらるゝは、恐らくは足下の満足する所なるべし。足下の面目是の如くにして保たれ得べくむば、生の苦言も寧ろ足下にとりて多少の益あるを多とすべき也。何が故に愚論とするかは今更言ふまでも無かるべし、蓋し足下は一切の事實を否定し、

己れの理想に協はざるものは、凡て斥けて虚偽となす。生は久しき以前より足下の文字を読むものの一人なり、然れども未だ一回も事實に就て足下の經綸策を聞きしことあらず。生を以て見れば、足下は現世の筆と紙とによりて他界の事を物語る者也。實在てふ觀念は、早く足下の思想より遊離して、足下は一切の事物を假象として見る者なり。足下は理を談せずして情を述べ、經濟を語らずして詩歌を唱ふ。故に足下の意見なるものは、極めて單調、極めて簡易なり。生に與ふるに足下の名と問題とを以てせよ、足下の論の如何なるものなるかを豫言するは、生に於て強ち難事に非ざる也。人を罵り、世を慨く足下の聲の如何ばかり壯快なるかは、生の是に述ぶる迄も無し。曰く正義、曰く人道、曰く自由、足下は是の種の文字を限りなく列ね、啞啞斷續の聲を放ち、其の懷抱を暢べて倦まざるは、生の常に壯とする所なり。生は足下の是の煩悶を以て、強ちに暗中の摸捉とは爲さざるべし。又驚きの眼を舉げて、箇中に無量の深意ありとする足下の崇拜者をば、強ちに淺薄なりとは謂はざるべし。然れども生を以て是れを見る、足下の論は經世家の言議としては遂に無意味の愚論なり。然れども若し生によりて愚論家と呼ぶるゝを意に介するが如き足下ならば、生は又足下を以て多

少の言を爲すまでに足下をば意に介する事無かるべし。

足下よ、生の直言を許せ。生が足下の爲に言はむと欲する事は、兩言にして盡きむのみ。曰く、足下は經世家に非ず、哲學者に非ず、宗教家に非ずして一個の詩人のみ、是の詩人たるの天職を自覺するは、足下にとりて一生の大事也と。希くは詩人てふ文字を以て、經世家、哲學者、宗教家の下にありとする勿れ、大いなるものは何れの方面に於ても大いなり。生の望む所は、足下が明治のダンテを以て自ら居らむ事あり。

ダンテの愛讀者たる足下は知るならむ、ダンテは一時の迫害によりて永久の生命を得たりき。彼れ若しフケレンツェの市長として其の隣人に好遇せられむ乎、神曲の一大雄篇は遂に世に出てざりしならむ。以太利の一都府は、其一時代に於て一好市長を得たりしならむも、而も一千年の中世紀は聲無くして經過し去りしならむ。生は足下に於ても、恰も明治の一ダンテを見る也。

足下は迫害せられたり。外遊幾年にして得たる學識を國家の爲に盡さむとしたる足下は却て國家の爲に迫害せられたり。生は彼の聖影拜禮の事を以て、社會にとりても足下に取りて

も、左したる事件なりとは思はざれども、足下自から成るべく之を大事件なりと誤認し、古の血證死、乃至ダンテの追竄にもまさりて、天下百世の大事件たるべき事を永く肝膽に銘刻せむ事は、足下に於て一ダンテを見むとする生の萬々希望する所なり。一粒の砂も時に大帝國の基礎を揺かす事あり。是れ宇宙の大法なり。是の偶然の事實によりて一ダンテを得ば、是れ豈帝國の幸にあらずや。

足下の半生は聖影事件によりて決定せられたるが如し。生は其の然るを信じ、又然らむことを希ふ。足下が憎人慨世の思想は、是に其の端緒を開きてより以來、雲の如く湧き、雨の如く濺けり。足下が可憐にして又貴重なる復讐の執念は、是れが不斷の薪油となり、足下の情火は年を追ふて愈々高く愈々烈しくなり増りぬ。生は足下の復讐心を敢て可憐なりと云ふ、そは復讐心とは一身の得失に執着する煩惱の生兒に外ならざればなり。されど生は、同時にそれを貴重なりと謂ふ、畢竟復讐心は剛健なる意力の所現に外ならざればなり。昔者フケレンツェの長官、ダンテに言はしめて曰く、罪を謝し金を償へ、然らば國に歸るを許さむと。ダンテは傲然として答へき、有罪と呼ばる、無くして歸る能はずむば、斷じて歸らずと。復讐の一

念も茲に至つて壯美の境に入る。生は足下に於て聊か這般の意力を認め得たるを喜ぶ。聞説らく、彼の聖影事件ありてより、足下は帝國の官府を見ること蛇蝎の如しと。昔者ダント、終生フ・カレンツェを見ずして、却て陰府、淨罪、及び天國の土を見たりき。足下の今日見る所は何れの土ぞ。夫のマルボルゼの池は其の闇黒の層園と、其の「大難」とを併せて、ダンテの眼には儼然たる科學的定形ありと見られたりき。彼れの心一度は是に臻るや、燃ゆるが如き復讐の念慮も肅然として無言の冥想に沈み、翻つて一千年の大懺悔録となりき。知らず、足下の今の境遇は果して何物をか蓄積し、果して何物をか濫醸しつゝある。

足下よ。生は足下の崇拜者と共に足下の警語に聴くことを喜ぶ一人なり。足下は嘗て米國詩人ラエルの詩句を引き「偶然に生を享けたる國土の如きは、我故郷とするに足らず」と揚言せり。嗚呼偉大なる宣言なる哉！、是れ生が足下に聽きたる千萬言の中に、最も簡明に最も眞率に足下の信條を告白せるものには非ざる乎。日本の國籍中に生活する足下にして是の言あるは、即ち日本が一ダンテを以て足下に待つ所以なり。否寧ろ足下が一フ・カレンツェを以て日本を見る所以なり。「死市」ラ・エンナは何處にある、足下が所謂「自由の郷」にあら

ずや。是の如き思想を有する人に向つて國家の威力も何の加ふる所ぞ。足下の守るべき道は唯、是の偉大なる精神力を忌憚なく開展するにあるのみ。生は信ず、固く信ず、足下がダンテたるの道即ち茲に存す。足下よ、生をして毫も其の齒に衣せしむる勿れ。足下に幾多の弱點あり、外より觀察すれば足下の言行程矛盾に充實せるものは蓋し尠し、而も生は如何なる矛盾も足下が衷情の眞摯に累するものに非ざるを信ぜむと欲す。不幸にして足下は論客として世に知られたり。然れども足下は理の人に非ずして情の人也、立言の人に非ずして咏歎の人なり、唯、憂ふらくは足下自らも亦論客を以て自任せむことを。

生は是に於て敢て足下に警告する所なかるべからず。足下は日本に於ける操觚者中の最も多幸なる一人なり。足下の監督する東京獨立雜誌は、一に足下の名あるが故に讀まるゝにあらずや。其數は十人にて可なり、百人にて可なり、是の如き讀者は最も足下を信ずるの讀者ならずむばあらず。足下の言議は赤新聞の記者が激賞の資となること珍らしからざるに非ずや。今の世に於て是の如き記者の賞讃に與ることは操觚者の異數なり。斯かる多幸なる境遇は、足下をしてダンテたらしむる所以にあらず。フ・カレンツェ市の官庫には、今日尙ほ「ダ

ンテを捕へなば生きながら焚くべし』との奇怪なる宣告文を藏すと云ふに非ずや。生を以て見るに、足下には已にダンテの稟資ありて、未だダンテの境遇を得ず、聖影事件の迫害に今日迄執着するは、足下一人の幻影のみ、健忘なる社會は既に已に之を遺却せり。今の時、足下にして一步を誤らば、生の足下に期待する所のもの、或は水泡に歸し、帝國は永く其ダンテを逸し了せむ。生が足下に警告せむと欲するは即ち是にあり。

生は敢て足下に告げむ、足下世に容れらるゝも、世は足下に對して永久の虚偽たるべし。足下の信條と、情執と、復讐心と、渝ること無くむば、足下は終に其の虚偽たるを覺るの時あるべし。生を以て見れば、一個の惡魔に怒るものが、却て十個の惡魔に喜ばるゝは、足下が今の境遇なり、是れ斷じて足下たる所以の道に非ざる也。昔者はゴロナの人、ダンテを街頭に見し時、常に謂へらく、『陰府に在りし人彼處に在り』と。然り、陰府に在りし事なき人、如何ぞ神曲の詩人たることを得べき。

足下よ、生を以て見れば、足下の筆は雜誌の記者としては餘りに長きなり。足下は經世家に非ず、哲學者に非ず、宗教家に非ず、足下の天職は神曲の詩人たるにあり。足下は其の

直情と、徑行と、倨傲と、沈鬱と、嚴肅曠遠の信條と、激越不撓の執念とを併せて、到底時劫界の人に非ざる也。足下よ、希くは生をして忌憚なく言はしめよ、足下は若し神曲の詩人として生れたるにあらざれば、何物の爲にも生れざるのみ。

足下よ、希くは生の直言を許せ。生の足下に就て見る所、足下果して如何とか見る。嗚呼、世は中世に非ず、國は以太利にあらず、而して足下を以て獨りダンテに比す、抑、生の誤り乎。想ふに、生は足下に喜ばれざる者の一人なるべし、然れども最後に『余ダンテ故國を追はれて此處に伏す』と題せる『死市』ラベンナの墓誌を以て足下に呈するは、必ずしも足下の意を迎合する所以に非ざるべき乎。頓首。

(明治三十一年十一月)

今の日本に需要多きものは面貌好き婦人と小才子なりと内村氏憤激す。氏よ、心を安んぜよ、小慷慨家も亦需要無きに非ず。現に吾人は氏の言に聴くもの一人なり。

(明治三十一年八月。蟬しぐれ)

逐客康有爲

回天の雄圖空しく沮落して、四百餘州身を容るゝに處なく、厓に隣邦に投じて天涯亡命の一驕客となる。康有爲の如きもの眞に憫れむべきものならずや。何事ぞ、我が邦人の偏へに躁急短慮の匹夫を以て彼れを詬罵するもの多きや。

人と爲りは問はざれ、事の成敗は論ぜざれ、彼れの志氣事業は孰れか吾人の同感を起すに足るものならざるべき。彼は赤手を以て老大帝國の風氣を開發し、空拳を揮つて半歳の間に四百年來の弊竇を一新せむとしたるに非ずや。一國革命の先驅としては、優に我が小楠、松陰に當るに足る。若し夫れ時運未だ到らず、千秋の事業忽然として九地の下に失落し、身は逐客となりて域外に流離し、顧みて故國の事日に非なるを望む、痛恨何ぞ堪ゆべけむや。吾人は實に彼れの志を壯とし、彼れの情を憐れむ。

往日、コッスート、匈牙利の獨立戰爭に敗れて米國に客たるや、米人、到る所に彼れを歡迎

し、彼れの爲に集めたる義金實に數萬に上りき。康今や身を我邦に托し、萬一却て其の冷遇詬罵を得ることあらば、是れ國民の名譽に非ざる也。三十年前の日本は今の清國也、今日の日本は實に幾多の革命先驅者康の如きものに負ふ所なり、何ぞ獨り隣邦革命の先驅者たる康有爲を容れざるの理あらむや。吾人は我邦人の窄量に恨み無き能はず。

遮莫、先輩斬られ、同志殺され、而して張本たる康獨り全きを得。天命俄かに知るべからざるものあり。康たるもの亦自愛すべきなり。

(明治三十一年十二月)

○聞説らく、英國皇太子、ヨーク公と共にグラッドストーン氏の柩を引けりと。偉大なる人格の前には王侯無し。氏の如きは蓋し英國人の理想也。

(明治三十一年八月。蟬しぐれ)

無趣味の社會

「吾れに樂しむべき自然の美なからむには、寧ろ海を踏みてトリトンの歌を聞かむ」と歎ちたるなにかしの詩人の今更に忍ばるゝかな。あはれ如何なれば、世の様のかくは無趣味になり果てにけむ。

今や、凡ての美はしきものは世に貴き寶となりぬ、そは獨り罪惡を以て購ひ得べければなり。道德はこの趣味無き社會の障壁となりて、凡ての美はしきものは其の外に斥けられぬ。所謂義しきもの、清きものは、彼と共に歩まず、彼と共に交らず、彼れの孤影を踵ひて其の手を握らむとするものは、詐り也、盗み也、汚れ、侮り、禍也。

今や、一切の趣味は、世の義しき者の累ひとなりぬ。人は其の嗜好をだに道德の規矩によりて律し去らむとす。假面は盛裝に缺くべからざるものとなれり、否不義の名を甘んずるに非ざれば、彼は其の假面をだに脱ぎ難き也。

今や、社會は一路となり、人生は一面となりぬ。人は如何なる場合に於ても、唯一つの顔、唯一つの聲を有せざるべからず、否らざれば僞人として詆られむの憂あればなり。

今や、世に大人あるのみ、小兒あるのみ。されど人なき也。男子と女子とあるのみ、されど人無き也。紳士と平民と富者と貧者とあるのみ、されど人なるもの無き也。

今や、人々自ら其の獨りを喜びぬ、友は彼に要無きなり。彼は利害に非ざれば動かさず、世は是れを直しと呼べり。彼は自らの幸福をだも他人の口より聞かすむば飽かさるなり。

斯くて、趣味無き人は趣味なき家庭を作り、趣味無き社會を造り、趣味無き國家を造り、この大いなる人生をして、徹上徹下、趣味無きものとなし了せむとする也。

今や、若き女と男とは、白晝に物言ふことをだに許されざるなり。されど、人は一枝の花にも尙ほ好惡の情あるに非ずや。

かの其の情を抑へ、其の色を動かさざる人は、大いなりとして尙ばる。されど性を矯むるものは、均しく是れ僞りには非ざるか。あはれ離愁に泣かず、公義に憤らず、冷灰枯木の如きもの、何が故に獨り大いなるか。

かの弊纏袍を着けたるもの、何故に高くして、執綺袴を穿てるもの、何故に卑しき乎。尙ぶべきは、唯その嗜好の高からむことには非ざる乎。

吾れ事を爲すに當りて、人は先づ其の利する所如何と問ふ。あゝ利する所乎、利する所乎。天下の事、利を離れて爲すべからざる乎。いかなれば人は争はずして交はる能はざる乎、闘はずして生きる能はざる乎。抑、道義倫常以外に、人生の餘地を認めざる乎。一面の人は唯、一面の人を見る。劍を把りて琴を弾き、三軍を饗して野花に泣く。彼れ其の行ひに於て矛盾する所ある乎。

金錢は、今の世に於て凡ての物の標準となれり。大臣も、牧師も、藝妓も、其の報酬は金錢也。金錢は官吏を奴隸にし、貴族と富豪とを木偶にし、慧しきものを狼とし、愚なるものを驢馬となせり。快樂は金錢によりて計られ、名譽も、徳義も、金錢によりて賣買せられむとす。賭博は彼等が唯一の遊戯なり。

美術は宴樂のうつわとなれり。富豪の爲に白銀の像を造るものあれども、詩人の爲に一基の墓を修むるもの無し。人は祭りをだに營ますなりぬ。神は其の費えに報ひざればなり。

嗚呼トリトンの笛の音やみてより既に三千年。この趣味無き社會を如何にせむや。あゝこの趣味無き社會を如何にせむや。
(明治三十一年十二月)

蟬 しぐれ

◎今の世にありて輿論に聽かむと欲するものは殆い哉。夫の聲の大なるもの、多くは朋黨者流の嘖々ののみ。眞正の輿論を代表すべき機關、未だ我邦に備はらず。

◎世上批評家の所謂「世界に貢献す」とは何の意ぞや。各自國民の文物を外にして、所謂世界の人文ありとする乎。無意義も甚だし。

◎世上の大勢に同化せよとは、拜外者流の口吻。何ぞ一に淺薄なるの甚しきや。是れ飲酒者は長壽なりとの統計を見て、俄に酒を飲むものと何ぞ擇ばむ。其の知見、正に三尺の童子也。

◎所謂大勢なるものは、歴史的觀察のみ、取りて以て經綸の策となすべくむば、天下の事、道を行くよりも易し。

(明治三十一年八月)

本邦哲學界の現勢

一兩年以降、大學院に於ける専攻科目中、社會學及び教育學に關する題案の増加し來れるは著るべき事實なり。是の事實は本邦哲學界の現勢に就て何事か語る所あらざる乎。

一兩年以前の大學一覽を點檢せよ。哲學科卒業の學士が、大學院に於ける専攻科目には近世哲學史ありき、先天觀念論ありき、純正哲學と認識論の關係ありき、知覺論、空閒論ありき。然れども一の社會學的はた教育學的問題あらざりき。然るに一兩年以降の事實は全く是れに反し、社會教育的問題を選択するもの半數を超ゆるを見る。吾人は是を以て我が哲學界の實際的傾向を標示せるの事實となす者也。

是の實際的傾向の現はるゝは、獨り大學院のみに非ざる也。曰く社會學會、曰く教育學會、曰く兒童心理研究會、凡そ是の種の會合及び是の會合に伴へる機關雜誌は、何れも大學出身の新學士によりて經營せられつゝあり。是れを哲學雜誌及び其の學術雜誌に徴するも、學生の

卒業論文を外にして、純理哲學的はた純粹なる理論的論文の現はるゝ甚だ稀なるを見る。而して更に今後一兩年間に卒業すべき哲學科の學生に就て其の將來の専攻學科を問へば、特別なる事情あるものの外は概ね是の實際的傾向を帶べること、亦是れ明瞭なる事實なりとす。嘗に是れのみに非ざる也、吾人は是等の學生を率ゐて蕪陶の任に當る教授諸氏も、亦著るしく是の實際的傾向を現はし來れるを見る。哲學の教授たり文科大學長たる井上博士は、心理學の講座を擔當せる元良博士と共に日本主義の主張者なり、而して日本主義は國體民性に本きて國民精神の統一を目的とする道德主義たるなり。吾人は我が哲學界に於て最も多望なる兩博士が學生陶冶の要路に當りて是の如き思想を有するの一事、已に一世の學風に少からざる影響あるべきを疑はざる也。

兎に角、本邦現下の哲學界が實際的傾向を有し、且つ將來に於て益、是の傾向の盛んならむとするは、吾人の認めて明白なる事實とする所なり。知らず、世の識者は是の事實を見て如何の説をか爲す、吾人は則ち是の實際的傾向に向つて最大なる歡迎の意を表する也。

(明治三十二年二月)

國民と個人

・國民は個人の如し、無定見の國民と無節操の個人と、共に卑むべし。願くは日本國民をして定見ある國民ならしめよ。定見ある國民とは、確實なる歴史的發達を遂ぐるの國民なり。何事の遺憾ぞ、今の時、吾人は我が國民に反覆を勸むるの人多きを見る。主義に殉ずるは死して生くる也。個人然り、國家亦然り。

(明治三十二年二月)

學閥と云ふこと

今の世に學閥と云ふ語は、主として大學派と云ふ意味に用ひらるゝが如し。即ち猶ほ政府に藩閥と云ふものありて二三藩の出身者のみが要路を壟斷するが如く、學術界にも學閥と云

ふものありて、大學出身者ならでは容易に地位を得難しとの謂なるべし。されどこは洵に謂はれ無き批難なり。

今の帝國大學は素より理想的の大學には非ず、其の缺點も短所もいとく多かるべし。されど現下日本の情狀に照らして見る時は、言ふまでもなく最も完全に近き學校なること、これ丈は如何なる人も首肯せざるを得ざるなり。勿論大學以外にも私立學校なきにあらず、府下の諸法律學校、慶應義塾、同志社等、中等以上の普通及び専門の教育を授くる所少からざれども、是れを帝國大學に較ぶれば、其の設備の上にも、其の成績の上にも、遙に及ばざること言ふまでも無し。されば大學出身者は、今の日本に於て比較的學術上に尤も能力あるものと見るも、何人も異議無かるべき筈なり。是の學術上尤も能力ある大學出身者が學術界の要地を占めたればとて、何ぞ怪しむ所あらむ、所詮は優勝劣敗の自然の成り行きとこそ云ふべけれ。ざるを學閥として批難するは如何あるべき。

こは大體上より云へる事ながら、もし一個人に就て見れば、私立學校出身者も、隨分大學出身者よりも遙に勝れたる能力を有すること多々あるべし。斯かる場合に於て、單に大學出

身者ならざるの故を以て排斥せむは、慥に矯正すべき弊風ならむ。素より世事を實際に經營する上に於て、人各其の知る所に偏するは萬々已むを得ざる事なるべけれど、出來得る丈け弘く人材を拔擢するの覺悟も亦必要なるべし。是の點に於て、從來の學術界に多少の反省を求むべきは吾人の毫も異議無き所なり。唯、是の一事を以て直ちに藩閥と比して學閥の批難を下すは畢竟偏狹の見と謂ふのみ。且つ夫れ藩閥なるものは、吾人の解する所にては能力なきものが黨與を造りて後進の路を壅塞するの謂なり。是れを當然の能力あるものが、社會の必要に應じて學術界の要路を占めたるものに擬するは、やゝ妥當ならずと謂ふべし。

されば、吾人は學閥を以て無意義なりとするものなり。學閥を言ふものは強ちに嫉妬猜疑の念より出でたるもののみにも非ざるべく、眞に學術界の爲を思ひての業なるも多かるべし。されど吾人は、かゝる批難を敢てするに先ちて、大學と大學ならざる學校との比較、及び大學内部の事情、及びそが現今社會に於ける位置實力等に就て、精細なる比較研究を遂げむことを切望す。一二不平の小人輩の漫言を信じて這般の事實を顧みるなくむば、却て識者の物笑ひとなるに終らむ。世上に散見せる大學制度論の如きも、兎角は是の事實の調査を

遂げざるか、若しくは誤りたるより起れる未熟の斷案なりと覺し。(明治三十二年三月)

蟬しぐれ

◎基督教會の權利主義と自由主義とを説けるリギョール氏の論極めて可し。宗教は畢竟愚者の事。知を挾んで是れに臨む、自家撞着のみ。是を以て古來宗教の功德は盲信の人に現はる。

◎吾人は是れを冬時の道路に喩ふ。日光に觸れずして堅く氷結する處と、十分日光を受けて乾燥せる處と、等しく人の歩行に堪ゆ。唯、其の中間堅氷解けて而も乾燥せざる所、泥濘脚を没す、得て歩むべからざるなり。

◎日光は科學なり、氷結は盲信なり。人生實踐の主義として最も適切なるもの、素より科學の光に乾きたる大道なり。而も宗教の盲信に氷結せるもの、又以て躬行たるを得。唯、愁ひに科學の知識を收容して、其の盲信を塗飾せる、所謂進歩主義、自由主義の宗教は無用の長物のみ。

(明治三十一年八月)

日本主義と大文學

吾人文藝復興期前後の史乘を讀む毎に、常に一個の疑問を提出するを忍ぶ能はず。曰く、フ・レンツェの一市は何が故に爾かく多數の詩人、美術家を産出する事を得たりし乎、而して是等文藝史上千古の盛名は、何が故に特に十五六世紀の間に於て爾かく多きを列ねたりし乎。

フ・レンツェは眇たる以太利の一市也、史學者の告ぐる所によれば、其の最盛時に於てすら人口僅に六千に過ぎず。六千の人口は、我が東京市の二百五十分の一、是れを十五倍するも尚ほ本郷區に及ばざる也。而して此の眇たる一市が僅々百數十年間に於て世界文藝の歴史に貢獻せる所のもの、百五十萬人の東京市は果して幾千年の後に於て匹敵し能ふべしとするや。ダンテや、ジオットーや、レオナルドや、ベトラルカ、ボカチオや、ギベルチ、マキャベリ、ミケランジェロや、是の中の一人を有するも、以て百世の天下に誇るに足る。而して是れ皆六

千人のフ・レンツェが百數十年の間に於て産出せる所なりし也。フ・レンツェたるもの、何の祝福ありて果して能く是の如きを得し乎。ミラノや、ナポリスや、將たエチヤや、當時の以太利に於て慥に彼れよりも大なる都府なりき、天の寵光は何故に是等の諸市には降らざりし乎。抑、又十六世紀以後のフ・レンツェ及び全歐洲は、何故に文藝史上に於て是の如き盛觀を再びする能はざりし乎。

是に於て同一の問題は、他邦の文藝に關して起らざるを得ず。曰く、チョーサーより大沙翁に至るまでの二百年間に於て、英國は何故に一の大詩人を出すこと無かりしや。ミルトンの死よりテーズチースの生まるゝまで百餘年間の英國文學史は、何が故に爾かく落寞を極めたりし乎。抑、又ニーベルンゲン時代よりレッシングに至る數百年と、其後に踵跡相接續せるゲーテ、シルレルの盛時を併せたる一百年とは、盛衰何が故に爾かく相反せる乎。

是れを我邦に見る、延暦遷都以後の平安朝の文學は、竹取物語以下、源氏、狹衣、多武峰の諸物語に至るまで、典麗の文字獨り今古に俯仰せるに反し、源平以下の數百年は、何が故に爾かく國民文學の蕭索を致し、乎。何が故に特に元祿、享保と、文化、文政とは徳川文學の精

英にして、其間の一百年は何故に然らざる乎。化政より明治の二十年代に至るまでの六十餘年間に於て、何が故に我文學は爾かく甚しく衰頽したりし乎。

是の如き疑問は幾度びか問はれ、而して幾度びか答へられき。想ふに是れ人文史上の根本問題に接觸せるもの、俄に斷了すべきに非ずと雖も、尙ほ一事の炳焉として疑ひを容れざるものあり。何ぞや、大文學の勃興は時代精神の統一に伴ふこと、換言すれば、時代の精神定まらざれば其の文學も亦雄大なるを得ざる事是れ也。夫の平和の世にあらざれば藝術起らずと謂ひ、或は物質的傾向盛んなれば文學振はずと謂ふもの、吾人を以て見れば何れも是の眞理の一面を看取せるの言に外ならず。

夫れ藝術は畢竟時代の鏡也、時代の制約を離れて存在する藝術及び藝術家は未だ曾て是れあらざる也。夫れ唯、時代の鏡也、是れを以て時代の精神常に動き、随つて其の理想も亦定まらざらむ乎、時代の鏡たる藝術は獨り如何ぞ雄大なるを得べき。止水にして初めて鑑すべし、風波搖蕩須臾も已まざらむ乎、是れに蘸映するもの獨り沈靜なるを得べからざる也。若し藝術家にして時代の生兒ならば、彼れの心も亦時代と動靜を共にすべし。若し對して寫すべき

定在の精神なく、縁りて寫すべき靜止の心なくば、是の如くにして産出せられたる藝術も亦一旦夕の物ならむのみ。

吾人は我邦文學の振はざる所以を以て、文學者が時代を解せず、随つて顯現すべき其の精神と理想とを洞察するの明無きが爲なりとせり。是れ今の凡ての文學者が決して否定する能はざる所なりとす。所謂時代の精神其物に就ては、吾人多く説き及ばず、是れ時代精神の内容如何に論なく、今の文學者なるものは是れを靜觀し、批評するの能力無きを想へば也。實に吾人は今の時代に定在の精神と理想となきを認むると同時に、大天才に非ずむば是の際に處して能く千古の名を成すことを得ざるべきを想ふ也。而して願みよ、是の時代精神の實在せざるをだに看取し得ず、其の狭少なる管窺の中に喁吁して得たりとする今の文學者の大多数を憐れまますむばあらざる也。

人或は謂ふ、興奮と激昂とは大なる藝術を生むと。吾人を以て見れば、是れ其一を知つて未だ其二を知らざるの言のみ。大なる藝術は大なる動機によりて生まるゝこと、誰か之を疑はむ。實に一念の動くや、日星の光燿、河嶽の流時、何物の力も得て是れを壅塞すること能

はず、萬境一心に靡きて六合我れの外に一物無し、是の不撓の精力ありて萬古の名初めて成る。是の意味に於て藝術家は向上不退轉の大勇猛心を有せざるべからざるや、言を待たざる也。而も是の如きは物を以て我れに攝するにあり、我れを以て物に調するに非ず。萬境流轉の外に超然として、一心靜かに是れを觀取するの別天地を有するに非ざるよりは、如何ぞ過眼の形體以外、別に幽玄なる人生の意義を捉ふるを得べき。若し念々外界に執着して其の搖かす所とならば、見る所定まらず感ずる所深からず、塵に日常の皮相を描きて了らむのみ。されば藝術家は世を知ると共に世の動かす所となるべからず、人生世相の流轉を一念の靜に寓して、而も其の累はす所とならず、永く其の純一の自我を保ち、翻つて萬境を止水に觀するの覺悟あらむを要す。古より大いなる藝術、大いなる哲學、宗教、皆是の如くにして世に出でき。

菩提樹下に無上道を成すまでには、釋迦は幾年の靜思を凝らしたり。基督は四十日間沙漠の中に冥想せり。マホメットはヒラの山上に沈思して幻影を見たり。ダンテはラエンナの森の中に、セルヴンテスとパンヤンは獄窓の裡に、何れも多年の默思を友とせり。スコットは

軍馬の響の中にマミーオンを草し、ゲーテは祖國の傾危を知らざる爲して其の詩篇に耽りたり。ヘーゲルはイェナ大戰の日、正に其の哲學の論稿を脱し、反つて佛蘭西軍隊の街上に絡繹たるを見て問ふて曰く、「是れ何國の兵ぞや」と。凡そ大なる創作の世に出づるや、是の如きもの多し。是れ豈人生の眞義を觀するもの、須らく寂靜中に於てすべきを證するものにあらずや。

吾人は是の點より見て、今の我邦に大なる文學の産出せられ難き一の理由を見る也。今の我邦にありては、時代の精神尙は未だ統一せられず、隨つて一般社會は未だ一定の理想を有するに至らず、内外事物の變遷は日に其の急激を加ふるのみにして、人各安んじて適從する所を知らず、一に當眼刻下の必要に制せられて、其「今日」を経過するもの多し。されば世を擧げて永遠の渴仰なく、沈靜の趣好なく、時尚且暮に淪り、人は流行を追ふて走る。文
明史家は十九世紀の全體を以て革命の時代と云へり、吾人は我邦の最近三十年に於て特に甚しきを見る也。實に本邦現時の社會は、猶ほ走馬燈を見るが如し。藝術家をして超然として靜に觀察するの餘裕を得しめむが爲には、餘りに紛然たる社會也、餘りに鬱々たる社會也。

是の如き社會の中、必ずしも有力なる精神と理想となきに非ず、但だ是の如きは今の凡庸なる文學者の單簡なる頭腦によりて解釋せられむには餘りに複雑なる也。一言すれば、今の世に大なる文學の產出せられざるは、文學者と時代と互に其の責を分たざるべからざるなり。論じて茲に到れば、大なる文學の出づるを望むもの、先づ時代精神の統一を望まざるべからず。而して時代精神の統一は、必ずや教育道德の主義の統一より初まらざるべからず。是に於てか大公至正なる日本主義の必要起る。

(明治三十二年四月)

恐ろしき沈黙

大いなる戦争の前には恐ろしき沈黙あり、而して戦争の勝敗は、凡て是の沈黙の間に成さるゝ也。

今や、見渡すところ、日本の社會は平和の社會也。政治、宗教、教育、學藝、何れの方面

に向ひても、大いなる争闘なく、大いなる運動なく、大いなる旗幟無く、大いなる輿論公議無し。然れども吾人は、是の無事なる社會の裏面に於て、幾多の暗流の交錯せるを認む。而して將に來るべき社會の性質は、是の暗流が如何なる方向を取り、如何に綜攝せらるゝやによりて決定せらるべき也。

願くは大いなる決斷あれ、大いなる飛躍あれ。是の大決斷、大飛躍に達せむが爲には、已むを得ずむば、大いなる争闘を爲すも可也。最も恐るべきは、一時の苟安也、眼前の彌縫也。斯かる場合に於て平和を好む人民は、古より大いなる功業を成し遂げ得ざる人民也。

恐ろしき沈黙の後には、必ず恐ろしき戦争あるべきを覺悟せよ。

(明治三十二年六月)

東北の遺利

面積九州に倍して戸口却つて是れに半ばし、人才寥々として空しく漠々たり。嗚呼不幸な

る東北よ。

東北の百弊、歸する所は交通機關の缺乏にあり。人は北海を説きて東北を言はず、何爲れぞ其の絶大なる遺利を顧みざる。

天下の利は人物に若くは無し。今の日本の要する所は、アゼンス人に非ずしてスバルタ人也、佛蘭西人にあらずして魯西亞人也。是の俘華淫靡なる社會を刷新するものは、寧ろ迂愚に近きも便佞ならざる、寧ろ粗野に近きも輕薄ならざる、剛毅敦厚なる新人物の注入にあるのみ。而して吾人は信ず、今の日本に於て是の任に當り得るもの、先づ指を東北に屈せざるべからず。

然れども今の東北は、其の脈管たる交通機關の難澁によりて、天下の大勢と隔絶せられ居るの觀あり。幾多無名の俊髦人才は、未だ國家に盡すべき自己の天職を自覺するに及ばずして、空しく山林の人たらむとする也。吾人實に國家の爲に是れを惜しむ。

(明治三十二年六月)

坪内雄藏氏の『倫理教育論』を讀む

「日本教育」の第四號及び六號に連載せられたる坪内雄藏氏の『現今倫理教育方案の根本的誤謬』と題する一文は、慥に今の教育界の時弊に適中せる最も愷切なる議論なるべし。吾人は多くの尊敬を以て是れを讀みぬ、而して是れによりて啓發せられたるもの少からざるを覺えぬ。是れ吾人が切に氏に謝する所也。今や一代思想の變遷につれて、倫理教育の理想尙ほ未だ定まらず、隨ふて其の方案如何は教育當事者の間に夙に未了の宿題たり。是の際、學識經驗併び備はれる坪内氏より、是の愷切なる意見を聞くを得たるは、吾人が潜かに見て教育界の慶事とする所也。唯、恨むらくは、氏の論中、聊か二三の首肯し難き點あり、乃ち左に開陳して、氏并に江湖の教を請はむと欲す。

一 倫理教育の本領に關して吾人と其説を異にす

坪内氏の論を讀みて、吾人の先づ注意せるは、所謂倫理教育の當に有すべき勢力に就て、氏と吾人と大に其の所見を異にせること也。氏は云へり、「孝心絶無なる少年等」も、倫理教育によりて其の品性を陶冶せらるべく、又件の孝行を「實踐するの念を起さしむべく」、「父母をすらも、私欲を離れて慕ふことを知らざる少年輩」も、是によりて「道念を注入」せらるべきものなりと。又曰へり、「消極的誠訓を發起點として、常に之れに依據して國民的道德を講説せんか、數年ならずして生徒の大概は溫柔となり、無氣力となり、不活潑となり、所動的となるか、然らざれば他人の鼻息をのみ是れ窺ふ無主義無信念の徒となるか、然らざれば心にも無き追従を事とする阿諛矯飾の人となるか、いづれにもせよ、正直剛邁の氣質、有爲活潑の品性などは到底之れを陶冶するに由無かるべし」と。一週一時間の倫理講話の力にて孝心絶無の者も陶冶せらるべく、又是の講話の方針次第によりては、無主義とも、阿諛矯飾とも、又は正直剛邁とも、如何様とも、感化し得べしとせらるゝは、吾人を以て見れば、聊か所謂倫理教育なるものの勢力を重く見過きたるの嫌ひなからずや。素より事に躬ら倫理教育に従はむ者には、斯程の心懸も大切なるべけれども、倫理教育の批評家の言としては、聊

か事理を無視せる言には非ざるか。斯かる立言に基きて、倫理教育の方案を樹てなば、能はざるを責めて徒らに事に當るものを苦しむるに終らむ也。吾人を以て見れば、倫理教育の批評家たらむものは、先づ今の教育制度に於て、倫理教育なるものの當に有し得べき勢力の範圍を究め、而して後、其の方案に及ぶべし。是れ吾人が坪内氏と其の見所を異にせる第一點也。

吾人の信ずる所によれば、所謂倫理教育の當に有すべき勢力は、坪内氏の思惟せる如く爾かく大なるものに非ず、また大となり得るものに非ざるべし。倫理科の講話は、今の教育制度にありては、一週歴かに一時間なるに非ずや。それも智力上の學科ならば、其の教授の結果著るしきを得べむも、倫理科は、坪内氏が言へる如く、品性陶冶を主眼とするもの也。而して品性なるものは、言ふまでもなく數學、物理學などの如く理論によりて注入、もしくは開發せられ得べきにあらず、實に人心活動の全範圍に涉り、あらゆる經驗の能感發受に成れるレザルト也。かかる品性を一週一時間の講話もて根本的に左右し得べしとは、吾人の思惟し能はざる所也。されば品性陶冶のまことの學校は社會全體なりと見るを妥當とすべ

し。行住坐臥、あらゆる經驗の發受は己れの意識すると意識せざるとを問はず、凡て吾人が品性陶冶の因縁とならざるは無し。丁年以上の有教育者にありては、自己の意力によりて多少この發受を制するを得べけむも、中等教育に於ける未丁年者にありては、經驗の力は優に品性の主動者たり得べし。されば其の住む所の家庭、其の居る所の社會、又は其の交はる所の朋友は、かゝる少年の品性を陶冶する最大の勢力なるは言ふまでも無き事なるべし。是の際、所謂倫理教育は、その一週一時間の講話を以て幾何の影響を有し得べきや。けに是の講話に説く所は、道義の本質、徳性の根原にして、其の教は實に有益類ひ無きものなるべし。されど社會、家庭にして、是の教と相適從せざらむには、例へば江河の流水に一掬の鹽を投じて、其の鹹味を味はむとするに似たらすや。是れによりて鉛細工の如く品性の陶冶を如何様にも造り變へむなどは、吾人の見る所にては思ひも寄らざる也。

斯く言はば、吾人は如何にも倫理教育を蔑視して、そを用無きものに輕しめたるが如し。されど決して然らず。吾人は倫理教育の正當なる價值を認め且つそを重んずることに於て、決して人後に落ちざる也。さらば何處に倫理教育の正當なる價值ある乎。吾人の信する所に

よれば、學校教育に於ける倫理科の講話は、學校以外に養はれたる道德的品性を明白にし、確實にし堅固にする事に於て、其の最も重要な價值を有すべき也。

故如何にとならば、既に一週一時間の講話に品性陶冶の大勢力あることを望むべからずとせば、かゝる職能は主ば學校以外の社會に待たざるを得ず。然れども社會が其の種々の經驗によりて少年の品性を陶冶するや、陶冶せられたる當人にとりては、多くの場合に於て無意識也、唯、言ふべからざる一種の情念として、善惡是非の撰擇を物するのみ。社會が吾人に道德を訓ふるや、徳の名に於てせずして、利害の名に於てし、習慣の名に於てし、情誼の名に於てす。畢竟多くの場合に於ては、道念としては無意識也。此の道念としては無意識にして、唯、利害、習慣、情誼の名によりて漠然と領悟せる徳性に明白なる道理を教へ、犯すべからざる道義の命令として之を確かむるものは、即ち所謂倫理教育に外ならざる也。されば所謂倫理教育は、徳を造るものにあらずして名くるもの也。少年の潛明に有する徳を顯的に確むるもの也。漠然たる感情として有せる徳性を、道義の命令として堅むるもの也。約言すれば、品性を造るものに非ずして、已に造られたる品性に明白なる意識を與へ、以て之を一

層確實にするもの也。吾人は堅く信ず、倫理教育の本領茲に存して、而して他の何處にも存せざることを。是れ吾人が是の根本に於て坪内氏と見る所を異にする所以也。

然れども、難者ありて必ず問はむ、品性の陶冶を主ばら社會に任ぜば、腐敗したる社會の造るものは、亦腐敗せる品性ならざるべからず、如何と。答へて曰く、然り、洵に難者の言の如し。けに全社會にして腐敗せる場合は、倫理教育にとりて最大の厄難なり、されば良し倫理教育の効果、是の際見るべきもの甚だ少しとも、そは教育の無能にあらずして、寧ろ社會の罪ならむ。教育者如何に奮發すると、一週一時間の講話を以て全社會の風潮に打勝たむとするは、所詮は一掬の水を以て車薪の火に濺ぐに均しからむか。是の如き場合にも、品性陶冶の事業を以て一に倫理科に待つは、是れ能はざるを責むるもの也。吾人は倫理教育の萬能ならむを希望すること萬々なりと雖も、事情に於て許さざるを明知する以上は、其の固有の吟域を守りて靜に是れに處するの方案を立つるこそ、却て實際に益あらむと思ふなれ。

二 是の根本の異説より生ずる方案の差異

吾人は既に倫理教育の本領に關して、坪内氏と大に其説を異にするを以て、其の方案上の意見も亦おのづから同じきを得ず、こは已み難き結果なるべし。坪内氏は以爲らく、教育の勅語は、父兄教師の讀むべきものにて、子弟に教ふべき性質のものに非ずと。其の文體は或は然らむ、されど忠孝二道と學國一致とが、國民道德の大本なること、彝倫の教、奉公の務に至るまで、孰れか少年子弟が且夕奉體すべきものに非ざらむや。品性陶冶の心理上の教育法の如きは、素より勅語に求むべからず。されど吾人の所謂品性を確實にし、道念に明白なる意識を與ふる上に於て、いとも大なる效力あるべきこと、誰れかは之を疑ふべき。又例へば報恩説もて孝を説くは、孝てふ道念を新に啓發する効果は無かるべきも、臆ろけながらも既に啓發せられたる、もしくは啓發せられむとする道念を、愈確實にする效は無き乎。想ふに古より孔孟の聖權によりて忠孝の道を命令的に教へ、而も能く著大の効果を收め得しは、畢竟是れによりて初めて品性を造るにあらずして、經典以外に於て既に造られたる、若しくは造られむとする品性をいよく堅固にし、明白にしたるに外ならざるべきか。又君民同祖、君臣一家、忠孝一致等の教もて品性を造らむとするは、坪内氏の説の如く「いとも迂闊

なる方法』なるべし。されどそを明白にし、確實にし、堅固にする上に於ては、其の效力決して少からざるべきを信する也。坪内氏は、よもや是れをしも否認すること無かるべしと思ふは如何に。

斯かる方案上の説の相異なるは、畢竟其の根本思想の異なるに依ることなれば、一一擧げて争ふも由無き也。唯、是の根本なる倫理教育本領問題に關しては、吾人は坪内氏の明白なる意見を請はざるべからず。之を要するに、中等教育に於ける倫理科の講話は、其の方案如何によりては『數年ならずして生徒の大概は無氣力となり、不活潑となり、所動的となる』程のいともく大なる勢力を品性陶冶の上に有すべき、又有し得るものなる乎。又は社會一般の道念によりて養成せられたる、又は養成せられむとする品性を明白にし、確實にし、堅固にすることを以て、倫理教育の本領と認むべき乎。吾人を以て見れば、是れ先決問題也、將來の德育方案を一變し得べき程の勢力ある問題也。

三 坪内氏の教を請ふべき他の條々

先に述べたるが如く、吾人と坪内氏は、倫理教育の根柢に就て其説を異にするものから、氏が其の根本的發起點として説かれたるくだりには、流石に今の教育者を啓發するに足るべき有益なる注意の幾多を認むる也。想ふに氏が將來に於て樹てらるべき德育方案なるもの、將た是の點より來ることなるべし。吾人と氏と、既に立脚地を異にするに拘はらず、氏が論の是の部分、最も多く吾人に興味を與へたり。されど尙ほ不明の點二三あり、掲げて氏に質す。

(一) 氏は從來の國家主義の德育、例へば孝を發起點とするを難するに左の二個の理由を以てせり。曰く、孝は積極的道德の基礎たり得べきも、積極的道念の基礎としては未だし。曰く、人何が故に孝を行ふにやと問はば、孝以外の道德の根據を求めざるを得ず、故に教訓の發起點たるに適せずと。吾人は前の批難に關して問はむ、曰く、孝を消極的にのみ解するは、解するものの心にあらざる乎。時勢は變れり、而して解釋法異ならずむば、是れ素より積極的道德の基礎となし能はざる、所謂時勢後れの道德たらむ。教育者の務めは、是の解釋方法を時世に應じて擴充するに存せざる乎。抑、又古來道德の基礎として國民の疑ひを容れ

ざりしものを、一朝にして消極的なりとして放棄し去るは、德育方案として其の宜しきを得たるもの乎。況や今の世に於ては、時代の精神未だ定まらず、其の所謂積極的の道德の理想も尙ほ未だ明ならざるをや、如何。後の批難に對して問はむ、曰く、「何が故に孝を行ふや」と問ふは、果して今の人の道德心の現狀なるか。他邦は知らず、孝の如きは一般日本人の先天的もしくは本能的の道念と見て差支無きものに非ざる乎、如何。

(二) 氏は既に『何故』の説明を他に求むるの要あるが故に、孝を發起點とすべからずと説けり。而れども本能を外にして自らは『何故』を説明し得るものと云はば、是れ自家撞着なるべし。氏は孝以外に何物を是の如き道德的本能たり得べしとする乎。氏の所謂「最も單純にして最早分析すべからざる情緒若しくは意志」にして、道德的にして且つ德育の基礎たり得べきもの、果して是れありや。果してあらば、そは何なりや。吾人は「己れの欲する所之れを人に施せ」と云ふが如き情念は、決してかゝる單純なるものに非ずと信ず、如何。

(三) 氏が是の如き單純普遍なる道德的情念を發起點とし、是れによりて凡ての國民的の道徳を説明解釋せむとするは、其の教育方案として形式甚だ美なりと謂ふべし。然れども國家

には歴史あり、權力は道德を作るを記憶せざるべからず。氏の方案によれば、個人と個人との道德は、或は是の上もなく好く説明し得らるゝならむ、而も家族、國家の大に及びても、尙ほ一貫透徹して其の道德の基礎たり得べき乎。是れ最も審に攷究せざるべからず。専ら個人的情念に根蒂せる道德は、或點以上は家族、もしくは國家の道德と調和し難き事ならずや。理論に於ては如何様にも説明は附くべきも、實踐道德の主義としては甚だ妙ならぬ節無きを保し得べきや。切言すれば、是の如き個人的情念に立てられたる道德は、日本國民の道德として、忠孝報國の大義を十分説明し得べきことを保し得る乎。是の點に於ては、從來の道德主義に劣ることあらざる乎、如何。

是れ吾人が倫理教育の發起點に關して、坪内氏の教を請はむと欲する所也。想ふに是の如きは、國民教育上の一大問題なり。吾人は平素德育方案の改革を冀望せる我教育界が、何故に坪内氏の是の論に對して一言する所なきかを怪しまざるを得ず。然れども世上吾人と同一の疑惑を有するもの素より少からざらむ。坪内氏は吾人が質疑の禮に嫻はざるを想し、我教育界の爲に高教を吝む無くむば幸也。

(明治三十二年五月)

國民の歌

閑適意のまゝにして神興湧くが如き時、厩に劇務を脱れて襟懷俄かに肝きを覺えたる時、或は淺酌微薰を帯びて清風を迎ふる時、或は好風景に對して幽情を訴ふる時、請ひ問はむ、吾人に歌ふべき歌ありや。

人の聞かむことを憚るものは、吾人の歌にあらざる也。藝妓に對して初めて歌ふべきものは、吾人の歌にあらざる也。再び請ひ問はむ、吾人に是の如き歌ありや。

吾人は音楽家教育家の盡力を謝せざるべからず。普通教育授くる所の唱歌に對しては、少くとも卑猥なる俚諺を、少年間より驅除しつゝある功績を認めざるべからず。諸種の音楽會の演奏も亦吾人の深く歡ぶ所也。唯、吾人は普通の國民として、其の感興を遣るに足るべき歌謠を要求す。漢詩好し、謠曲可なり、唱歌亦不可ならず、唯、吾人は彼のローレライの如く、リーベスフリーリングの如く、高尚優美にして且つ國民的なるものを望むのみ。抑、吾人は永く歌ふべき歌なくして已まざるべからざる乎。

(明治三十二年八月)

常識の缺乏

若し常識を缺けるものを不具とすれば、我邦人の大多数は儘に不具なる人民也。學者は其の學を知るのみ、政治家は其の政治を知るのみ、軍人、實業家、宗教家、教育家は、唯、共に其の軍事、實業、宗教、教育を語るべきのみ。國民の全體を通じて會通融合の媒介たるべき常識を有するもの、甚だ乏しき也。

夫れ唯、常識を有せず、是れを以て理を辨じ、事を盡す、關する所は一方面、一局部のみ。人生世務の大體より打算し來りて、大中至正の公儀を標示するもの、甚だ乏しきを致す。

夫れ唯、常識を有せず、是れを以て法を運らすもの、其の形式に泥みて其の精神を遺却し、事に當るもの、膠柱の規則を重んじて臨機の妙川を解せず、是れを以て國家の事、多くは偏

輕に非ずむば則ち偏重のみ。

夫れ唯、常識を有せず、是れを以て自他を秤量して公平なる能はず。人々遂に相信せざるを致す。故に售るものの估ふものに對する策として懸直あり、估ふものの售るものに對する謀として、直切りあり、是に於て乎、世間もろくの不正、虚偽騙詐の事起る。

願くは我邦人をしてイマ少しく常識あらしめよ、法令の繁、必ずしも煩はしからざらむ。争ふものは笑ふて手を握るを得む。夫の學者なるものの小面倒なる理窟に迷はざる、事も亦少かるべき也。世に迷惑なること多し、而れども常識なき學者の杓子定規論ほど、社會に迷惑なるはあらざる也。

(明治三十二年八月)

時勢と詩人

一尺の木、山嶺にあり、亭々として蒼空を摩す、木の高きに非ずして、居る處の高き也。

世に勢ひなるものあり、是れに乗ずるものは勞せずして功を收む。識必ずしも高きに非ず、力必ずしも強きに非ず、居る所の地おのづから然らしむる也。凡そ政治界にまれ、宗教界にまれ、實業界にまれ、古より時代の革新者として歴史上の功名を收めたるもの、多くは是の勢ひに乗じたる者に非ざるは無し。

所謂勢ひは時代の精神也。凡そ何れの時代と雖も其の精神を有せざるは無し、而も其の精神は、凡ての時代に於て必ずしも統一せられざる也。成功の秘訣は、統一せられたる時代精神に乗ずるにあり。其の未だ統一せられざるに當りて、將に來らむとする時代精神の統一を先見せるものを豫言者と謂ふ。其の識見高邁、遠く時流を抜けりと雖も、而も勢ひを距ること尚ほ遠し、是れ其の事業の多く失敗に終る所以也。是れを以て基督の前に預言者は迫害せられたりき、ルーテルの旗未だ揚らざるに先ちて、サボナローラの頸血は空しく濺がれき、維新の革新に先ちて、幾多の志士識者は、其後に來るべき平凡兒の成功の爲に勢ひを造るの犠牲となりたりき。是の如きは嘗に政治宗教の史上に於て見るのみならず、文學史上に於ても亦是れを見る、而して最も近き例しはテニゾン氏なり。

今やキップリング氏の名聲は全世界に轟けり。彼れが三十七歳の一青年詩人にして、獨のズーデルマン氏、ハウプトマン氏、魯のトルストイ氏、那のイブセン氏にも優り、殆ど佛のゾラ氏と角逐して英語國民の間に崇拜せられつゝある情況は、十九世紀の文學史上に殆ど其類を見ざる奇觀也。往年彼れの北米に病むや、英國人は恰もグラッドストーンの病を憂ふるが如くに憂へたり。King's Shrineなる名辭は殆ど普通の用語とならむとせり。彼れの崇拜者は揚言して曰く、若し英國の國是にして變更することあらば、其の第一の聲はキップリング氏の口より聽かるべしと。盛んなる哉、一青年詩人にして國世の人心を籠絡する彼れが如きは、少くとも英國文學の史に上於て殆ど見ざる所なり。而して是の如き名望の由つて來る所は、畢竟彼れが帝國主義の詩人たるが爲に外ならず。

帝國主義が近年俄然として英國の人心を支配し來りしことは隠れも無き事實也。即ち是れ現代英國の勢ひ也、時代精神也。キップリング氏は、偶、是の勢ひに乗じて、一代民衆の渴仰に明晰なる發聲を與へたるものに外ならず。然れども焉ぞ知らむ、歴史上帝國主義を唱へたる最初の詩人は、キップリング氏に非ずしてテニゾン氏なるを。英國の政治家が、夢にだ

も想ひ到らざりし時に當りて、早くも帝國主義の新福音を宣傳せし詩人は、實にテニゾン氏也。然るに世に帝國主義の詩人としてテニゾン氏を言ふもの無く、今日却てキップリング氏の全盛を見る。吾人は轉た人事の成功の偶然なるを歎せざるを得ず。英國人の帝國主義とは植民地統一主義の謂ひに外ならず。政治歴史の上に於ては、近年フォルスター氏が是の主義を唱道せし迄は、一國の輿論は非帝國主義に存したりき。即ちサー・ロバート・ピールが、上下加奈陀の獨立を主張せしは、千八百四十一年にして、ビコンスフィールド伯が是れに和して、『斯かるつまじなき植民地』は放棄するに如かずと論ぜしは、千八百五十一年なり。

千八百七十年、史家フルードはグラッドストーンの説を引き、各植民地をして自治獨立せしむべしとの意見を公表せり。越えて三年、「タイムズ」新聞は當時の輿論を代表し、自治制度を加奈陀人に許すべきことを論じて曰く、『彼等が見習奉行の時期は既に過ぎ去れり』と。是の如き非帝國主義の風潮に反對したるものは、政治上に於てはフォルスター氏にして、文學上に於ては實にテニゾン氏なりき。

吾人の見る所を以てすれば、テニゾン氏の帝國主義は、千八百五十二年に於て既に其の萌

芽を現はせり。氏は小奈破翁の暴横に反對して歌ふて曰く、

吾等の存する間、良し全歐洲の暴風吾等の上に落ち來るとも、吾等は自由に主張せざるべからず。吾等は日耳曼の一聯邦に非ず、歐洲の一大國也、吾等は飽迄自由に主張せざるべからず。良し吾等にして爲に斃るゝとも、吾等の事業は永遠に傳はるべし。(意譯)

是の愛國の感情、後に至り最も熱心なる帝國主義の鼓吹となりて表はれたり。Idyls of the

King の跋として女皇に呈したる一小詩は、純然たる帝國主義の主張也。曰く、

吾等は近頃北方の植民地に就て吾等を侮辱する宣言を耳にせり。曰く、「北方の友よ、汝自ら汝の事を爲せ、今の如き状態にありて初めて忠義たり得べくむば、忠義は汝にとりて餘りに不廉也。友等よ、汝の王家に對する愛情は、汝にとりて寧ろ重荷たらむのみ、若し、束縛を解きて分離し去らむには」と。是の如きは果して英吉利帝國の言ふべき言なる乎、吾等を司配者たらしめし信念は、果して是の如きものなりし乎。

當時の人心は彼れの豫言に耳を傾けざりき、然れども今や彼れの詩は英國政治家の政略と爲れるに非ずや。彼れ同じ詩に於て更に是の意を述べて曰く、

吾等の王室に忠なるは、即ち吾等の子孫に忠なる所以也。吾等の大英國の爲に是の島帝國と、其の無數の屬領と、其の東洋の大半島とを愛護せよ。哀しい哉、我が島帝國は、尙ほ未だ自國の大なることを自覺せざる也、若し自覺するに及びて、自ら其の大いなるに畏怖せむか、吾等は即ち滅びたる也。(意譯)

今日英國政治家の唱道する「帝國同盟」もしくは「植民同盟」の思想も、また明にテニゾン氏の主張せる所なり。

吾等の名譽ある過去に於て相提携したる吾等兄弟は、遂に別れざるべからざる乎。凡ての禍福、凡ての變遷を通じ、吾等は一國民として團結する能はざる乎。耳を傾けてブリテン國民の聲を聽け、「子供等よ、互に力めて一帝國たれ、心よりして一ブリテンたれ。唯、一個の生命、唯、一個の旗幟、唯、一個の王位——吁ブリテンの子供等よ、何ぞ自ら保たざる。」

是の如きはテニゾン氏の帝國主義也、而して同時に英國の帝國主義也。今やキップリング氏は、帝國主義の詩人たるの故を以て、名聲天下に轟けり。然れどもピコンスフ、カールド伯が

加奈陀の放棄を説き、グラッドストーン氏が愛蘭土自治に熱中する時に當つて、是の如き思想を宣傳したるテニゾン氏に頒つに同一の名譽を以てせざるは訝しからずや。帝國主義は文學上キップリング氏によりて創唱せられたる主義に非ず、氏に先つこと少くとも二十年の往時、既にテニゾン氏によりて最も明に宣傳せられたる主義なり、而して獨りキップリング氏を以て帝國主義の詩人と爲すは何ぞや。大凡そ時勢と詩人の遇不遇は、實に是の如き也。機尙ほ熟せず、勢ひ未だ成らずむば、豫言者の聲も世に解せらるゝに由無し、一旦風雲に際會すれば、凡夫庸者尙ほ勞せずして飛躍し得む。一人にして時勢を作るは得て望むべからず、大なる成功は唯、時勢を見て是れに乗するにあり。而して時勢は如何なる世に於ても必ずしも功を成すに可ならず、功を成すに可なるの時勢に遭遇すると否とは、所謂天運のみ、人力の如何ともする能はざる所なり。

(明治三十二年十月)

板垣氏の奇言

板垣退助氏が、軍人より政治家に轉じたる理由と云ふものこそ近頃珍らしきものなれ。

予(板垣氏)が軍職を抛ちて政治界に入るの決心を爲し、は、遠く會津戦争の當時にあり。會津の落城と共に、城下の百姓は予に芋を獻じたり。其は、予は其の領主の没落と共に進退せざるべからざる領内の百姓が、官軍とは云へ、敵としたる我等に糧を送るは如何にも愛郷心に乏しきものと考へ、若し當時の我國民總て斯かる思想を懐けるものとせば、一朝外國と有事の日、如何なる失態を來すやも知るべからず。故に彼等下層人民の思想を開發し、上下一致以て國家を護る必要を感じたり。予が今日あるは是の初一念によれり、云々。

あはれ『上下一致以て國家を護る』の精神を國民の間に扶植せむが爲に政治界に入りたる板垣氏ならば、何とて極端なる個人主義をば唱へたるぞ。何とて『我輩の斯の政府を見ること、斯の人民の爲に設くる所の政府と看做すより外なかるべし』との主義に立てる愛國公黨をば組織しけるぞ。氏が民選議院主唱者の一人として、其の郷里なる高知の青年を鼓舞して立て

たる『立志社』の趣旨には『夫れ我輩齊しく我日本國の人民たり、則ち三千有餘萬人盡く同等にして貴賤尊卑別なし』とあるは何事ぞや。氏一私人の意見は知らず、政治界に於ける板垣氏は、常に國家主義に反對せる歴史を有せるは明なる事實とこそ覺ゆれ。さるを今日に及びて、維新の初めより嚴格なる國家主義を持せりと様に言はるゝは、いとく點頭き難き次第なり。

總じて政黨者流は、演説こそ上手なれ、政治國家などの知識は極めて幼稚なるが多し。自由主義を唱へたる人、争でか自由の意義を解し得たるべき。されば『板垣死すとも自由は死せず』と云ふ様なる夢の如き言葉さへ一世の名言として傳へられしこともあり。板垣氏はよもや今日に於て、明治十年の個人主義を唱へ得ざるべし。何ぞ獨り維新當時の精神を國家主義として説明するの陋なるを覺らざるや。

(明治三十二年十二月)

青年の時弊

(編者云、こは櫻洲青年同志會の爲めにせし演説の筆記なり)

諸君、予は本日闔らずも出席して演説することになりましたが、此處に集まられた人は、予が想像したよりも甚だ少いのであるが、會員名簿を拜見すれば、八百幾十名の多数である。若し予の話が印刷せられて、會員諸氏に頒布せらるゝこととなれば、予は即ち八百幾十名の青年諸子の面前に於て御話すると同じことであるから、予は甚だ満足に堪へないのである。

扱て、本日諸君に御話することは、否、無きにあらざして、御話することが餘り多過ぎて、特に其中から話題を見附け出し難いのである。其れであるに依つて、本日は只、平常の所感を秩序なく述ぶるから、其旨を承知して貰ひたい。

新時代に處するの覺悟

今日我國に於ては、青年の團體なるものは甚だ数多いのである。櫻洲青年會の如きも、蓋し其中の重なるものであらう。團結の必要は、予も大いに認むる所である。現時の社會に於て最も憂ふべきは、老成者、青年者に限らず、凡ての階級間に團結の乏しいことである。即ち各個人が獨立心を保ち、互に譲り合ひて同一の運動を爲すといふ所の精神に乏しいのである。政黨と云ふものは、利害の關係より良心節操を賣りて互に一致するものであるけれども、利益なき所に於て大なる團結のあることは無いのである。本會は世の滔々たる團體と異り、立派なる主義の上に立つて進行するといふことは、實に今日の團體中の模範と看ても敢て差支なきやうに思はれる。今日の社會の事業は、言ふまでも無く青年者の手に俟つものが頗る多い。如何なる社會に於ても、大事業は英氣勃勃たる青年を待つて爲されねばならぬのである。即ち學術、宗教、教育、政治、すべてのものの革新は、青年の元氣に待つ所のないものはないのである。果して然らば、其の目的を達する爲めに本會の如きものを設立すると云ふ

ことは、予の大いに賛成する所である。

明治維新の改革ありてこの方、三十餘年を過ぎ去り、其の時代の青年は即ち今日白髮の老翁である。この後を承けて第二の維新の局に當る者は、吾人青年の職務であると云ふことは申す迄も無いのである。吾人が、將來の社會に於て爲すべき事は非常に多いのである。決して、我れをして二十年以前に生れしめばと云ふが如き嘆聲を發するの必要は無いのである。唯、今日までは、一朝風雲に乗ずれば、格別の能力の無い人物でも高位高官を得た者が多かつたけれども、今後の青年は、僥倖にて立派なる地位を占むると云ふ事は、到底夢想することが出来ない。今後は必ず實力に依つて進まねばならぬ。故に、新時代に處する諸君の覺悟を一定し、その覺悟に依つて猛然として進まねばならぬのである。其れ故、新時代に處する覺悟は如何なるものであるかと云ふことは、實に諸君の問題であるのみならず、社會一般の大問題である。

所謂國家主義

先日幹事より頂戴した雑誌を見たのに、其の綱領に、第一、道德主義は國家主義を探ると云ふ明文があつて、予の所謂日本主義と擇ぶ所が無いやうである。是に於て予は大いに感じたから、一言諸君に告げなければならぬ。諸君が主張する國家主義とは果して如何なるものである乎を、諸君がどれ程了知せられて居るかと云ふことは、少しく疑ふべき次第である。如何となれば、今日立派なる學者間に於ても、其の意見が區々にして一定せざるが如き難問題であるに依つて、諸君の如き青年が、斯くの如き主義を公示して行進することは、甚だ穩當ならざるやうに思ふのである。併し是れを以て諸君を責むるのは慘酷である。何となれば本會は二十歳位の青年に依つて組織せられて居るものであるに依つて、其者をして此の如き主張を爲さしむるに至りたるは、實に社會の罪と云はなければならぬと思ふ。即ち今日の教育制度の弊が然らしめたと云はねばならぬと思ふ。勿論國家主義なるものも、學説としては立派なるものであるけれども、青年諸君にまで之を唱へしむるに至りては、實に心細き次第である。

窮屈なる教育制度

今日世間よりやかましく非難のあるのは、官立學校教育の弊害である。其の弊害の重なるものは、教育制度の甚だ窮屈に失して、恰も人間を鑄型に入れて物を作り出さんとするが如き方法である。換言すれば、人々の出づるを拒む教育法である。故に官立學校より出でたる人物は、可もなく不可もなき鈍栗の長比で、其間に傑出した人物がないから、世間より官立學校は人物を出す能はずとの非難をすら被るのは、尤もな次第であると思ふのである。其れ故に此の弊風を掃蕩して、之が改善の策を講じなければならぬ。是れ即ち政府當路者の責任であると同時に、青年諸君の責任である。諸君は今日の窮屈なる教育の弊を脱して、自由教育の精神を開発せねばならぬ。曾て聞く、仙臺の高等學校長は極端なる國家主義を有つ所の人であつて、其人は圖書室中に在る徳川時代の書物を取去つた。加之同校内に組織せられたる近松研究會に熱心なる人を譴責したさうである。予をして言はしめば、是れ窮屈なる教育の弊を大に行つたもので、實に悲しむべきの至りである。諸氏は勿論巖谷君の述べら

れた如く、文學上の弊風は考へなければならぬけれども、それとて餘り窮屈にせらるゝは却つて宜しくない。人間は兎に角多方面にあり得たいものである。つまらぬ虚榮に誇り、又は墮落の境遇に陥るといふは、餘り一方に偏する窮屈なる教育を蒙れるものの場合に最も多いのである。

今日の社會は、實に趣味なき人物の衆合體である。政治家なれば只々政治の話のみをし、實業實なれば實業の話をするのみで、自己の職業以外の事は何も知らぬのである。斯くの如き現象の起るは何故であるか。是れ即ち餘り窮屈なる教育に養はれたる結果である。兎に角人間は精神上的の快樂が無ければ生活はゑがたい。若し之なければ、不識不知の間に、惡魔の巢窟に導かるゝのである。即ち人間に興味が無かつたならば、遂に惡道に陥るのである。今日の社會を見れば、道義紊亂し、酒色に沈湎する者が甚だ多いのである。是れ人間が精神上的の快樂と云ふことを知らないからではあるまいか。即ち窮屈なる教育に甘んじたる結果ではあるまいか。故に當事者は、教育を窮屈にして餘り厳しく束縛せぬやうにしなければならぬ。萬一是の如き窮屈な方針に傾くやうな事があつたならば、生徒よりして自ら自由の方面を發展することに努めなければならぬ。

社會が、前に述べたる如き人物に満ちたならば、職業の外に話す事が無いから、政治家、宗教家の宗旨違ひの者が集まつた時にも、交情を温むる道が永久にないのである。随つて遂に肉體上の快樂を媒介にするやうになる。是れは弊の一端である。以上の次第であるによつて、諸君は極力官立學校制度の弊たる窮屈教育を脱すること、を求めなければならぬ。併し予は斯くの如く言ふも、徒らに虚榮に走り、ストライキなどをせよと云ふのではないから、此點は大に注意して貰はなければならぬ。

無規律なる社會

今日この席上に於て遺憾とする所は、幹事の話に依れば、出席の通知をして置いて十人許りもまだ來ない者が有るとのことである。抑、約束を破るなどは、青年として眞に恥づべきの至りである。是れ獨り本會のみならず、由來社會も大に困つて居る弊風である。然るに粹の中にて最も粹と呼ばれたる本會の會員にして此事あるは、予の甚だ慨嘆に堪へない所であ

る。併しながら諸君のみを責むるのも慘酷である、社會も共に責めなければならぬのである。元來國家の富強なる所以のものは、其の重なる原因は、國民の規律が正しいからである。嘗て陸軍士官學校の教官が語つた事がある。中學校より入學して來る者は成績が宜しくない、それは學術の點でなくして規律の正しからざる爲である。例へばポケットに手を入れるといふことは、甚だ些細の事のやうであるけれども、少しの寒さ位に堪へることが出來ないやうな人物に、安んじて兵士を任すことが出來ないと云ふのである。其他自習室に書籍を散亂することでも、大に品行點に關する。是等の缺點は尋中卒業生に多いと云ふことである。随つて成績が良くないと云ふことである。規律を破ると云ふ事は眞實小さなものやうであるが、其の精神を酌めば大變なものである。之を大にしては、社會の道德、法律を犯すのも、其の精神に於ては何の異なる所は無いのである。手をポケットの中に入る、は悪いと云ふ事は、皆知つて居るにも係はらず、之を行ふのは、即ち些かの誘惑に抵抗し得ないといふ事になるのである。是の誘惑に抵抗し得られぬといふ事は、大變な事なのである。諸君、米國に社會の罪惡一として犯さざるなき大罪人があつたが、遂に天網にかゝつて裁判所に廻された

時、何故汝は斯く恐るべき罪惡を犯したりやと裁判官が尋ねたのに、彼れの答へは實に面白い。曰く、予が斯くの如く罪惡を犯すに至りたる原因は唯、一つあると思ふ。其れは朝早く起きる事の出來なかつた癖が延いて此に至つたのであらう、と云つたとのことである。是れは笑話のやうであるが、實に貴むべき眞理を含蓄して居ると思ふ。故に予は常に此話を以て自ら戒めて居る。朝寢するといふ行爲は小であるが、其の發達の結果は恐ろしきものである。諸君も知らるる通り、先年英國の軍艦ヴィクトリヤ號が地中海で沈没した時、助け船もなく又ボートで逃がる、途もなき時、艦長が最後の巡回をした、其の時の兵士の行爲は實に立派なるものであつた。今一瞬の後恐るべき運命が來るにも係はらず、少しも躊躇又は狼狽しないで、各自爲すべき職務に従事して居つて、恰も一瞬の後自己の運命の如何に成り行くかを知らぬやうであつたのである。是れ蓋し兵士が規律を嚴守して、各其の職に盡した結果である。彼等は綱紀に服することの外、又己れの義務を盡すことの外、何物も知らぬのである。艦長は嘆息して謂つた。英國が今日あるを致せしは此の大なる軍艦あるが爲に、あらずして、是の忠勇なる兵士があるからである。又彼のミスシッピー河が大洪水の時の電信技師の行爲

は實に賞すべきものである。元來技師なる者は、事件があれば報告しなければならぬから、彼れは洪水が電信局の二階に襲ひ來つたにも拘らず、平然として事務に執掌し、其の旨を中央電信局に報告したのである。終りに自らが水の爲に死せんとする時、我れ今死すと云ふことまで發電したといふ事である。今日米國の隆盛なるのも、斯くの如き精神があるからでは有るまいか。然るに日本の状態は如何であるか、是等の事は我が國人が夢想にだもすることが出來ない。只、臺灣の附近に於て纔に海軍軍人が斯くの如き規律に服従する一例を示したのみである。廣丙號沈没の時に於て、波濤山の如く軍艦に衝き來つて恰も木の葉を弄ぶやうであつた。愈、最後の運命の近づいて來た時、艦長は英氣勃勃たる顔面に微笑を含み、甲板上に水兵を整列せしめ、君が代を三唱して、其の聲と共に海底の藻屑と成つた、自己の命は今如何に成り行くかを知らぬものやうであつたのである。斯様に眞に立派なる精神を軍人が有つて居るのは何故であるか。是れ軍人は本常から甚だ嚴重なる規律に服して居るからであると思ふ。故に若し軍人の有てる如き精神を社會全般の人に有たしめたならば、日本は非常な強國となるに相違ない。然るに如何せん、日本人は規律を破ることを意に介せない風が有るか

ら、今日の如き有様である。本會が社會を革新せんとならば、先づ第一に規律を破らないことを勉めなければならぬ。

悲憤慷慨

青年諸君の中には、徒らに悲憤慷慨を是れ事とするものが甚だ多いが、勿論此の氣慨が無かつたならば、社會の進歩は望み難いが、併し如何なる理由にて慷慨するのか。只、何の思慮もなく徒らに悲憤慷慨するのは、青年諸君の爲に甚だ取らない所である。而して予の特に杞憂に堪へないのは、青年が或る一種の偏屈なる人物を崇拜し、其人の口吻を學びて、慷慨自ら喜ぶものが多いことである。是れは大なる弊であると思ふ。慷慨すべき眞の理由があつて慷慨するのはよいが、併し只、慷慨する所だけを外から眞似るのは甚だ宜しくない。人間は意の如くならない事が多いから、随つて慨嘆することも數多あるのであるが、詰らぬ無責任な慷慨をすることは、青年者には甚だ危険であつて、且つ至つて幼稚なる考へであると思ふ。

我が青年の責任

今日は已に時間も晩くなつたから、餘り長く話す譯には行かないが、兎に角、今日の社會の不道德は新聞紙にて見るよりも、裏面に入れば却つて甚しいものがある。例へば、代議士が一千圓で買収せられた事を新聞が掲載しても、世人は敢て何とも思はない。新聞記者は社會の木鐸と稱すべきものである。然るに彼等に百金を與へたならば、如何なる事故でも記載するを憚らないのである、眞に危険の至りである。又嘆くべきは、學者も亦同じく自己の利益の爲なれば自説を枉ぐるも敢て厭はない事である。苟くも社會を指導すべき任務を有する學者先生にして斯くの如き次第であるから、以下は推して知るべしである。今の世に若し岩崎の如き大富豪があつて一百万金を投じたならば、代議士、學者を買収して意の如くに國家を左右することが出来ないとも限らないのである。未だ斯くの如き人物の出ないのは、實に國家の幸であると云はねばならぬ。果して然らば、今の腐敗せる社會を改革するは誰れの責任であるか、言はずとも知れた現代青年諸君の責任である。故に青年たるものは確乎たる理想

を懷きて其の衝に當らなければならぬのである。現今の青年諸君の團體は甚だ多く、其の綱領は立派である。其の論ずる所は世の腐敗を嘆じ、革新を叫ぶところ、中々意氣熾んなるものである。然るに彼等が一朝社會に出でたならば、不識不知の中に過去の意氣を失ひて自ら濁流に溺れる者が多い。其れ故諸君は今日の元氣を何日までも維持して、決して中途で挫折することなく、其の所信を實行せられんことを希望するのである。

(明治三十三年一月)

先生後進

先に進みたるもの何故に優れたる、後に進みたるもの何故に劣れるか。進趨の先後を以て才識の優劣となすものは何の呆痴ぞ。

江海の跡も埋れば則ち窮流となり、一貫の釐も積れば則ち山岳を爲す、社會は實力に應じて人に酬いざるべからず。

(明治三十年九月)

人と天分

諸君、昔し西洋の或學者が、青年の爲に一場の演説を望まれた時に、其の學者の答へて言ふたには、吾れは青年の爲に語ることを憚る、何となれば、未來の英傑は必ず彼等の中にある可ければなりと。私が今日この演壇を演じまするのは、是の古の學者の言葉に對して、深く聴ち入ります次第で御座ります。

併しながら、前會に於て姉崎正治君が、我が丁酉倫理會の趣旨を申された時に言はれたる通り、吾々丁酉會員は、牧師が説教壇の上から信者に御話するやうな態度を取つて御話するのでは毛頭ないのである。又吾々が御話することは、吾々自身が實際行ひ得た事でもないのである。唯、吾々が道と尊び、義と信する所の理想を諸君に御話して、さうして諸君と吾々とお互に相提携して、是の理想を實現することに力めやうとするのに外ならぬ次第である。喩へて言はば、宗教に所謂教會と云ふもののあるやうな譯と同じであります。御承知

人と天分

の如く、總ての宗教に教會と云ふものがある、あれは一寸考へますると不思議の現象のやうに見えます。何故に内心の信仰のみにて満足はせずに、何故に故らに斯かる教會と云ふ様な外形的組織を作るのであるか、是れには必然の道理があつて存するのであります。何となれば、信者が銘々の心の中に信仰を持つて居るばかりでは甚だ弱い、甚だ心細い、動ともすれば外界の強い力の爲に動かされ易い、それ故大勢の人と團結して、お互に其の信仰を維持し進歩せしむる爲に茲に教會と云ふ様な外形的組織を要することになるのである。それと同じ理由で、此の丁酉會も社會に存在する必要があると考へます。

諸君、言ふは誠に易いものである、恐らくは吾々が言ふこと位は諸君既に御承知でありませう。又吾々とても、昔の聖人賢人と同一の言葉も随分言ひ得ないので無いのであるけれども、それを行ふと云ふ一段に至つては、甚だ慚愧の至りに堪へませぬが、なか／＼出來難いのである。若し御互に是の行ふと云ふことが出来るならば、又出來たならば、吾々は諸君に向つて是の如き丁酉會を組織し、又此の如き詰らぬ御話をする必要もございませぬ、又諸君に於ても、吾々の此會にお出になる必要もなからうと思はれる。兎に角、吾々の道と信

じ義と尊べる所のものを諸君に御話し、其の理想を御互に固めて、各、その職分を盡したいと思ふのでございます。

唯今桑木君がなされたる『健全なる思想とは何ぞ』と云ふ御論は、甚だ有益に且つ高尚なる學術上の御話でございます。諸君も定めて御満足であつたらうと思ひます。然るに私の、左様な學術上の高尚なる御話ではないので、極めて卑近な、云はば常識上から割出したる、まことに詰らぬ御話であります。——甚だ恥入ります次第で、是の點は前以て御断りして置きます。

諸君、天分と申しますると、大へん急らい事の様で御座りますが、私の考へますには、此の世界中の總ての物は、其ものの性質、そのものに存在する境遇に従つて各、爲すべき事、進むべき道、又居るべき處があるであらうと思ひます。是の分に應じたる事と道と處とを天分と假りに名付けたのであります。そして天分と云ふことは、人間社會に於てのみ云ふべきことではなからうと思ふ。即ち一枚の木の葉でも、一塊の石でも、それ々の天分があり、且つそれ々の天分を盡して居る。此の極めて複雑なる世界が大いなる矛盾もなく、衝

突もなく、滑かに調和して進み行くことが出来ると云ふのは、詰りは其の葉なり、石なり、自然界の凡ての物が各、其の天分を盡して居る必然の結果であらうと思ひます。即ち一枚の葉も、一塊の石も、それ々の爲すべき事を爲し、往く可き道を行き、又居る可き處に居る如く、天地間の總ての物が其の天分を果した結果、是等の物を包含せる天地其物が調和して進んで行くことが出来るのであると思ひます。唯、是等の自然物は、吾々人間の如く意識がない、無意識にして知らず、其の職分を果して居るのであらうと思ふ。吾々の見る所では、調和のある所、其處には、天分が果されて居る。先に桑木君の言はれたる通り、吾々の身體に健全なる機關あればこそ、身體の總てが健全に調和的に働いて行く事が出来るのである。耳は耳、眼は眼、胃の腑は胃の腑の働きを健全に爲した結果、身體全體のこゝに調和的活動が出来て、人間其物が健全に存在し、發達する事が出来るのであらうと思ひます。人間以外の意識のないもの、若しくは意識の發達しないものは、知らず識らずの間に、天然が彼等に與へたる天分を果し、行く可き道を行き、爲すべき事を爲して居るのであるけれども、吾々人間は、彼等よりも高尚な自由な意識を以て居る、而して是の意識に本いて始終行動を

して居る。此様に意識的に行ひをすると云ふことは、即ち人間の人間たる所以でございます。然るに此の意識、自由の意識を有つて居る人が、斯く自由の意識を有つて居る爲に、却て往々にして天分を果さざる事があるのである、さうして其の爲に己れ一個人の不幸のみならず、己れの住んで居る社會の不幸、従つて己れの社會の屬して居る國家、世界の調和を破ると云ふ不幸が往々あるのである。詰り私の今日御話をする大趣意は、吾々人間は銘々天分を知つて、さうして夫れを行ふ所の修練を努めなければならぬと云ふことに歸着するのであります。

諸君、天分を知ると云ふことを、もう一層具體的に申せば、己れと、己れの住んで居る世の中との關係上から、己れの爲す可き事、往く可き道、居る可き處を辨へると云ふ事に歸着するのであります。吾々はお互に生れた所も違つて居る、さうして生れた後に於ても、其の性質境遇はそれぞれに違ひがあるのである、それ／＼の違つて居る性質境遇に従つて、さうして其人の住んで居る社會との關係上から爲す可き事があらう、往く可き道、居る可き場所があらねばならぬと思ひます。それで自覺——自分の爲さざる可からざる事、又爲す可き

事を自分が心の中より自覺して、さうして是の自覺に基きて活動すると云ふことは、人間が天より賦與された自由を最も立派に使用したものであると思ひます。詰り人間が禽獸に異れる重なる點は、自覺的動物であると云ふことに歸着する。犬は牛肉と云ふ旨い物は知つて居らうが、己れ自らは知らぬ、己れ自らが何の爲に牛肉を食ふかと云ふ様な事は少しも知らぬ。猫は鯉魚節と云ふ旨いものは知つて居らうが、是の旨い物を食ふものの己れ自らなることは知らぬのである、何の爲に食ふかと云ふ事も知らぬのである。然しながら、人間は己れと云ふものに就ての知識を有つて居る。知識を持つて居るのみならず、己れが爲す可き事、居る可き處、往く可き道を知つて、此の自覺に基いて活動するのが人間の人間たる所以である。是れが人間が下等動物或は自然物と違ふ所の重なる點であらうと思ひます。されば我々人間として務むべきことは、自覺的生活である。人間は自分を知り、又社會を知る所の自覺心を有するものであるから、此の自覺心に基いて、さうして自分の行爲を規定して行くことが、即ち人間の道德的行爲であるし、さうして又人間の下等動物と違ふ所の要點であると思ひます。自覺的生活、是れを吾々は求めなければならぬのである。

前會に於て姉崎君は色々今日の道徳上の状態の甚だ低いと云ふことを慨嘆されたるが、其の言葉の中に一の警句があつたのを記憶して居ります。それは、今日其の財産を以ては百世の子孫を養ふことの出来る人は多々ありますけれども、精神上に於ては一日暮しをして居らぬ人が如何程あるであらうかと云ふ事を言はれたのである。實に今日の時弊を穿つた語であると思ふ。諸君、今日巨萬の財産を積んで居る人は幾らもあるけれども、精神上の富を有するものは甚だ少いのである。彼等の多くは毫も知らぬのである。又知らんとも思はぬのである。抑、彼等は何故に世の中に住んで居るか、何故に此の如く金を儲けて貯へなければならぬのであるかと云ふことの理由をば少しも考へないし、又考へ様ともせぬのである。縦しんば考へた所が、其の考へ、其の自覺が間違つて居ると云ふことは随分多いことであらうと思ふ。詰り斯の如き人は、即ち自分の天分を自覺せず、只、何となしに茫々然として此世の中に生活して居る人、所謂醉生夢死の人と云はなければならぬのである。此の醉生夢死の人が今日甚だ少くないことは、吾々の甚だ慨嘆に堪へざる次第であります。

諸君、天分を知ると云ふことは、強ちにむつかしいことではなからうと思ひます。如何

にも大いなる此の世界の上から自分の位地を打算すると云ふことであれば、それはむつかしいでありませう。如何にも理論の上から云へば、一個人は一個人として生活するのでは無くして世界の一人として生活するのである。然るに世界は過去に於ては數千年の歴史を有つて居るし、そして何億何萬年と限りなき將來を有つて居るのである。さう云ふ長い歴史を有つて居り、さう云ふ永い未來を有つて居る是の世界であるからして、理論の上から申すと、己れの境遇、己れの位地と云ふことを自覺することは到底出来ぬことである。それを自覺するには是の大いなる世界の昔からの歴史を知らなければならぬ。將來往くべき處も明らかになればならぬ。さうして現在の總ての事柄をも考へなければならぬ。一個人は一個人で生活する者でなくして、桑木君の言へる如く、社會的に生活して居るのである。社會は社會の上に國家の一要素として存在して居るのである。國家と雖も世界の一國としての外は存在し得ないのである。されば客觀的に一個人の位置を考へますれば、それは極めて複雑なもので人間業の到底解し得ることでない。併し實際上から考へますれば、強ちさう云ふむつかしい事ではないのであります。世界と云ひますが、實際各個人の考へ居る世界はそれと違ふ

のである、此處に五百人の諸君があるとすれば、即ち五百の世界があると云はなければならぬ。其中には大きな世界もあらう、小さい世界もあらう、低い世界もあらう、高い世界もあらう。詰りは一人を以て世界として居るものもあるであらうし、一村を以て世界として居るものもあるであらうし、又一つの地方を以て世界として居るもの、或は一つの國を以て、或は全體の世界を以て世界として居る人もあるであらう。主觀的に見れば、己れが住んで居る世界と云ふものは、強ち理解し悪いものではなからうと思ふ。是の主觀的世界、即ち是れ各人に對する實際的世界に外ならぬのである、其の世界に於ての己れの位地を自覺し、さうして是の自覺に基いて自分が行動をする、働きをすると云ふことは、強ちにむづかしいことではなからうと思ふ。唯、むづかしいことは、此の自覺を行ふと云ふことであります。是の行ふと云ふことが吾々の大なる困難を感じる事である。是の自覺を實際行ひ得た人が世の中にあれば、其人は大人物である、大豪傑である。諸君、吾々が諸君と共に務めなければならぬ事は、自覺的の生活を辨へて、さうしてそれを實際に行ふと云ふ精神の道德的修練であらうと思ひます。それに就て私は詰らぬ例ではありませんが、一三の例を擧げて諸君に御話したい

と思ふのであります。

諸君、諸君の内に本郷の駒込附近に御住みの方が有るならば、私の御話することは諸君は既に御承知のことであらうと思ひます。駒込附近には、夜になりますと往々辻占賣が参ります。其邊には辻占賣は幾人もないのである、恐らくは一人しかありません。あの辻占賣は、私が本郷に住んで六七年以來知つて居ります。呼聲は何と云ふかよくは覚えませぬが、仕舞の方が『花の便り戀の辻占』と言ひます。其の花の便り戀の辻占と云ふ哀れつほい呼聲は、今日でも聞くことが出来るのであるが、私は六七年以前の本郷に住み始めの時に聞いて居つたのである。恐らくは六七年より遙か以前から此の辻占賣はあの邊に辻占を賣つて居たのであらうと思はれるのである。私の友人の一人は此の辻占賣が大へん氣に入りで、少し興に乗ると其の眞似をして楽しんで居たことすらあつたのである。所が吾々の今日の境遇と云ふものは、吾々の辻占賣を歎美した六七年以前の時とは甚だ變つて居る。獨り吾々の境遇のみならず、吾々の住んで居る此の社會も非常に變つて居る。併しながら諸君、此の辻占賣のみは少しも變らぬのである。雨の降る夜も、雪のふる晩も、相變らず戀の辻占

を面白可笑しく呼びあるくのである。少し變つたと認められるのは、昔の美はしい音聲がいつしかさびれて、衰れつほい老年の悲しみを帯び來つたと云ふことのみである。諸君、辻占賣の呼聲を聞きますと（私一個人の感情を申しますと）、私は一種の何とも言へぬ教訓の聲を耳にする心持がするのである。御互に青年と云ふものはなか／＼空想の多いもの、野心の多いもの、希望の多いものである。自分が獲ざる所を獲やうと思つて、爲してはならぬことも爲さうと云ふ、随分空想の爲に苦しめられて居るものである。然るにさう云ふ空想の盛んに起りつゝある時に、この辻占賣の聲を聞きますと、恰も熱して居る頭に冷水をあびせられたる如く、人間の天分と云ふことに就て何となく考へ到るのである。辻占賣はどう云ふ考へで其の辻占を賣つて居りまするか、それは知りませぬ。併しながら、もし萬一私の想像する如くであるならば、彼れは盜賊にもならず、相場師にもならず、今日まで辻占を賣つて居るのを見れば、其の精神に安んずる所があるのではあるまいか。むづかしく言へば、自分の天分を知つて居るのではあるまいか。さう云ふことが果して有るか無いか知りませぬが、若しさうであつたとすれば、爰に吾々にとりて一つの尊むべき教訓があるのである。——是

の話は詰らぬことでありませうが、併しながらこれと同じ事柄を、私は毎々歴史上の大なる事柄の中に發見するのである。

諸君、例へば佛蘭西の百年戦争の教主とも云ふべきジャン・ダルクの事は如何であるか。ジャン・ダルクと辻占賣とは甚しい相違ではありますが、自己の天分を知り、そしてそれを行ひ、それに安んじたと云ふ點に於ては少しも差別はありません。若し私の想像した通りの辻占賣でありましたならば、佛蘭西のジャン・ダルクと彼れとは大した差ちがひはなからうと思ふ。ジャン・ダルクは十六歳の少女でありました。百年戦争を御承知の方には言ふ迄もないが、當時の佛蘭西は英吉利にさんざんに破られて、唯オルレアンの城のみが國家の命運を一髮の間に繫いで居る。其時にジャン・ダルクは、吾れは佛蘭西の教主として生れたものであると信じて、さうして是の信仰を實行したのである。人が氣違きまがひと笑ふにも拘らず、危険と戒むるにも拘らず、此十六才の一少女の身を以て、今や將に倒れんとする佛蘭西國を助けやうと志し、そして是の志を實際行ふたのである。其の決心の鞏固なることは、今日に於て幾多の不可思議なる物語を以てそこに附加つひへられて居る程であります。詰りは、ジャン・ダルクと辻占賣とは、

其の境遇に於てこそ大へんな違ひもあります。併しながら己れの天分を知つて是れを行ひ、若しくはそれに安んじたと云ふ點は一樣なる事で、吾々には等しく尊むべき教訓として見られなければならぬと考へます。

諸君、斯う云ふ風なことを言ひますと、何か天分を知ると云ふことは、足るを知ると云ふことと同じやうに聞えますが、知足——足るを知ると云ふことと、天分を知るとは實際大へん違ふのであつて、この天分を知ると、足るを知ると云ふことの間には、道德上の主義に於て相容れざる差別があるのである。足るを知ると云ふこと——爰に知足主義と假りに名けませうが、此の知足主義は東洋流の最も悪い道德の主義である。今日に於ては決して吾々が尊むべき筈のものでなからうと思ふ。尊むどころではない、却て排斥しなければならぬものであらうと思ひます。昔から東洋では斯う云ふ考へが大へんあつた、高明の家は鬼神之れを窺ふとか、或は番木は風に倒されるとか云ふことを云つて居る。詰り是れはあまり自分の位置が高くなる時には、其身が危くなる、それ故足ることを知つて程良い所で止めて置かなければならぬと云ふのである。老子なども「足るを知れば是れ富めるなり」などと消極的に

人に安心を訓へて居る。けれども足るを知ると云ふことは、個人主義の最も悪い思想で、自分一人さへ安心であり、幸福であればそれで宜しいと云ふことに歸着するのである。知足主義は少しも社會を言はぬのである、家族を言はぬのである、國家を言はぬのである、況や人道と云ふ如き思想は毫頭無いのである。唯、己れ一身に於て足るを知らなければならぬ、さうでないといれが危いと云ふに過ぎない。即ち極端なる利己主義、個人主義である。併しながら此の天分を知り、知つて之を行ふと云ふことは、己れの他に家族あることを認める道德主義である、社會あり、國家あり、人間あるを認める道德主義である。自分のみ良いのみではならぬ。天分と云ふことは、社會と國家に對する職分を自覺して、是の職分の爲に死するまでも退かぬ、若し其の職分を得たならば、そこに安んぜよと云ふ積極主義であるのである。

即ち個人主義、極端なる利己主義の道德主義とは非常に違ふのであります。然るに東洋では知足と云ふことを大へん良いことに思つて居る結果として、例へば功成り名遂ければ退く、高踏勇退と云ふことは、一の英雄の資格でもあるかの如くに考へて居る。けれども諸君、高踏勇退と云ふことの中には、如何なる道德主義がありますか。一身を保つの外に君主も

ない、國家もない、何もないのである。是れは吾々の所謂天分を知るとは、雲泥の差違があるのである。

諸君、吾々は天分を知らなければならぬ。さうして吾に知つたのみならず、是の天分を行ふと云ふ大執着心を起さなければならぬ、大煩惱心を起さなければならぬ。さうして是れを成し遂ぐる迄は死ぬる迄も進まなければならぬ、如何なる敵とも闘はなければならぬ。吾々の天分を知るとは積極主義である。今茲に假りに天分主義と名付けることが出来ませうと思ひます。

諸君、それで東洋流の知足主義の一例を歴史上より挙げますれば、歴史上に於ける菅原道眞の行動であります。今日菅公と云へば、人間として殆ど缺點の無い理想的の人物の如く人々が考へて居る。菅公が右大臣になつた時に三度辭表を奉つて辭したと云ふことは、菅公が謙讓の美德を有つて居つたのだ、若し何か野心を有つて居たならば、太政大臣の内命をも請けたであらうが、菅公のみは足るを知つた、誠に立派な人物であると、かやうに菅公を歎美することになつて居る。が、是れは東洋の知足主義である、私は菅公の知足主義に對して

は同意することは出来ないのである。菅公の當時の歴史は茲に言ふまでもありません。けれども、菅公が宇多天皇に拔擢せられたことは、私の考へでは、宇多天皇が藤原氏を抑制すると云ふ大御心があつた爲に違ひない。當時藤原氏の勢力は非常に盛んなものである、宇多天皇御自身さへ基經の御蔭で天皇の位に登ることが出来られたのである。それであるから藤原氏の權勢は非常なもので、時としては天皇の大權を無視して暴戻至極の行ひをした、かの阿衡問題の如きは其の最も著るしき例である。是の藤原氏の暴戻を抑制する爲に菅公を拔擢せられたのが即ち宇多天皇の御心であつたと云ふことは、今日疑ふことの出来ない事實であると思ひます。さう云ふ風に、菅公が宇多天皇の御心を受けて、藤原氏を抑制すべき位置に居る、即ち天分を有つて居る。然るに右大臣になつた時には三度まで辭退した、是れは當時の慣習たる形式上の辭退とのみ見ることに出来ない遣り方であつた。つまりは其身の危きを恐れて其位を退かうとしたのに過ぎないのである。——願くは早速臣の職を止めて貰ひたい、是のまゝ高官に居ては是の身が危いからと云ふ主義であつたのである。併しながら、當時宇多天皇の御心が菅公に知れたならば、言ひ換へれば其の天分を知つたならば、さうして是の天

分の自覺の上に斷乎たる行動をすることが出来たならば、斷然右大臣をも、又後に至りては太政大臣の内命をも受けなければならぬのである、受けてさうして藤原氏を抑へなければならぬのである。然るに菅公は知足と云ふことを悟り得たものであると云ふ理由で、歴史上に重んぜられて居る。是れはむしろ菅公の爲に大に惜しむべき事であり、又悲しむべき結果を生じた原因でもあらうと思ふのである。(全集第三卷二〇三—三三三頁參照)

兎に角、知足と天分と云ふことは、道德の根柢が違ふ。一方は極端なる個人主義、一方は己れの幸福のみならず、己れの屬して居る團體の幸福をも認めて、其の團體の幸福を進める希望の上に自己の安心を有つて活動するものでありますから、道德上の根柢は全く違ふのであります。それであるから、天分を知つて行ふ人のする仕事には、到底個人主義、即ち足るところを知ると云ふ道德の上に活動する人の夢にも眞似ることの出来ない、尊い性情を顯はすことが出来るのであります。

諸君、更に一二の極く卑近の例を諸君にお話し致しませう。或は御承知でもあつたでございませうが、往年地中海に於て英吉利のギクトリヤと謂ふ軍艦が暗礁に觸れて沈んだことが

分 天 と 人

あつた。さうして當時ギクトリヤの沈んだ状態は到底多數の人が助かることの出来ない有様であつた。船體は次第に傾きつゝあつた、而して船員の運命は數分時間に決せらるゝの状態であつた。其時ギクトリヤの艦長は、己れの支配して居る艦の最後の見廻りをした時に、甚だ歎美すべき事實を見出した。それは何であるかと云ふと、五百人の乗組人員は各爲すべき事を爲して居る。數分時の後に己れ等の運命は如何になり行くやを知らざるものの如く、鐵砲を磨くべき職に在るものは鐵砲を磨き、掃除を爲すべき役にあるものは掃除を爲して居る、皆それ／＼の任務を盡して居つて、今艦の傾きつゝ將に沈没せんとする恐るべき事實を知らぬかの如くであつた。それでギクトリヤの艦長は、英吉利の今日あるは、ギクトリヤの如き脆き軍艦のあるが爲ではなくして、是の如き天分を知つて是れに安んじて居る兵士が多かつた爲であると云ふことを歎美したのであります。誠に己れの安んずべき所、己れの爲すべきことを自覺して、其の自覺を以て神とも仰ぎ佛とも仰ぎ、そして活動しますれば、其人の勇氣は死と雖も迫害することは出来ないものである。恰度それと同じ例は、往年亞米利加のミシシッピー河に大洪水のあつた時、一人の電信技師の行爲に現はれたのである。其の電信技師が實

に歎美すべき行ひをしたのである。どう云ふ行ひであつたかと云ふに、此の電信技師が中央電信局から洪水の模様を報知すべき命令を受けて、其の報道に従事して居つた。所が其の電信技師の居つた電信局も水に浸されて、さうして二階まで水が浸しつゝあつた。けれども電信技師は少しも自分の身の安危は考へず、水將に自分の膝を没し、腰を没して来る迄も報知の手を止めなかつたのである。洪水は遂に首を没し口を没し、今や將に死せんとするに臨んで『今吾れ死す』と云ふ最後の電信を發して死んだと云ふことであります。諸君、是の電信技師の如きは非常に勇氣のあるものではあるまいか。斯様な勇氣は何れより得來つたかと云ふと、外でも無い、彼は己れの天分を能く辨へて、さうしてそれを實行するだけの精神の修練があつたと云ふことに歸着しなければならぬ。斯う云ふことは非常な例であります、若し總ての人が斯う云ふ修練を實際有つて居つて、さうして平常社會に於て之を行つたならば、例へば今日日本の社會にあるが如き幾多の嘆かはしき缺點はなかつたらうと思ひます。それで私の望むことは、人々各、天分を自覺して、さうしてそれを實現することに力むる事でありませぬ。此の天分を自覺して是れを實現した人は、昔から最も得難い所の人物である。

其の實例は一一諸君の前に申上ることはくだしいことに思ひますから申しませぬが、殊に大なる學者、大なる文學者、或は大なる美術家とか云ふやうな人は、皆この自分の天分を自覺して、此れを實現する爲に、如何なる迫害、如何なる不幸に陥るも顧みないと云ふ熱心のある人々であつたのである。例へばダンテの如きである。諸君、ダンテは自分の故郷を放逐されて、吾れは終生フロレンスを見ることが出来ないとい嘆じた。併しながら是の如き迫害の下にありても、尙ほ其筆を止めることが出来なかつたのである。

諸君、獨逸の詩人テオドル・キルネルと云ふ人は、ナポレオンの爲に將に滅ぼされんとした獨逸帝國の獨立の義戦に赴いて討死をした人である。其の年を問へば歴に二十三歳で死んだのである。彼れの二十三歳迄の生活は實に幸福なるものであつた。死ぬる少し前までは澳地利亞の維納に居つて、劇場の一詩人として非常なる喝采を受けつゝあつた。けれどもキルネルは、自分の天分は此際詩人となつて終るべきものではない、祖國の滅亡を眼前に見ながら黙視して已むは國民として有るまじきことであると云ふことを自覺したのである。其のアスペルンの戦の凱歌を聞く際にも、國民の呼聲に對して一種の謂ふべからざる苦痛を有つ

て居つたのである。彼は遂に予のフッテルランドが吾れを喚ぶと言つて、他の人が羨む所の最も幸福なる境遇を捨て、其の最愛の妻をも去つて、單騎、軍に投じて遂に死んだのである。實に此のキヨルネルの如きは天分を自覺して、そして之を實現することに努めたる人である。而して是の天分の自覺と實現との爲に、彼は實に一個の愛國者として、又一個の詩人として不朽の名譽を得たのである。

斯う云ふ例は美術家や詩人の中に澤山あることでありまして、美術家の内には其の爲に餓死した人もある、乞食になつた人もある、首を斬られた人もある。併しながら斯様な迫害を受ける迄も、尚ほ自分の藝術上の執心を捨てることは出来ぬ、飽く迄藝術上の良心に忠實ならざるを得なかつたと云ふことは、實に歎美すべきことである。否、美術家の如きは其の一例であるが、古來より大聖人大賢人と云はるゝ人は何れも其の天分の自覺の確乎たる人であつた。釋迦は『天上天下唯我獨尊』と言つたのである、孔子は『天、徳を吾れに下せり、桓魋それ吾れを如何せん』と云ふことを言つたのである。

斯う云ふことは誰しも御存じのこと、私が今日御話しする迄もないのである。斯の如く

言ふことは何より易いことでもありますけれども、之を行ふといふ事、是れを行ひ得る様に吾の精神を修練すると云ふことに至つては、大いに困難なことであらうと思ふ。今日の社會などに於て、自分の往くべき道を往き、爲すべきことを爲し、居るべき處に居ると云ふことを能く辨へて、そして辨へるのみならず、それを實行する爲に努めつゝある人は如何程あるかと考へますと、吾々は實に慨嘆せざるを得ぬのであります。今日では政治家とか、實業家とかは腐敗して居ると謂はれて居る。また學者、普通人よりも自己の天分を承知して居るべきはづの學者はどうでありませうか。今日の學者の多數は謂はば體の良い辯護士である。左に向つてエースと言つた、其の同じ事柄に向つて同じ口で右に對してはノーと言ふのである。エースと言ひノーと言はせるものは何であるかと云ふと、金である。さう云ふ事實は吾々の現に見る所である。日々の新聞紙は是等の事實を傳へて倦まないものである。

諸君、文學は高尚なものであると謂はれて居る。恰もダンテの考へた如く、ミケランゼロが美術に就て考へた如く、所謂文學者は其の初めには非常に高尚な考へを持つて居つても、何時しか浮世の名利の爲に誘はれて、或は商賣人になる人もある、或は學校の教師になつて

餘念の無い人もある、さう云ふ人は多々あるのであります。是等の人々は、皆自己の天分と云ふことを自覺したのか、或は自覺し得なかつたのか、或は自覺しても之を行ふ力がなかつたのか。初めの覺悟は迷ひで、今の迷ひが悟りであつたのか。

諸君、教育者は今日年功加俸とか恩給とか言つて、色々の獎勵方法によりて鞭撻せられつつある。けれども可笑しいことではありませぬか。諸君、若し金持に成りたければ相場をやするが宜しいのである。商賣をするが宜しいのである。金を儲けんが爲に教育者となると云ふのは抑、の心得違ひであるのである。さう云ふ精神であるならば、直様辭職しなければならぬのである。諸君、年功加俸とか、又は恩給とかに依つて初めて獎勵せらるゝ教育者が世の中に何程の益を爲すであらうか。

話しが永くなりましたが、畢竟するに吾々は吾々の位地、吾々の性格、吾々の境遇に従つてそれ／＼爲すべき事柄があるのであらう。是れは決して抽象的に言ふのではない、各自が自分の境遇に對して能く考へて見たならば、必ずあらねばならぬと思ふ。そこに安んずることの必要が一方にあるし、さうしてそこに往く迄に決して安んず可からざる必要が他方にあるのである。今日人間以外のもの、一枚の葉にも、一介の石にも、それ／＼の天分があつて、

彼等は知らずして己れの天分を盡して、さうして大いなる世界に是の如き大いなる調和を與へて居るのである、誠に尊い仕事を爲しつゝあるのである。然るに人間が慈ひ自由の意志を持つて發達して居るが爲に、自分の天分を等閑にし、往く可からざる處に往かんとし、居る可からざる處に居らんことを冀ふと云ふことは、天の授けたる大いなる恩恵、即ち自由と云ふ事を濫用したものであると思ふ。是の如き濫用のある爲に、世の中に色々の不調和があるのである。大豪傑も出ないのである、大なる事業も世の中に爲されぬのである。——諸君、くれぐれも斯く言ふは易いが、さて行ふことはなかく、難い。詰りは宗教の教會に於けるが如く、是の如き理想を有し、是れを實現せんとの希望を有する人々が互に團結提携して、其の永遠の成功を期するの外は無いと思ふ。諸君、世の中に神様ばかりがあつたならば、進歩といふことも無いのである。吾々は不完全な、缺點の極めて多い人間であるのである。不完全な丈に缺點の多い丈に、今日是の如き會合の下にお互に性格の修養に力めることの必要があるのである。吾々の丁酉倫理會の事業も、是の點に關して何等かの効力があるならば、

是れ吾々及び諸君の幸福のみでは無からうと思ひます。

(明治三十三年三月演説)

大家 小家

何をか大家と云ひ、何かを小家と云ふ。今は是の如き名稱の刷新せらる可き時機に非ずや。其器に名けたるもの、以て其人に移すべからず。先進の士たまく、世人の推戴する所となれば、袖手爲すなきも尙ほ尊大自ら持して下らず。世人亦其名に拘りて敢て之を怪まず。且つ夫れ時は進み、世は移る。往日の大家、果して今日の小家と孰れぞ。大家の名稱は位記の如きものに非ず。今は形式主義の廢棄せらるべき時に非ずや。吾人は文藝界のあらゆる方面に於て大家、小家の區別を打破せんことを欲す。

(明治三十年九月)

國字改良論

國字改良の議、復び學者間に唱へられむとす、亦是れ來らむとする内地雜居の影響乎。差當り吾人の耳朶に觸れたるは、某々博士等によりて唱へらるべき羅馬字會の復活なり。是の問題は、數年前に於て一時は盛んに論議されしが、學者耐久の志に乏しきや、期年にして聲無し。健忘性國民も亦敢て是れを怪しまざりき。吾人は是れを憾みとして其の反省を促し、事一再ならざりしも、世を擧げて聞として聲無かりき。嗚呼、滔々たる言語學者、國語學者は是の閑果して何を爲しつゝありし乎。

國字改良の問題は決して内地雜居に臨みて初めて其須要を唱へらるべきものに非ざる也。實に是れ一國文明の汚隆に關す。吾人は其の主張する所の如何に拘らず、我邦學者が其の最後の斷案に到達するまでは、其の論鋒を收めざらむ事を希望せずばあらざるなり。凡そ唱へらるべき必要ありて唱へられたるものは、其の必要の消滅したる時に於てのみ初

めて緘黙せらるべし、我が學者、由來一到の志氣を缺く。

(明治三十一年三月)

國字改良會に望む

國字改良會は國家須要の事業に屬す、唯、世人は身全く從來の國字に教育せられ、他種の文學と其の得失を比重するの機會に乏しかりしを以て、至大至重なる困難不利も明に覺識するに由無し。隨つて改良の説獨り醒者の間に喧しくして、一般世人は恬然として意に介せざる、是れ豈天下の大患に非ずや。吾人は是の際國字改良會の責任の重且つ大なるを認むる也。

然れども國字の改良は、必要なると等しく又困難なり。メトデウス兄弟が、新にスラヴ文字を傳播したる例を以て、今の我邦に推すものあらば、必ずや大いに失望せむ。國字改良會は我が國字と我邦文明との歴史的關係を顧慮せざるべからず。新國字説の實行の如きは、更に多大の困難に遭遇するを覺悟せざるべからず。羅馬字説や、漢字説や、將た漢字制限説や

今日兎に角一定の準據ありと雖も、新國字説は其の定案を得るまでだに多年の攷究を要すべし。今日一個人として新國字案を提供するものありと雖も、吾人は自己以外に幾何の贊成者を得たるを聞かず。若し是等の人、各其の持説を挟みて相譲らずむば、徒らに争を好みて異を樹つるに終らむのみ。是の如くにして、幾度び國字改良會を重ねたりとて、如何ぞ國家千萬年の爲に新國字の鐵案を下し得べき。今の時は獨斷的に自説に執着するの時にあらず、眞に國字改良の前途を思はば、其の態度は須らく研究的ならざるべからず。

羅馬字論者は、羅馬字の外は盡く是れを排斥し、新國字論者は、新國字の外は皆不可なりとなす。然れども漢字節減論の利害は悉く研究せられたる乎。漢字の不利は何人も認むる所ながら、それが如何程に不利なる乎、若し適當なる節減方法によりては、或はそが見ゆる程には困難なるものには非ずして、實際は案外に學び易きものには非ざる乎。是等は比較的實驗的の攷究を要すべき問題に非ざる乎。事物は近きより遠きに及ぼさざるべからず。吾人は國字改良の第一歩として漢字節減説に對し、國字改良論者が今一應精透なる攷究を施さむことを望む。而して逐次新國字説より羅馬字説に及ぶ、亦遅しとせざる也。

遮莫、吾人の最も切望に堪へざるは、國字改良論者が、是の問題の終結に到るまでは、屈撓中止すること無からむこと、是れ也。若し一世にして成就し難くむば、數世の繼續事業となす可なり。事、國家千萬年の利害に關す、須らく功を收むるに急ならずして、事の完からむことを期すべし。習慣は天下の大敵なり、今や國字改良論者は是の大敵に反抗して是の大事を成さむとす、事に當るもの向上不退轉の勇猛心を振起すべきは論を待たず、國民も亦輿論の力によりて是れが後援たらざるべからず。時宜によりては移して以て國家の事業となす、亦可ならむ乎。

國字改良會方に成りて、前途海の如し、聊か鄙言を陳べて會員諸氏の注意を促す。

(明治三十一年十月)

本年の二大問題

國字問題と倫理問題

明治三十三年の劈頭に立ちて、吾人の先づ以て記憶せざるべからざるは、吾人が尙ほ幾多未了の問題を有する事也。

凡そ耐久堅持の意志に乏しき、我が邦人の如きは多からじ。文藝社會にありても、幾多の問題は提出せられたり。其の解釋は幾度か着手せられたり、而して其の歸結を見るに及ばずして幾度か抛却せられたり。比年、常に是の如くにして未了の問題年毎に加はる。國民は遂に未了の儘にして是れを埋葬せむと欲する歟。何ぞ始めは脱兎の如くにして、終りは處女の如くなる。

凡そ一個の問題の提出せらるゝは、言ふまでも無く時勢の必要是れを促せば也。其の呈出を促したる事情の依然として繼續する間は、其の研究も亦依然として繼續せられざるべから

す。僅に一兩年にして、當初の意氣頓に沮喪するが如きは、到底事を成すに勝へざる也。寧ろ始より恬澹にして自然に一任するに如かざらむ。

所謂未了の問題とは、第一國字改良問題也。國字改良の必要は、今日にありては最早や炳焉たる事實となれり。知者先覺者はこれを口に説くのみならず、教育者も被教育者も、學者も、非學者も、一般國民を擧げて少く文字あり、思慮あるものの均しく其の積弊を自覺し、期せずして改良の急務を呼號する所のもの也。想ふに明治十年代に於ける假名論、羅馬字論を初めとして、二十五年頃の國字論、三十一年の國字研究會より、今日の帝國教育會の國字改良事業に到るまで、是の問題は幾度か提出せられ、幾度か抛却せられたり。健忘なる國民は今後にも更に又是れを抛却せむと欲する乎。

國字問題の氣運は、今日に於て方に熟したるが如し。學年短縮を唱ふる所謂學制改革論の如きも、畢竟是の同一の氣運に乗じたる教育上の一問題に外ならざるのみ。少くとも此の事業に於て、全社會の同情と後援とを有する帝國教育會は、宜しく現下の好氣運を逸し、曖昧模稜の中には是の問題を埋没するが如きこと無かるべし。國字の問題は、國家百年の人文に關聯す、素より一旦一夕にして終結を期すべきに非ず。唯、一度は是の事業の深大なる意義と影響とを自覺したる國民は、圓滿なる歸結に到達するまでは、是れより永く其の盡力を休止すること無かるべし。吾人は本年の劈頭に於て特に是の事業に關係せる學者教育者の鞏固なる決心を問はざるべからず。

第二の未了問題は、社會に於ては道德問題也、教育に於ては德育問題也。想ふに是の如きは、或は一の時代、一の國民に特有なる問題に非ざるべし。然れども吾人は今日の我邦に於て一個特定の問題として殊に是れを標榜するの必要あるを認むる也。宗教の無力なる今日の如きはあらず、教育の無力なる今日の如きはあらず、社會的制裁の無力なる亦今日の如きはあらず、吾人が安全に依頼すべき道德は獨り法律あるのみ。誰か是の如き時代を以て國家の深仇と爲さざらむや。國民道德の統一を目的とせる幾多の主義、幾多の團體は起りたり、然れども未だ曾て救世の使命を自覺して、一代の木鐸となれるものあらざる也。國民道德は依然として渾沌たる過渡期の中にあり。忠孝の名喧しく唱へられて其の實却つて擧らず、法治の制甄に立つて人却つて法を輕んず。生活の上には、過酷なる嚴肅主義に非ざれば、則ち放

逸なる私慾主義となり、思想の上に於ては、消極的の悲觀に非ざれば、則ち教權の盲目的歸依あるのみ。人は夫れ何處にか其の安立の地を求めむ。而して是の如き苦悶は教育ある社會によりて痛切に感ぜられつゝあるは最も注意すべき事實なりとす。經世家よ、教育家よ、倫理學者よ、宗教家よ、諸君の最大責任は是に存せざる乎。倫理問題の解釋は人生に於て最も永遠なる事業也。吾人は是の點に關して將に國民の堅實なる意志を確めざるべからず。

國字問題は、是れに關聯して國文及び學制上の問題を含み、倫理問題は是れに關係して社會及び德育上の問題を含む。吾人は是の兩者の解釋を以て本邦文教界の二大事業となす。文學學藝に關する自餘の問題の未了なるもの、素より一にして足らずと雖も、吾人は當事者并に國民が是の二大問題に就て特に耐久堅持の意志を鼓舞せむことを切望する者也。

(明治三十三年一月)

國字改良の反對者

國字改良は一世の輿論なりとは云へ、其の裏面には幾多の反對者あり、國民保守の精神に訴へ、冥々の中に反對の氣勢を増殖しつゝあるは改良論者の特に注意すべき所也。國字改良其物は名實如何にも間然する所無きも、兎に角一國人文の上に於ける一大變動なれば、平和無事を好める保守者流には少からざる悪感情を與ふべし。彼等は種々の堂々たる名目の下に遂に其の不平を漏らし、是の革進の氣運に反抗して種々の妨礙を與ふべきは明なり。國字改良論者は斯かる反抗は初めより萬々期待せる所なるべきも、尙ほ是の反抗の盛んに起らむ時、其の從來の態度を頽さざる様、今日より充分の覺悟あらまほし。

今日に於て國字改良の事業に反對する論者に凡そ三種あるが如し。第一は漢學者、もしくは漢學者の利益を代表する教育者學者也。蓋し國字改良の方針は新字說にまれ、羅馬字說にまれ、或は假字說、漢字節減說にまれ、兎に角、漢字廢止の傾向を帶ぶるは最も明なる所。

否、國字改良論其の物はもとく實に漢字排斥の目的を以て起りたるものなれば、漢學者一輩の學者教育家が自家の利益を保護せむが爲に極力反對の氣焰を揚ぐべきは最も自然の事なりとす。今日に於てこそ流石に正面の反對は爲し得ざれ、國字改良論にしていよく實行せらるべき氣運の現はれ次第、彼等が最後の反抗は恐らくは中々に凄まじきものあらむ。國字改良論者は今日より是れを預期せざるべからず。

然れども純然たる學者の態度を以て公然漢字不可廢論を唱ふるもの、例へば井上圓了氏の如き人の説に對しては、國字改良論者も一應は耳を傾けざるべからず。氏が論據は如何にも薄弱なるものにして、何の見る所ありて、漢文雜誌を發行せむとまで斯かる詭激の論を公にせられたるにや。殆ど揣摩に苦しむ次第なりと雖も、漢字の利益を述べられたる部分には、國字改良論者の參考すべき理由あるを認む。されど漢字不可廢論としては何人も中正の立言なるを首肯し得ざるべし。

國字改良論に對する第二種の論は、誠に幼稚なるものなり。其の要旨は、今日の文字は過去幾千百年の文明と其の貴重なる遺物とを包含し、國民性情とは離れ難き因縁を有するもの

なれば、是れを今日俄かに變更し去らむは文明の發達を中斷し、吾人の祖先が蓄積したる過去世の財寶を抛却するものなり、無謀是れより甚しきは無しと。——是の如きは、國字改良の意義をすら辨へざる、極めて粗笨の意見ながら、文藝の趣味を尙べる保守者流には尤もらしく思はるゝ説なるべし。國字改良には慎重なる用意あるべきを勧めたる言としては、如何にも尤ながら、是れによりて國字改良論其物を否定せむとは片腹痛し。遮莫、國字改良論者は這般の誤解に對しては審に是の事業の眞意義を説明せむことを要す。何となれば、誤解無知より來る反對は、時に最も有力なることあれば也。

去りながら、世には漢學者よりも、ナマイキなる文藝者流よりも、更に多數の、更に有力なる最も恐るべき反對者あり。國字改良論者は是の事實を深く覺悟せざるべからず。所謂多數の恐るべき反對者とは何ぞや、國字改良論に賛成もせず、また公に反對もせざる大多數の人民、及び有力者を云ふ。是等の人々は、大抵國字改良の必要を自覺せず、又は元來頑陋枯乾の頭腦を有するが故に、設令他人の説を聞くも了解し得ざる人々也。是の種の人は、常に社會の大部分を充たすのみならず、朝野の最も有力なる位地をも多く占領するを以て、改良論

の實行上には百千の反對論者よりも却て冥々の中に多大の障害となるべき也。是の種の人より來る所の反對は聲言なく理由無きも、反對の勢力としては最も強大なるもの也。必ずしも將來を預想するに及ばず、吾人は現に今日に於ても明に是の如き事實を看取し得るなり。國字改良論者は是の大敵に向つて飽く迄其の意志を貫徹するの覺悟と成算とありや、吾人は今日に於て特に之を確めんと欲す。

(明治三十三年二月)

國語調査會

國語調査會委員の中に朝比奈、三宅、徳富の諸氏を羅致したるは、御役人主義を離れたる近頃出色の任命と稱すべし。唯、井上圓了氏の名を見ざるは、稍、物足らぬ心地す。

委員の人名を見渡すに、委員長たる前島氏は、漢字廢止を慶喜公に建議したる過去の經歷より見るも、假字論者なるを想ふべし。上田氏は言ふまでもなく羅馬字論者也。湯本、大概

の諸氏は前島氏と同じく假字論者也、三宅氏は、恐らくは漢字制減論者ならむも、究竟の國字としては、假字、若しくは羅馬字を主張する論者ならむ。是れによりて見れば、國語調査會の大多數は假字論者なることに於て動かすべからざるが如し。是の點より見るも、是の調査會に於て井上圓了氏の絶對的漢字保存論の氣餒を聞く能はざるは、少しく遺憾とすべきにあらずや。

其れは扱置き、吾人の同調査會に希望する所は、其の所謂調査を一般方針に止めむこと、是れ也。是の會は國語調査會と稱すと雖も、其の重なる事業の國字改良にあること勿論なるべし、而して國字の問題は一朝一夕に規定せらるべきに非ず。是れが調査會たるもの態度は寧ろ慎重に過ぐるとも、輕率に走ることあるべからず、且つ夫れ専門の事項に至りては、世間各、其人あり、吾人は當局者が委員諸氏を推薦したる旨趣、亦是に存することを信ずる也。

調査會の通弊

吾人は是の際、所謂調査會なるものの通弊に關して當事者の注意を求めむと欲す、是れ調

查大流行の今日に於て、決して無用の注意に非ざる也。

調査會の委員に任命せらるる人は、各、夫れ夫れの業務に執掌して、多くは日尙ほ足らずとする人々也。是等の多忙多事なる人々に一片の辭令を交附し、些少の手當を給して、某々の事項を調査せしめむと擬す、果して何程の効果を望み得べきや。人各、本職あり、専門の業務ある以上は、調査會なるものは是の人に向つて其の個人的責任の全部を要求すること能はず、謂はば無責任也。無責任なる委員によりて、何程の事績の擧がり得べきや。調査會の名目や甚だ立派也、其の委員として朝野の名士を列擧することも、外觀は頗る立派也、然れども其の實效如何にと見れば、頗る考へ物に非ずや。

嘗て中學校教科細目調査委員なるものの任命せられたることあり。當時其の學科の調査主任たりし某博士、このごろ某學科に關する一教科書を編輯せしに、其の組織程度、何れも前年調査の結果に違はず。人あり是れを糺せしに、博士は其の意外に驚けるものの如く、前年の調査主任は名目のみにして實は關知せざりきと答へたりと謂ふ。調査の内幕、動もすれば是の如くなり易し、吾人は是の點に關して、世の調査會を組織するもの、并に其の委員に任

命せられたる人々の三省を要めざるべからず。由來調査會、諮問會の議決重んぜられざる主なる理由も亦是に存するに非ずや。

調査會は須らく多方面なるべし

吾人は又調査會組織者に向つて注意を要むべき事あり、調査委員の任命の成るべく多方面ならむこと、是れ也。

調査は讀んで字の如く調査也、未定不明の事項に對する調査也。若し當局者にして豫じめ成心を挟み、もしくは方針を前定して、而して同臭味の委員を任命せむか、是れ最早や調査委員に非ずして證明委員也。調査會設立の精神とは全く見當違ひと謂ふべし。

吾人は是の點より見て、前に述べたる國語調査委員の中に、絶對的漢字保存論者たる井上圓了氏、如何なる種類の文字を採用するにせよ豫じめ新國字調査の必要を認めたる井上哲次郎氏、或は絶對的新國字論者たる某々氏等の名を見ざるを遺憾とする者也。例へば新國字論には有力なる學者の代表者なしと雖も、其の中には必ずしも國字改良論者の傾聽すべき言議無し

とは斷すべからず。修身教科書調査委員に關しても亦同様の遺憾あり。當事者は何故に、例へば三田派の倫理主義を代表する學者をも任命せざりしや、或は多少宗教的臭味を帯びながらも、當代の道德に關して傾聽すべき意見を有する學者、世に少からず、當局者は何故に是等の人々をも委員中に加へざりしや。吾人は一個人として宗教的道德を取らずと雖も、今日尙ほ一定の決案無き最も未了不明なる修身教科書の調査會としては、廣く是等の人々を收容するを利とせずや。

是の如きは一例のみ、世には公平なるらしき調査會てふ名を藉りて、陰に自家の私見を貫徹せむとする野心家夥からず、即ち是の言ある所以也。

(明治三十三年五月)

板垣伯と福澤氏

人の傳ふるを聞く、板垣伯は自己の養成したる政黨が今日の如く墮落せるを以て、深く悔恨せりと。吾人は問はむと欲す、福澤氏は三十年養成し來りたる所謂三田學風に對して、伯と同一の悔恨無きを得べき乎。

政治上の自由主義も、倫理上の功利論も、明治の初年に於ては慥に我が文明にとりて新しき福音なりき。唯、之を三十三年の今日に施さむとす、柱に膠するの痴に類せずや。三田學者の道德の進化を説くや甚だ力めたり、而も自家道德主義の三十年來畫一單調なるを如何。

三田翁の所謂道德

福澤氏の所謂「修身要領」出でてより、是れに對する批難の聲漸く高し。其の個人主義の

極めて極端にして極めて幼稚なる、十八世紀の自然主義を反復して而して自主獨立と稱するの突梯なる等は暫く言はず、道徳を解して處世の法と爲すに至つては、吾人は福澤氏の道念の甚だ低きに驚かざるを得ず。

處世の法とは世渡りの術に非ずや。道徳を以て世渡りの術と爲さむか、世に阿り時に循ひ眼前尺寸を彌縫するを事とする便佞利巧の徒は是れ即ち大道徳家と云ふべきに非ずや。道徳の大と深と高と、何處にある。福澤氏斯の主義を取りて子弟を教育すること三十年、所謂三田學風なるものの世に出でしことの偶然ならざるを認むる也。

然れども『修身要領』は、恐らくは一般世俗に向つて道徳の初歩を説きたるものに過ぎざるのみ。是れを以て道徳の根本主義と目するものは、恐らくは福澤氏の素志を知らざるものならむ乎。遮莫、今の世は世渡り術に長じたるもの多きに勝へず。若し眞に哲人世を憂ふるものあらむか、世に教ふる所の道徳主義は、高大なる理想の上に性格の修養、中心の陶冶を效すべきものならざるべからず。福澤氏の所謂『修身要領』は寧ろ饜けるものに食を強ゆる也。吾人は其の結果の却て世の腐敗を助成するあらむを恐るゝ也。(明治三十三年五月)

『修身要領』の巡回演説

福澤翁の『修身要領』には感服し難き點あれども、是の要領二十九箇條が、福澤諭吉氏の性行を代表せる點は、實に感服の外無し。

今の世に理窟家はあれども實行家は乏し。論語が孔子其人の性行なればこそ活ける力もあれ、ただの理窟としては誰にても言ひ得る事也。道徳の感化は其人にありて、其言にあらざるとは、こゝ等の道理を言へる也。

吾人は是の點より見て、所謂三田學風なるものが、人物養成の上に於て偉大なる効果を有せしことの、如何にも尤もなるを認むる也。『修身要領』は、道理上よりは餘り褒めたるものに非ざれども、それが福澤氏其人の人物によりて代表せらるゝ上に於て、遊説などの場合に少からざる便宜あるべく、又實際感化力の大なるものあるべし。世には道理上より『修身要領』を否認する人はあれども、其れと反對の倫理説を性格の中に實現せる人物無し、斯かる人物

無き間は、反對説の實際の效果は果して如何あるべき。頗る残念なる事共と謂ふべし。
 されば、『修身要領』を否認せる人は、嘗に其の言論に於てのみならず、其の人物に於ても
 是れを否認せざるべからず。

(明治三十三年六月)

學風に就て

一 學生と社會

學生の意風が社會と共に變遷するは已むを得ざることなれば、往年の學風をのみ尙ぶは謂
 はれ無き事也。明治十年代の大學生が政治運動に容吻し、今日の學生が讀書にのみ耽るを見
 て、今の學生は無氣力なりと一概に批難し去らむは山々しき誤りなるべし。總じて學生は未
 來の國民なり、いまだ是れ一個の兵卒にならざる丁年未滿の壯丁也。幼稚なる社會は是の未

熟の壯丁をも徵集して實務に當らしむることあり、是の如き時代には、學生は政治社會の一
 要素ともなることある也。例へば千八百四十八年に維納大學の學生が卒先して革命運動を起
 し、が如き、或は魯國大學生が常に自由運動の主動者たるが如き、又近くは二十年前の我が
 大學生が政談演説を試みしが如き、何れも是の類也。されば學生が學問を抛ちて社會の事に
 關はるは、學生の功績に非ずして、社會の恥辱也。精しくは、社會が學生の幫助を要するま
 でに不完全なるを證する也。

然るに世には一種の論者あり、今の學生が政治上社會上の事に關はらざるを見て、學風萎
 微、氣力消耗の徴なりとす。こは時勢の變遷を無視せる愚論にして取るに足らず。吾人は今
 の世に未熟なる學生の干涉を要すべき事業無きを見て、むしろ社會の進歩を喜びこそすれ、
 是れを以て學生の恥辱とせむなどは思ひも寄らぬ事也。

二 學生の幅の利く社會は幼稚也

學生の幅の利く時代は、總じて幼稚なる時代也。試みに坪内雄藏氏が『書生氣質』を著は

し、ころの社會と、今日の社會とを較べ見よ、精神上に於ても、物質上に於ても、其の懸隔殆ど同日の論に非ざるべし。而して今日坪内氏よりも優れる小説家が（假りにかゝる小説家ありとして）今日の大學生の内幕などを書きたりとして、社會は往年の「書生氣質」に比して十分の一も注意せざるべし。畢竟、書生自らに然したる優劣は無けれども、是れに對する社會に大いなる懸隔あれば也。大學の書生が世の中に持て囃さるゝ間は、社會は中々に幼稚なりと知るべし。されば予は將來に於て大學生が全く世人の注意外に置かるゝ時代の、我邦に來らむことを希望するもの也。

三 都會と地方と孰れか學問に益ありや

學問の爲めには都會と地方と孰れが優れりや、と云ふ問ひは、予が數く遭遇する所也。本誌(時學)の讀者中にも、是れと同一の疑問を有するもの多かるべしと思惟するを以て、左に予が常に答ふる所の言を載録すべし。

答へて曰く、都會にも地方にも、長所あり短所あり、一概に其の優劣を辯すべからず。唯、

其の長所と短所との如何なる點に存するかを明に了解し置くは、學生諸子にとりて極めて肝要なることなるべし。

都會の學生は社會の活動に接觸すること多きを以て、割合に早く時勢を了解し、随つて是の時勢に適應する如き針路及び事業を撰ぶことを得べし。是れ地方の學生の概して有し難き利益也。例へば工業の盛んなる時節には、學生は平生の見聞によりて是の事を知るが故に、工業家となりて社會の需用に應ずるを得べし、是れ都會の長所也。然るに地方の學生は、概して時勢に暗きが故に、例へば社會に需用の乏しき學問を修めて、卒業後方向に迷ふが如き事無しとせず、是れ地方の短所也。

然れども長所にも其の弊あり、短所にも其の利あり。都會は概して社會の刺戟餘りに強きが故に、少年學生の未だ固定せざる思想は、やゝもすれば是れに搖かされ易し、随つて世間の風潮につれて左右し、浮沈し、終には流行を追ふて極まる所を知らざるに至る恐れ無しとせず。言ひ換ゆれば、自己の獨立心を失ひ易し。されば都會の學生は處世の道に長じ、如何なる境遇にも其身を全うする利益はあれども、一世の機先を制し、社會の風潮に先つて破天

荒の偉業を濟すが如きは概して望み難かるべし。是れ都會の短所也。然るに地方の學生は平生世間の風潮流行に遠ざかれる丈けに、是等の風潮流行に搖かされ難し。随つて專念一向、自由に天稟の性情を發揮し、其の獨立自尊の心を涵養することを得。故に彼等は處世の道に拙きも、其の心事の高大なるもの少からず。言ひ換ゆれば、彼等は往々世に合はざるも、翻つて世を己れに合せむとする勇猛心を有す。されば一世の風潮に先ちて前人の未だ企てざる偉業を成就する、所謂革命の兒、理想の兒は、都會よりも地方に多し。是れ地方の長所也。是れを一言すれば、都會にも地方にもそれく長短あり。社會に適應するは都會の長所なれども、流行風潮の奴隸となる恐れあるは其の短所也。社會の實情に暗きは地方の短所なれども、獨立自尊の心を維持し得るは其の長所也。學生及び其の父兄は、其人の性情に鑑みて適當の監督を是の間に施さむことを要す。

(明治三十三年六月)

人格の力

世間には、オーソリチーに對する信仰とし云へば、直ちに迷信と同一視する人多し。されど吾人を以て見れば、オーソリチーに對する信仰ばかり、たしかなるは少し。

オーソリチーを信ずとは、其の言を信するに非ずして其の人を信する也、其の高大なる人格の現はれたる一形式として其の言を信する也。人の知には到らざる所あり、人の情には達せざる所あり、宗教茲に立ち、信仰茲に本づく。こは人の弱點ならむも、人として免れ難き、殆ど必然とも云ふべき弱點也。オーソリチーに對する感情は一種の宗教也、吾人は是の偉大なる人格の中に於て、知り難きことをも知り得べく、感じ難きことをも感じ得べしと信する也。かゝる人格の發表としては、一言一行も吾人にとりては言ふべからざる高大なる意義あるが如く觀らるべし。古の所謂言は大なるもの即ち是れ也。

法學校の一年生に伊藤侯(文政)位の政治論は随分出来るものあるべし。哲學を一通り學びた

らむ人は、加藤博士(加藤博士)の功利論位は説き得ずとも限るまじ。唯、吾人は其説の伊藤侯の口に出で、加藤博士の筆に上れるを見る時は、何やら重みある様に覺ゆ。こは理外の理也。所謂オーソリチーの信仰也。天下の事、概ね是の如し。

されば其の言を以て相争ふは表面上の事也、争ひの根本は人の争ひ也、性格の争ひ也。天下は道理もて動かし得べしとする人あらば、そは未だ共に談ずるに足らざる人也。

(明治三十三年七月)

卒業生諸子に告ぐるの辭

今七月は、帝國大學を初めとして、各官私立學校の學年の終りなれば、例によりて幾百の卒業生の世に出づる時也。吾人は是の機會に臨みて、卒業生諸氏の前途を祝し、併せて諸子に警告するところあるべし。屢に一日の長を頼みて訓誡がましきことを述べむは如何はしけれど、諸子に於て探るべき所を探る、毫も妨げ無かるべき筈也。

我國にては、學校の生活と社會の生活とは殆ど全く没交渉の有様なれば、卒業生諸子が學校を離れて社會に出でたる曉には、一寸方向に迷ふことあるべし。例へば、學校の教師とか官吏技術師とかになる人にありては、其の前途坦々として他奇無からむも、一個人として社會に打つて出で、何等かの事業を爲さむには、中々熟慮を要する事と知らるべし。社會は思ひの外複雑なるもの也、又思ひの外公平に、思ひの外徳義、優劣の制裁あるもの也。恐らくは諸子が寄宿舎又は下宿屋の窓より窺ひたる社會とは、是の點に於て大いに異なるものあらむか。學校の教師は動もすれば社會を惡魔の集會所の如く言ひなせども、かゝる單純なる思想もて實世界に臨まむは、恐らくは諸子の爲に計る所以に非じ。諸子にして社會に出でたる以上は、社會を敬せざるべからず、其の制裁には服従せざるべからず。能く馬を御するものは、先づ馬に乗らざるべからざると一般、世を改善せむとする人も、先づ世に住まざるべからず。是の一段の覺悟を定めむは、諸子にとりて處世の第一義なるべし。

されば、學問が研究によりて始めて會得せらるゝ如く、社會も亦研究無しには理解し難きものなり。卒業生諸子は、社會に出でて身を處するに當り、暫くは丁稚奉公の覺悟無かるべ

からず。

將來學術の研究に身を委ねむとする人々が、學校卒業後、早々著書おまけを公にし意見を發表するには、よく／＼慎重の態度を取るべき也。一度び世に公にせる著書論文は、容易に取消し難し。良しむば人の一生は不斷の進歩にして、昨非今是が常住の眞理なりとも、世人の大方はかゝる寛裕なる判断を以て吾人を待つものにあらず、動もすれば古疵を捜し出して新しき攻撃の材料にする也。されば豫言者と雖も其の鼻垂はなたれしの生立おたてまでも知りぬける故郷の人には尊ばれざるが世の習ひとかや。こは斯く言ふ記者なども随分經驗あることにして、今日より考ふれば、冷汗背を潤うるほすこと一にして足らざるぞかし。所詮は未熟なる思想をば取急ぎて世に公にせる報ひ也。新に學校を出でられたる卒業生諸子は、深く茲に慮るところありたきもの也。

斯く言はむは誠に易き事ながら、扱て是れを實行せむはなかくに難し。卒業生諸子の大多数は卒業後には其の家計を維持するの責に當らねばならぬ人々なるべし。家計を維持するまでにあらざるも、少くとも親の脛カヂリを離れて獨立の生活を営まねばならぬ人々ならむ。

一言すれば、諸子は其の卒業と共に自活の資金を求むるの必要ある人々ならむ。兎角は是の必要に迫られて、心にもなき未練の事を仕出かすなれば、是の處の困難を切り抜けて、兩全の策を講ずるが肝要也。是の爲には卒業後の生活は、學生時代よりも一層苦しき生活なることを前以て覺悟し、是れに勝ゆべき意志の修練を力むべき也。

吾人は、以上の言を以て卒業生諸子の前途を祝せむと欲す。諸子夫れ吾人の言の無禮を責めずして其の意の在る所を探れ。

(明治三十三年七月)

文藝消息

◎新體詩家土井晚翠君は、今回歐洲遊學を思ひ立ち、來る六月に渡航致さるべしとの事、羨ましき儀に御座候。外國文學の爲に外國文學を研究するは無意味なりとは、同君平生の持論なれば、今回の壯舉も、吾が一個人の娛樂に止まらざるべきは勿論の事に御座候。文壇の沈滞既に年あり、偏に英才の出づるを待つもの如し、努力せよや君。

◎聊か方面は異れども、等しく藝苑の佳信は中村不折君の佛國留學に御座候。其の渡航の期は未だ聞き及ばず候へども、近き將來に於て決行せらるべきは疑ふべからず候。君が有望の才は天下の人の齊しく認むるところ、將來の造詣測り知り難きものあるべく候。小生は讀者と共に晩翠、不折、二君の健康を祈り申候。

◎光琳一派の展覽會は預期の如く去る二十一日閉場せり、斯道の學者鑑賞家には多大の満足と與へたるべく候。かゝる古名家の展覽會が續々開かれむことは、一國立美術館の設けな

き今日に於て、セメテもの便宜と存じ候。

◎光琳に就て思ひ出し候が、頃日光琳の傳記を調べむと思ひ立ち、諸書を涉獵したれども何れも零碎断片のみにて、一も満足なるもの無く、已むを得ず英佛人の著書を探索せしに、佛人ゴンス氏の光琳傳、尤も精博なりし。外國人の熱心は何時もながら敬服なると同時に、本邦學者の意氣無きにも毎度ながら呆れ申し候。殊に扶桑名畫傳の如き、最も完全なりと稱せらるゝ畫人傳にすら、是の天才に就て一筆も記する所なき事、たゞく喫驚の外無く候。

◎三十萬圓の大學基金募集の爲に先に書を四方に頒ちたる大隈伯は、今回自ら信越地方に遊説に出懸けらるべしとのことに御座候。まことに殊勝の儀と存じ候。

◎春老いて滿地の落英亦泥沙に委し去られ候。昨は狂歌漫舞の地、今日ボンヤリして歩けば、查公は左側を行くと吐り申し候。香氣なる日は早く過ぎて、世は日にましうるさく相成申し候。

◎都は牛込あたりの塗板塀の中には、木蓮の花咲き居り申し候。大久保の躑躅も盛り近くにからんと存じられ候。野は緑の色をたゞえて、カアベツトを敷きたるが如く、蒲公英、蓮華

草、董など春を競ふさまなか／＼面白く候。以上。

(明治三十四年四月)

* * * * *

◎明後三十五年^{「六カ」}を期して大阪に開かるべき博覽會に於ては、從來の慣例に隨へば其の首班に列せらるべき美術をば最後に廻すことに、是の頃の評議員會にて決定せし由、美術家中には早くも是の事實を以て博覽會當事者が美術を輕蔑せる徵候なりと憤慨し居る者もありとの事、さりとは大人氣なき儀に御座候。但し何人にも想像し得らるべきは、今回の博覽會評議員が、重きを實業に置きて、寧ろ不生産的事業を獎勵せざるの一事に御座候。

◎作歌の巧拙を争ふて決闘せむとしたる歌人、大分縣にあり。鬼神をも泣かしむべき技藝とこそ聞きつるに、さりとは殺風景の極みならずや。

◎會ては言文一致會の發起人たりし林養臣君と、今の帝國教育會内の言文一致會との間に面白からぬ關係ありし由は、先般の新紙上にて讀者の知了せられたる所なるべし。然る處、同君は今回「新文」と題する言文一致の雜誌を發刊し、日本國內にて言文一致會と稱し得るも

の^{△△}「新文」發行所の外にあるべからずと宣言致され候。是れ明に帝國教育會内の同會との看板争ひ也。後者に於ても黙止し難しとにや、此頃是の件に就て會員の評議ありし由、其の曲直如何は暫く置き、帝國文教上の一大事を控ゆる者が、かゝる蝸牛角上の争ひに識者の笑ひを買ふは、感服致し兼候儀に御座候。

◎雜誌「文庫」に關係せる青年文士に就て、當代の人物何人を理想とするかと問ひし人あり、答ふるもの二十人許、中にて星亨、正岡子規を挙げしもの各、三。島田三郎を挙げしもの四。中には伊藤博文を挙げしものもあり、何等かの参考にも相成べくや。

◎増島六一郎君の主管の下に發刊せらるゝ雜誌「春秋」は、今の群雜誌中、一風變りたるものに御座候。極めて冷靜なる法律家的常識より割出せる社會的批評は、時々人の耳目を新にするものあり。近刊の中に、櫻花を伐盡して松柏を植ふよと論じ、文學者とは新聞の三面雜報を書くヤクザ者なりと罵り、月島丸の未練らしき搜索は、海國民の抱負を侮辱すと慨せるなど、中々面白く讀まれ候ひき。兎角は文學者などの偏狹優柔、世間知らずの觀察の得て及び難き所是れあり申候。

◎青年文學雜誌の地方に現はるゝもの、月毎に多きを加ふ。畢竟未熟の青年にして文筆を弄するは、當今學風の一弊として數ふべき事と存じ候。

◎新緑漸く深く、世は藤、牡丹のさかりと相成申候。やがては梅雨の候とも相成るべく、今より思ひ遣り候だに厭はるゝは都會の泥濘に候。以上。

(明治三十四年五月)

◎菲律賓の義戦も、首領アギナルドの就縛より頓に結局に近きたりとの報道に接して、小生は是の小英雄の譽れある生涯か一傳奇小説の資料として絶好なるべしとの想像を禁じ得ず候。十九世紀末の東洋を後景として人種競争の上に基く帝國主義の暴力と、是の憐れむべき暴力の犠牲が尙は祭壇の上に叫びたる正義の聲とを満足に描かば、如何なる小説家の野心をも飽かしむるに足るべしと存じ候。

◎アギナルド一身の進止に視るも、宛然として一個の活悲劇也。彼れが不當なる嫌疑の爲に己れを捕縛せむとしたる西班牙の士官を銃殺して、そが率るたる一隊の土人兵を慷慨の演

説もて心服せしめたる軍の門出より、亞米利加士官の三國志的術計に陥りて捕縛せられたる最後に到るまで、如何に傳奇的に出来居り候はずや。

◎我國の小説家は千篇一律の箱庭小説を何時まで繼續せむとする積りなるや。せめてはかかる着眼によりて局面の展開を期圖すべきにて候。

◎此頃大學の名譽教授になられ候方々類に相見え申候。故外山博士すら死後に及びて初めて贈られし程の高級學位が、今やかく多くの學者に受領せられたることは、日本學界の名譽と存じ候。

(明治三十四年五月)

◎過般全國聯合教育會にて決議せし數箇條の中に、公德養成の件と菅公の遺徳を表彰する件と相並びしは、一寸異様の感なきに非ず。歴史家は菅公に何等個人的道德の特に千歳に表彰すべきものあるを認めず候。而して所謂公德に關しては、公や實に東洋的爲我主義の惡摸本を止めたりと謂はざるべからず。聯合教育會が一方に於て公德を獎勵しながら、他方に於て

は是の没公德の模範的人物を崇拜せむと欲す、自家撞着の行爲に非ずや。

○菅公は終生自己一身を苦慮したる人に候ふ。自己の外に所謂公義を認めざる人に御座候。

其の政治上の退嬰主義、太政大臣の辭退、何れも一身上の安逸をのみ顧慮して君王寄托の大精神を無視したるよりの醜體に外ならず。其の數回の辭表を一讀するも、是の心事分明也。

こは東洋流の道德の一大弊竇にして、特に菅公を責むべからざるも、公德養成を主張して日も足らずとする今の教育家が這設の分別をなさざるは、畢竟没分曉の詆を免るべからず候。

◎紅葉君が宿痾療養の爲にとて先日伊豆修繕寺に赴かれ候折の紀行、讀賣紙上にて御承知の事と存じ候。煎豆や、椎茸の話のみにて、頓と趣味無きは御同感なるべく候。シャツや、ハイネや、ジエムソン夫人などの眞似は望み難しとするも、せめては、マーク、ツエーンの旅記位の觀察は、同君にも出來得べからむにと蔭ながら口惜しく候。

◎この頃の青年雜誌に洋畫とも日本畫ともつかざる一種の鶴畫あり、其の淺薄輕浮なる調子は心ある人に眉を擧ましめ申候。是れ畢竟西畫の皮相をとりて未熟なる邦畫に加味し、一向俗尙を迎ふるに力むるもの、一種のハイカラ畫に候。ハイカラ黨は政治界にも文學界にも

繪畫界にも是れあり候。以上。

(明治三十四年六月)

○花袋の『野の花』、是れ可憐なる戀愛談。唯、可憐以上に何等の讚辭を呈すること能はざるを惜しむべしとなす。其の觀察、情想共に幼稚にして、著者の所謂人生の歸趣なるもの亦太だ穉氣あり。著者よ、吾人の直言を許せ、野の花は失敗の作也。殊に西歐文學の愛讀者として知られたる著者の作としては、將來の名譽に對する大いなる負債也。

○『よつちやん』は菊池幽芳が其の愛兒の平生を誌せるもの、描き出されたるは尋常一様の小兒と尋常一様の父母とのみ。毫も他奇無し。

○角田浩々歌客の『出門一笑』は、著者が随時の漫筆を輯録せるもの、觀察文章共に見るべきもの少からず。まゝ人生の問題に逢着しては、輒ち著者が一種の性格の遙に俗流を超越るを認む。

○『仇浪』は紅葉及び其の門下の舊作を蒐めたるもの、題は涼葉の作によりて名けたる

也。涼葉が卷首の作、面白く讀まる。唯、卷中の白眉は夫れ鏡花が月下園か。装釘の美、近時稀に見る所也。

(明治三十四年八月)

標準建築

今の時は國民生活の亂離につれて國民建築の理想未だ一定するに至らず、其の趣好に統一無く、其の式に歸點を缺く。彼の工學者、建築學者と稱するもの、徒らに技工の一面に趨りて趣味の問題を知らず、漫りに外邦の糟粕を嘗めて國民生活の根據を顧みず。吾人は繪畫音樂に於て寧ろ幾等の進歩を見る。

吾人は、我が帝國大學若しくは帝室博物館に向て更に美術參考館を造り、以て標準建築を示すの覺悟あらむを希望す。

(明治三十一年三月)

嗚呼凡俗改革

吾等の生活の超凡脱俗のものに非ざること、吾等素より是れを知る。吾等は邦を護るに軍隊を要し、世を利するに金錢を要し、民を治むるに法制を要し、人を導くに教育を要し、自ら活くるに米鹽を要す。吾等豈國家社會よりの見地を無視するものならむや。唯、今の世の凡俗的改革に對しては、則ち憊焉たらざるを得ず。

改革の聲は今の社會の四隅に響き渡れり、されど其の聲の如何に凡俗なるよ。國字改良論者は曰く、今の國字は實用に適せず、教育上徒らに無益の年月を費すのみ、須らく改革せざるべからずと。言文一致論者は曰く、從來の文章は實用に適せず、教育上より見るも、經濟上より見るも、歴史上より見るも、言文一致たらざるべからずと。風俗改良論者は曰く、現行の服装は實用に適せず、衛生、經濟、道德の上より見るも百の害ありて一の利無し、宜しく改革すべき也と。教育改良論者は曰く、今の讀本の記すところは實用に適せず、今の外國語

の教授法は實用に適せず、兒童の遊戲も亦實用に適せず、宜しく教育的、道德的たらしめざるべからずと。凡そ今の所謂改革論者の唱ふるところ、概ね是の類のみ。何ぞ其の凡俗なるの甚しきや。

彼等の言ふところは經濟也、教育也、道德也、是れを約すれば實用の二字に歸す。彼等は是の二字を標榜して天下の事輒ち革新し得べしとなせる也。嗚呼何ぞ其の思想の凡俗にして而も單純なるや。借問す、實用の爲に人生ある乎、將た人生の爲に實用ある乎。抑、彼等の所謂經濟、教育、道德に於て、是の大いなる人生の歸趣は極盡せられたりとする乎。

吾等は素より實用を尙ぶ、されど實用以上に大いなる人生の歸趣あるを信ずる也。敢て彼等に告げむ、吾等は經濟の爲に活くるものにも非ず、彼等の所謂教育道德の爲に活くるものにも非ず。是等のものは人生が其の存在の目的を達せむが爲に要求する事物の一部分に過ぎざるのみ。夫の凡俗的改革者流は是の本末を顛倒せり。

試みに問はむ、彼等は其の所謂改革を唱ふるに當りて、何故に文學を言はざる乎、何故に藝術を説かざる乎、何故に宗教を言はざる乎、抑、彼等は文藝の事を以て人生と關知する所

なしとせる乎。吾等豈改革を喜ばざるものならむや、唯、夫の凡俗者流が淺近なる實用に拘泥して人生の大本を遺却するもの如きは、寧ろ初めより改革無きを可なりとせむ。

今の多くの教育倫理學者の言ふ所の如きは、吾等殊に是れを厭ふ。口體の外に趣味を解せず、功利の外に理想を知らず、拘々として力めざるに非ざるも、人生の大本歸趣に就ては藐然として會得するところなし。昔者ゲーテ、其のワグネルをして言はしめて曰く、藝術は永く、人生は短かしと。而して自ら歎じて曰く、吾れにして歌ひ、若しくは想ふこと能はずむば、吾が生命はありて無きに等しき也と。嗚呼何ぞ今の學者の説くところと異なるや。

蓋し今の凡俗者流の解するところの人は麵麩の人も、金錢の人も、能く世に處し、國に事へ、人に交るの人も。是の如き人を造るは即ち彼等の所謂教育倫理の目的也。是の如き目的を達する爲の運動は即ち今の凡俗的改革也。恐らくは世は是れによりて無事ならむ、國は是れによりて榮えむ。唯、是の如くにして造られたる人の、吾等の理想の人を去ること甚だ遠きを如何せむ。

嗚呼今の所謂改革は文藝宗教を度外視せり。口體の外に趣味なく、功利の外に理想なき今

の凡俗者流の云爲としては素より怪しむを要せざらむ。唯、是の凡俗的改革によりて誘導せられつゝある國民は禍なる哉。彼等時として功利の爲に文藝を言ふ、美育を唱ふる教育學者の如きは其の例也。されど美的要求は人性の本来に原づく、文藝其れ自らは何故に人生の目的たる能はざる乎。人性本来の要求を無視して何處にか教育あらむ、何處にか道德あらむ。吾等は豈改革を喜ばざるものならむや。唯、今の凡俗的改革に對しては、遂に同情を寄する能はざるを悲しむ。

(明治三十四年七月)

偏狹なる獨逸

○獨逸崇拜は、政治界でも學問界でも文藝界でも一種の流行となつて居る今日、偏狹なる獨逸を我同胞に知らしむるは、強ち無用な業ではなからうと思ふ。

○獨逸人は、排外の思想に富める點に於ては世界に屈指の國民である、殊に異人種に對する惡感情は實に甚しい。歴々七十萬の猶太人が、今日如何に是の國民の爲に苦しめられ居るか。ハイネ、ビヨルネの如き、所謂「少年獨逸」の祖宗なる恩人すら那の様な迫害を受けて、今も尚ほ一個の紀元碑〔念〕すら建つることを許されないと、いかにも驚くべき事では無いか。亞細亞人に對する嫉惡の感情とても亦決して是のアンチセミチズムに譲らない。

○今の皇帝ウヰルヘルム二世は、獨逸の時代精神の權化と言はれて居るが、帝の亞細亞人種排斥主義は、隠れもない事實である。帝の主義は、極言すれば亞細亞人撲滅主義である。是の恐るべき主義の下に、極東に於ける獨逸の勢力が活動しつゝあることは、吾々の痛切に

覺悟すべき所であらう。

○去る四月十九日のロカール・アンツアイゲル（獨逸首相ビューロー伯の機關新聞）には、北京宮殿の火災に關して左の如き論文があつた。亦以て獨逸人が亞細亞人に對して如何に好意を持つて居るかが分る。

北京の不幸なる火災は、公報にては放火ではないとあるが頗る疑はしい。元來蒙古人種は放火の人民である。ニーベルンゲン物語にもある如く、かの蒙古の大將アッチラの行爲を見ても、匈奴其他の蒙古人は放火の天性を有して居る。露西亞人は歐洲人ではあるが、多くの點に於て亞細亞人に似て居る。一千八百十四年に於けるモスコの放火も其の爲である。是れによりて見れば、今度の火災も恐らくは北京占領に對する支那人の復讐的放火であらう云々。

何と驚くべき邪推ではないか。讀者よ、吾邦の一舉一動も亦是の如き邪推によりて想像せられないと云ふことを誰が保證するであらうか。

○獨逸は學問の邦と云はれて居るが、其の所謂學者は概ね學問の外には何物をも知らず、

關らざる片輪者である。謂はば人間の心の作用の一部を抽象して是れを權化したのが、所謂獨逸風の學者である。吾々の言葉で評すれば、腐儒とは正に彼等の事を言ふのである。彼等には學問ありて、社會も、人類もない。人物の修養など云ふことは獨逸人には解らぬ事だ。其の一つの證據には、獨逸には道德修道に關する一個の國體、又は運動も無いではないか。

○普魯西は獨逸の主腦である丈に、獨逸人の偏狹なる特質を最も好く現はして居る。

○獨逸には文學、哲學、音樂の天才が輩出したることは諸君の知らるゝ通であるが、一人として普魯西又は一般に北獨逸から出たものは無い。多くはチューリンゲンの森の間、ハルツの山の南から出て居る。而して讀者はチューリンゲンは英國人の子孫が多い土地であることを記憶せねばならぬ。北獨逸に出た天才の唯一の例はカントである、然しながらカントが蘇格蘭人の子孫であることは明な事實である。

○然るに可笑しい事には、普魯西人は是のカントを他邦人の子孫とすることを遺憾とし、百方臆説を逞うして自國の人なることを證明せむとしつゝある學者が少からずある。獨逸の學風は大抵こんな種類のものである。何と興の醒めた話ではないか。

○獨逸人は異人種たる猶太人を國境外に驅逐するに熱心なる如く、他國語を自國の國語中より驅逐するに熱心である。彼等は是の無益の愛國心を現はさむが爲に、時に非常なる不便をも甘んじて受くるのである。

○是の頃の獨逸の新聞などには「フェルンズプレッヘル」といふ言葉が頼りに見える。いかにも珍らしい字であるが、是れは電話の羅句語、即ち「テレフォーン」の獨逸譯だ。是の勢では電信の「テレグラム」を「フェルンシユライベル」と書き直す時も遠くは無いであらう。

○神學の「セオロヂー」Theology と云ふ言葉は、歐洲では勿論一般に用ひらるゝのであるが、是の羅句語の原語を是の頃の獨逸人は自國語に直して「ゴッテスゲレルトハイト」などとコヂつけて居る。法理學なども、當然「ユリクスブルーデント」とあるべきところを、わざわざ「レヒツゲレルトハイト」などと他邦人には通ぜぬ言葉に直して使つて居る。是の類は甚だ多い。

○世界共通、萬邦平等であるべき學術上の用語すら、獨逸人は自國固有の言葉、他邦人の解らぬ言葉に造り換へねば已まぬのである。其の偏狹なる性質は想ひやらるゝではないか。

○偏狹なる獨逸人は同時に頗る粗野なる國民である。彼等の間に紳士てふ觀念のない事は英語のセントルマンに對する言葉の無い事でも解る。吾輩の友人が柏林大學の一教授の妻君に向つて、御身の國語の中に英語の「リフハイメント」と云ふ文字は無いではないかと問ふた所が、是の妻君拔からぬ顔をして、其れは大方「ベレヒメング」の事でせうと答へたとの事。あゝ「ベレヒメング」！獨逸語を解せらるゝ讀者は、是の一事にて獨逸人の如何に野卑なる人間であるかと云ふことが解るであらう。

○彼等の日本人嫌ひと來ては亦實に著るしい事實である。英佛人の中には、日本觀光の遊より歸りて、非常の日本最負となる人が少くは無い。然るに獨逸人は、十中の八九は必ず日本嫌ひとなつて國に歸ると云ふことだ。先年キリストリブとか云ふ耶蘇の先生などは、十年餘りも日本の土地に傳道を爲て居ながら、其の歸る時には殆ど惡魔の如くに日本人を罵つたとの事だ。想ふに是等は一例に過ぎぬ事であらう。

○今や日本の文部省が年々出す所の留學生の大多數は、是の偏狹、粗野、日本嫌ひ、東洋嫌ひの獨逸國に派遣せらるゝのである。其の結果として獨逸風の學者——腐儒が年々殖える

のである。是れは當局者の一考せねばならぬ所だ。但し一女優の接吻を五百マルクで買った先生などの例外な事は勿論である。

(明治三十四年七月)

吾人の預言

凡俗改革の失敗、吾人敢へて是れを預言す。體裁稱謂如何に備はるも、人性の至然を無視するもの、何處にか成功の途を求め得べき。

敢て彼等に告げむ、歴史は凡てのもの最大の敵者也、是れに打勝つべきもの、唯、人性自然の要求あるのみ。見よ、古來自然主義を外にして、能く改革の實効を挙げしもの果して是れありや。凡俗的改革者流は是の簡明なる事實を如何と見る。

兆民とハイネ

兆民居士の末路は、人をして詩人ハイネの晩年を聯想せしむ。

ハイネ、曠世の奇才を抱いて人に背き、世と離れ、晩年流浪して巴里に客たり。偶、癩疾に罹り、全身麻痺して起居意の如くならず。兩唇は開けたるまゝにして、眼瞼亦閉ぢず。是の如くにして其妻の看護の下に一室に仰臥すること殆ど十年。而して病少しく衰へて指頭屢に動くや、即ち筆を執りて休むことなし。其の「レッツテ、ゲヂヒテ」は實に是の如くにして成りたりき。何ぞ兆民居士の昨今と相似たる。「一年有半」既に成りて居士京に入る。聞説らく、京に入るの後、病ひ俄に革まる。居士是の間に於て更に一大論策の著述に着手せりと。嗚呼、是の人にして是の病ある、天乎命乎。

天下第一傷心の事

生きむが爲に言ふもの、言はざるも尙ほ可也。言はむが爲に生きるもの、是れ言はしめざるべからず。

嗟呼、吾人の生きるは言はむが爲乎、吾人の言ふは生きむが爲乎。天下第一位心事、省みれば彼れにあらずして却て吾れに在り。

一年有半

『二年有半』の面目は能く性命憂患の外に超脱する所にあり。怒りて逼らず、哀んで泣かず、嘲罵の間尙ほ恬澹の禪味あるが如きは、當世名利の人をして慚死せしむるに足る。兆民居士の如きは、眞に死生の外に遊べるもの、吾人をして轉欽羨に堪へざらしむ。

學士の虐遇

聞説らく白井學士伯林に狂すと。同學狀を具して資を求む。文部省經費無しと稱して一金を送らず、直ちに命ずるに歸朝を以てす。國家、學士を虐遇する何ぞ一に酷だしき。

國家の無情

身は儼然たる學士、名聲夙に儕輩に布く。一旦命を被るや、暖飽の逸を捨て、團樂の樂を抛ち、薄資自ら給して遠く異域に遊ぶ。國家の爲に盡せりと謂ふべし。旅愁幾年、憂積んで其の人遂に狂す、命や慘憺たらずとせむや。然るに國家恤まず、却て狂癡の人に命ずるに歸國を以てす、無情も茲に於て極まれりと謂ふべし。

敢て問ふ、海外留學生諸君よ、諸君は是の如くにして安んじて萬里の外に越在することを得る乎。

人々自ら悟らざるべからず

喇嘛去り、モルモン来る、去來我れに於て何の關する所ぞ。今や、信仰は外にあらざして内にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否されば職業のみ。世の宗教と謂ふもの即ち是れ。

趣味ある旅行記

學者文人にして歐米に遊ぶものよ。吾人多くを望まじ、願はくは趣味ある一冊の旅行記を齎し來れ。歐米廻覽實記以來、旅行案内と政家年鑑との翻譯は寧ろ多きに過ぐ。願はくは吾人に示すに、自家の趣味と識見と批評とに本づける一大創作を以てせよ。グラーツ・フョーン・シヤックが『半世紀』庶幾くは以て範とするに足らむか。遙に想ふ、嘲風、晚翠、好在なりや、否や。

晩年の平和

近日嘲風、イルメナウに於けるゲーテの畫像を送り來る。心を傷ましむる哉。Ueber allen Gipfeln ist Ruh……、嗚呼是の老詩聖が晩年の平和と安心とは、吾儕の生涯に於て果して望み得べきことなる乎。凝睡多時、感慨何ぞ勝ゆべけむ。

抑、是れ何の才子ぞ

往年、拙堂、才子を論じて曰く、天下第一等の才子、秦漢の際、一の司馬長卿あり。魏晉の際、一の曹子建あり。皆華にして實少し。唐宋の際、一の蘇子瞻あり、其の言皆世用に切也。然らば即ち是れを千古第一の才子と謂ひて可ならむかと。今の高襟才子、華も無く實もなく、況や其の言、世用に關せず。抑、是れ何の才子ぞ。

(明治三十四年十月)

漫 評

○兆民居士の「一年有半」を読んだ人は必ず其の「續一年有半」をも讀んだであらう。眼前の死期、不斷の病苦、而して是の冷然たる哲學的思索に耽つて、無神無靈魂を説いて居るところは、眞に性命憂患の外に遊べるものならでは眞似の出来ないことだ。其の學說如何の如きは暫らく説くを要しない。讀者は、須らく居士が安立の醍醐味を箇中に觀想すべきである。

○薄田泣菫の「ゆく春」と云ふ詩集を面白く讀んだ。其の優しい、哀れな調子は、けにゆく春の恨みを載せて讀む者の耳に暮れゆく鐘の音とも響いた。ただ其の風格の單調和平に過ぐるのは餘り好ましく思はれた。

○世に天才を解し得ずして之を批評する程不釣合なことは多く無い。今のニイチエの批評

者の如きは大抵是の類だ。

○讀賣の「馬骨人言」と云ふのを書いて居つた匿名先生があつたが、連りにニイチエの攻撃をやつて居る。今迄の人の言ひ古るした事で何人も解し得る事だけは書いて居るが、扱て超人や轉生などの事になると流石に一言も述べて居らぬ。其の批評は如何にと見るに、やれ個人主義が如何だの、やれ歴史的發展が如何だの、やれ盲目反動だのと、從來俗學者の陳套を事珍らしげに陳べて居るが、やれく、斯んな手際でニイチエが批評し得らるゝものであらうか。ニイチエ一代に三段の變化などと人並の事を言つて居るが、ハヅロック、エルあたりのお里が見え透く様で誠に心細い議論だ。

○馬骨先生はニイチエの何書を読まれたのか、「イエーザイツ……」か、「フェルツング……」か「ザラツストラ」か、是の中一巻でも慥に讀み得たと吾人に誓ふことの出来るか如何か。英譯でファウストを讀んだとて、何でそれがゲーテ通であらう。それでニイチエがゲーテを讀んだの讀まぬのとの詮議立ては餘りに押しが強くあるまいか。

○そして又其の批難の方法の淺薄常套なると共に、其の書き振りの輕薄さと來ては何とも

申し様が無い。この人生の一大事の論議に口上茶番の口吻では、どんな議論でも其の人品が思ひ出されて聞く氣にならぬ。況してや馬骨先生の是の論の如きものに於てをやだ。馬骨先生とは何れ早稻田あたりの末派でもあらうが、お師匠様の諷諧の筆もさうく場所柄を辨へずに下手に真似られては堪つたものでない。

○自體ニイチエは學者では無い、其の言ふ所を學說などと見るが抑の誤りだ。彼れの述ぶる所は學說以上の理想、學說以上の想像、謂はば人間靈性の呼吸を以て直ちに人の肺腑に通ずるにあるのだ。其れを俗學者流が自家の例の歴史論や倫理見に照らして彼れ此れ批難し得たつもりで居るのは何たる滑稽であらうぞ。斯かる俗學者流に一大頓悟を與へむが爲に、取りも直さずニイチエは生まれ出たのである。

○世にはニイチエの歎美者と云へば直ちに其の所説の實行者として驚怖するものがあるが、まあ何と云ふ阿呆らしい事であらうぞ。如何にゲーテの崇拜者だとして、エルテルたり、ファウストたり得る者が世にあらうか。如何にバイロンの崇拜者だとして、アンフレットやサルダナパラスが真似らるゝものか、如何か。ハイネや日蓮の通りにしては、一日も是の國には居られまい。釋迦や基督を真似たらば、直ちに巢鴨に送らるゝであらう。

○吾人は吳々も世人に告ぐるのである。吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豊富にし、是れによりて自ら慰め、自ら勵み、かねて是の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。凡俗者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前蹤によりて少からず確かめられ、且つ勵まざるゝのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を活かし、且つ固むるのだ。是の間の消息は、倫理見や歴史論でニイチエを批評し得たりとするの輩の窺知を許さぬことは言ふまでもないのである。

(明治三十四年十月)

留學生諸君を送る

二十八名の文部省留學生諸君よ。國家が拔擢したる青年學者の選良たる諸君が、是の名譽ある拔擢に負かざるの準備と抱負とを存し居るべきは素より言ふまでも無し。吾人は茲に將來の日本が諸君に期待する所の甚だ輕小ならざることを一言して、諸君の覺悟を確かめざるべからず。

留學生の濫發とは、吾人の數、耳にする所也。吾人は聰明なる當局者に於て是の如き訛傳を生すべき措置無きを確信すと雖も、諸君は當に事實によりて是の如き疑惑を氷釋すべき位置に立てることを忘るべからず。日本は將來に於て益、多數の海外留學生を要すべし。今に於て區々の惡評の爲に留學生の品位を失墜するが如きことあらば、眞に國家の爲に憂ふべしとなす。

留學生諸君が其の修學の土地、方法等に就て預じめ明瞭なる覺悟を有すべきは勿論の事なるべし。聞説らく、農學士某なる者あり、浮塵子研究の目的を以て獨逸に赴きしが、浮塵子の發生無き歐洲に於て是の如き研究の不可能なるを發見したるは、彼の地に到着したる後なりしを以て、某は已むを得ず昆蟲の一般研究を以て現に其の責を塞ぎつゝ、ありと謂ふ。吾人は本年の留學生諸君が是の如き失體を再演すること無からむことを希はざるべからず。

從來の留學生が語學の素養無きの故を以て其の留學年限の過半を徒費したる事例は、吾人が連りに耳にせる所也。是の如きは留學生として有るまじき事ならずや。既に外國に留學生と謂ふ、語學は言ふまでもなく其の第一の資格ならざるべからず。知らずして是れを任命するは當局者の過失なりと雖も、自ら知つて是の任命を受領するもの、はた緩急の責を免るべからず。吾人は本年の留學生諸君に向て切に是の事を警告するの無禮を忍ばざるを得ず。

吾人は留學生の待遇に關し、當局者に對して幾多の希望を有する也。然れども既に任命を受領したる諸君にありては、暫く今日の狀態に甘んぜざるべからず。吾人は一千八百圓の學資の甚だ豊かならざるを思ふと雖も、若し諸君にして書生の生活に復歸するの勇氣にあらば寧ろ其の多きを覺ゆべし。而して是の如き勇氣は常に貧少なる學資の上に生活することに於

て必要なるのみならず、其の妻子、父母に離れて、遠く萬里の外に越在するの旅愁に打勝つが爲にも、亦極めて必要也。吾人は是れ迄海外留學生の中、或は失神し、或は發狂し、或は病痾に罹りたる幾多の事例に接せり。而して其の十中の七八が懷郷の哀情に基けることを見聞せり。異邦にありて故郷を懐ふは人情の至然なりと雖も、諸君は暫く是の點に於て木強漢たるの覺悟無かるべからず。

諸君は各、専門の學者、其の學の益、博く益、深からむことは、吾人の素より希望する所也。而も茲に諸君の指定せられたる學術の研鑽にも劣るまじき一大事の、諸君に待つものあることを忘るべからず。何ぞや、人物の修養、是れ也。這般の覺悟素と平生に存すべしと雖も、三年の游學は特に其の好機會なりと謂ふべし。歴史は回顧すべく、偉人は追慕すべし、而して山河舊に依りて我れを迎ふ。人生の最も大いなる教訓と感化とはおのづから是の間に存すべし。諸君は是の天地の間到的處に於て、自然及び人生の上に鏤刻せられたる大文字を読むの準備なかるべからず、而して書籍の含蓄する所の如きは、人知の一小部分に過ぎざること覺悟せざるべからず。學術が人を殺したるの事例は吾人の日夕見聞する所也、諸君は當に

學者たるべし、然れども同時に人物たらざるべからず。我が國家の眞に要求する所のものは學者に非ずして實に人物にあり。敢て是の言を以て諸君の行を送らむ。

(明治三十四年十一月)

新聞小説

講談物、實歷物、盛んに行はれてより、新聞小説の調子亦一段の低きを加へたりと言ふものあり、眞乎。

小説の人を惹く所以は、自から講談實歷物に異るものあらむ。他店の繁昌を羨むで自家の賣品を捨つるの愚に類せずや。

是の如き覺悟を有するの小説家多くして、世、講談實歷物に赴くもの愈多し、然るに却て罪を讀者趣好の卑劣に塗せむとするに至つては、偶々小説家の弱志を露はす。

(明治三十一年三月)

雜談

○佛像に立坐像ありて半身像なきは何故なりやとは予が多年の疑なりしが、頃日法華會義を讀みしに、其の第四卷に優婆塞戒經の文を引いて「不許造半身像」と明記せるにて成程と首肯うなづかれたり。また同經に「立佛像前不應坐、坐佛像前不應臥」とある由見えたり。立像の前に坐して讀經するを非禮とすべきにや。

○本來佛教は美術的の宗教也。造寺造像の事は經典に其の功德を説いて到らざる所無し。法華經の方便品に十一の功德を數へたるを初めとして、一部經としては造像功德經あり、作佛像經あり、如來安像三昧經あり、造像量度經あり。前の三經は藏經中にあり、後の一經は清の乾隆中の譯也。何れも命令的に造像の事を説けるものなれば、是の宗教は世界の如何なる宗教よりも美術的なるものと謂ふを得べし。本邦の美術が佛教渡來と共に忽然として隆興せしも怪しむに足らず。

○佛教諸派の中にて、とりわけて美術的なるは眞言宗なるべし。淨土眞宗、日蓮宗などは非美術的なる宗派也。淨土眞宗にては例の一佛一體の事として造像の事極めて少く、日蓮宗の本尊は鬚題目の七字にして祖師像位がたかだかなれば是れ亦同斷也。されば鎌倉足利以後に佛教美術の衰へたる亦是れ怪しむに足らず。

(明治三十四年十二月)

罵倒錄

此秋から早稻田専門學校も大學になるさうだ。名前は如何様にでも御勝手次第に變へるが好いが、扱て其のほん物はドンナに變るのか、覺束ない限りだ。三十萬圓で大學が出来るものなら、大學は全で預言者の瓢箪ひょうたんの様なものだ。

○先づ固定資本に十萬圓はかゝらう、残りの二十萬圓の利足其外の收入を二萬圓と見たところで、今の高等學校の經費の三分の一にも足りない。苟かためにも大學と名の附く處に一時聞

一圓の日雇教師も使はれまいに、三大學を併せて二萬圓とは、天野さんの經濟學にも無い價格ではあるまいか。如何に廉物の流行る世の中でも、大學の廉物は餘り感服しない。

○金などは如何でも好いとした處で、其の卒業生は心配なものだ。當今文科大學の卒業生は毎年七八十人あるが、其の相場は年々下るばかりで、今では五六十圓の給料で田舎の中學校に行く位が上出來の部だ。向後三年五年を経、おまけに京都にも文科大學が出來る様になれば、卒業生は年々殖えるばかり。其の相場も年々下るばかり、仕舞には三四十圓の給料にも甘んずる様になるに違ひない。早稻田大學の文學科の卒業生は此等の帝國大學出身者と生存競争をしなければならぬのだが、扱て此の競争が甚だ覺束ないのだ。

○早稻田大學の規程では、中學校卒業生が一年半の豫修を終へたものを其の入學の資格としてある。即ち年限の上で官立大學に比すれば一年半の不足がある。加之早稻田大學に入らんとする中學卒業生は、高等學校の入學試験に失敗した落武者たるべきことは從來の例に照らして見ても明なことだ。即ち早稻田大學の學生は、其の能力に於ても、概して官立の學校にあるものよりも一段下れるものと想像するは少しも無理ではない。是の事實を言ひ換へれ

ば、早稻田大學の學生は其の修學年限に於ても、其の學力才器に於ても、官立大學に及ばざるものと言なければならぬのだ。斯う云ふ學生を二萬圓の經費で三大學に收容し、其の卒業の曉には、其の優勝者たる官立大學の出身者と競争せしめねばならぬのだ。高田さんや坪内さんが、如何に英吉利風の教育を振舞はしても、差當り此の難題を解決することは一寸容易ではあるまいて。

○斯う考へて見ると、早稻田大學の前途も中々心配ものだ。名前ばかりの校長や、舊式の政治屋などが、生嚙りの教育主義で切廻されては、是の學校も危いものだ。招牌が變つてお目出度がる連中は、少しは斯う云ふ悲觀的觀察をして見るが好い。

○今日は東京京都の二大學で澤山だ。若し國家が大學の爲に蓋す餘裕があるならば、京都大學の完成こそ目下の急務と云ふべきだ。それに東北大學などと騒ぎ立てる連中があらうとは、トント氣の知れぬ話だ。近き將來に立てるなどと漫言を放つた菊地さんも菊地さんだが、それを眞に受けてワイ／＼言ふ連中も連中だ。政治屋などと云ふものに何んで教育の事などが解らう、少し物の分り相な尾崎さんまでが、眞面目にこんな没分曉漢の代辯をして居たの

は、如何に政黨間の附合つひとは云へ馬鹿けた話だ。東北などに大學を立つる必要は目下少しも無い。金が餘らば京都を完成するが當局者の本務だ。世間の表面うへの外知らぬ新聞屋などは兎角京都大學を褒め立てるが、實際はなかく東京に及ばない。殊に理工科大學の設備の如きは、實に殘酷な程に不完全な所があるのだ。

(明治三十五年八月)

○一體今の教育、殊に私立學校の教育は、根本から誤つて居る。今や因襲日久しくして人の特に怪しむものも少いが、よく物の道理を考へて見るが好い。凡そ世の中では是れ程馬鹿氣たことは少いのだ。

○先づ私立學校なるものの教師が如何にして招聘されて居るかを看るが好い。堂々たる府下屈指の大私立學校でも、其の學校專任の教師は甚だ少い、多くとも二三人で、其の他は残らず時間割で雇ひ入れる、我輩の所謂日雇教師ばかりなのだ。そこで其の日雇教師の給金は法律學校の最上の處で一時間二圓、それから文學哲學などの學校では一圓乃至六七十錢が通

り相場で、中學校と來ては四五十錢が通例だ。是の時間給は、教師の方で休めば無論のこと、學校の都合で授業を休んでも矢張り差引くので、つまり現在教場に出た時間の數で給料を渡すのだ。全で日雇職人と少しも違ふところは無い。

○苟も教育の大事に當るものが、其の主腦機關たる教師をば、かゝる方法で雇ふと云ふことが一體大々的間違ひと云はなければならぬ。斯んな待遇法の下に良教師が得られ、良教育が行はれ得るものならば、それこそ人を造るは南瓜を造るよりも容易なことであるのだ。

○學校が既に教師を待つに日雇職人を以てする以上は、教師も亦日雇職人の覺悟で其の授業に従事する様になるのは致し方のない話だ。多くの教師の中には、無論給料や待遇の如何に係はらず、眞に學問の爲め、或は教育の爲に盡力する篤志の人も無いでも無からうが、其の大多數は單に賃銀を得る爲に教鞭を執るので、賃銀さへ取れれば其の授業の結果などに顧慮する者は先づ無いと謂つても差支は無い。それであるから、今の私立學校の教育は、やれ博士の學士のと肩書はやかましいが、其の授業の冷淡なること、生徒の爲などを思ふもの少いことは言語道斷と言ふの外は無い。斯んな風で教育も可笑可笑なものでは無いか。